
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第24集

小 台 遺 跡 (第4次)

1990.3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第24集

こ だい い せき
小 台 遺 跡 (第4次)

1990.3

深谷市教育委員会

序

深谷市は、首都圏のベッドタウンとして、また県北部の中核都市として、刻々とその姿を変えつつあります。しかし同時に、県内有数の生産高を誇る一大農産地帯でもあります。この深谷の地が北の利根川、南の荒川という2つの大河の創造物であることの何よりの証と申せましょう。

この大地と川が生み出した自然の恵みを求め、人々は太古よりこの地に集い、生活を営んできました。今回の発掘調査によって出現した縄文時代中期から後期に亘る遺構や遺物は、はからずもその生活の痕跡を私どもに示すこととなりました。現代の深谷に住まう者の一人として、約4,000年前に、やはりこの地を住処と定めた人々の姿が偲ばれます。

調査終了後、この地にはマンションが誕生します。深谷の地は、これからも多くの人々が住まう場所となり、私ども自身が、過去の記憶となる時が来るでしょう。その時、未来の人々に今日の私どもの有様と共にこの様な過去の記憶を伝えていくことは、義務であり、また重大な責任でもあります。そしてその時も、この豊かな大地と川が現在以上に美しい姿を保ち続けていることを願って止みません。

最後に、調査実施に際して様々な便宜を図って頂いた村本建設株式会社の関係者の方々、調査中御世話になりました地元の皆様に厚く御礼申し上げます、序といたします。

平成2年3月

深谷市教育委員会

教育長 鳥塚 恵和男

挿 図 目 次

第1図	深谷市主要遺跡位置図	第44図・第45図	第11号土壙及び出土遺物
第2図	調査区周辺地形図	第46図	第12号土壙
第3図	確認調査概要図	第47図	第12号土壙出土遺物
第4図～第6図	確認調査出土遺物	第48図	第13号土壙
第7図	調査区全測図	第49図・第50図	第13号土壙出土遺物
第8図	A区平面図	第51図	第14号土壙及び出土遺物
第9図	第1号住居炉跡	第52図	第15号土壙及び出土遺物
第10図～第12図	第1号住居炉跡出土遺物	第53図	第16号土壙及び出土遺物
第13図	A区検出遺構	第54図	第17号土壙
第14図	A2号土壙出土遺物	第55図	第18号土壙及び出土遺物
第15図	A3号土壙出土遺物	第56図	第19号土壙及び出土遺物
第16図	A8号土壙出土遺物	第57図	第20号・第21号土壙
第17図～第20図	A区出土遺物	第58図	第20号土壙出土遺物
第21図	B区平面図	第59図・第60図	第21号土壙出土遺物
第22図	第2号住居炉跡及び柱穴	第61図・第62図	第22号土壙及び出土遺物
第23図	第2号住居炉跡出土遺物	第63図	第23号土壙
第24図	B区検出遺構	第64図・第65図	第23号土壙出土遺物
第25図	B1号土壙出土遺物	第66図	第24号・第25号土壙
第26図	B2号土壙出土遺物	第67図～第71図	第24号土壙出土遺物
第27図・第28図	B区出土遺物	第72図	第1～第3トレンチ土層断面
第29図	第1号土壙及び出土遺物	第73図～第81図	第1トレンチ出土土器
第30図	第2号土壙及び出土遺物	第82図～第84図	第2トレンチ出土土器
第31図	第3号土壙及び出土遺物	第85図	第3トレンチ出土土器
第32図・第33図	第4号土壙及び出土遺物	第86図・第87図	第4トレンチ出土土器
第34図	第5号土壙及び出土遺物	第88図	トレンチ出土土製品
第35図・第36図	第6号土壙及び出土遺物	第89図～第93図	トレンチ出土石器
第37図	第7号土壙	第94図～第98図	表採土器
第38図・第39図	第7号土壙出土遺物	第99図・第100図	表採石器
第40図	第8号土壙	第101図	第1倒木痕出土土器
第41図	第8号土壙出土遺物	第102図	第2倒木痕出土土器
第42図	第9号土壙及び出土遺物	第103図・第104図	第3倒木痕出土土器
第43図	第10号土壙及び出土遺物	第105図	倒木痕出土石器

目 次

序	
例 言	
目 次	
I. 発掘調査に至る経緯	1
II. 遺跡の地理的環境と周辺地域の歴史的環境	1
III. 確認調査	4
1. 調査の概要	
2. 出土遺物	
IV. 本調査の概要	8
V. 検出遺構と出土遺物	10
i. A 区	
ii. B 区	
iii. 単独遺構	
iv. トレンチ	
v. 表 採	
vi. 倒木痕	
VI 結 語	102
写真図版	

例 言

1. 本書は、埼玉県深谷市大字上野台字御屋敷2,352番地外所在遺跡における、深谷ダイアパレスマンション建設工事に伴う発掘調査報告書である。事業名は、小台遺跡第4次発掘調査とした。
2. 発掘調査は、事業者である村本建設株式会社より委託を受け、深谷市教育委員会が主体となって実施した。現地発掘調査期間は昭和63年5月12日～7月13日、調査面積は、約3,000㎡である。
3. 調査経費は、発掘調査原因者である村本建設株式会社が負担した。
4. 本書の執筆、編集及び写真撮影は、古池晋禄が行った。
5. 挿図中の方位は座標北を示す。また、垂直図版における実測レベルは、特に注記の無い限り、標高55.500mに統一した。なお、遺構の説明における数値は、確認面においてのものである。
6. 出土遺物は、深谷市教育委員会が保管している。

写真図版中に見られる遺物注記に報文中の遺構番号と一致しないものがあるが、これは現地調査時のものであり、整理・報告書作成中に遺構番号の再整理を行ったものである。予めご了承頂きたい。

発掘調査の組織

調査主体者	深谷市教育委員会	教 育 長	鳥塚 恵和男
		教 育 次 長	坂本 幸一郎（昭和63年度）
			飯島 光武（平成元年度 社会教育課長兼務）
事 務 局	深谷市教育委員会	社会教育課	課長 飯島 光武
			課長補佐 橋本征彦（昭和63年度）
			須長欣二（平成元年度）
			文化財保護係長 田中島 功
			主任 関根 広子
			主事 澤出 晃越
調査担当者	深谷市教育委員会	社会教育課	主事 澤出 晃越（確認調査）
			主事 古池 晋禄（本調査）
調査参加者	朝倉なほみ、石井敦巳、宇賀地桂子、大原黎子、岡 悦子、落合成子、河西元子、加瀬律子、加藤佳子、神山智恵子、河合詔子、久米紀子、小沼和子、佐々木由紀子、佐藤房子、里山まり子、島津芳子、清水清子、首藤順子、鈴木令子、砂田伊久子、関口ゆき子、関口より子、関根仁子、高田弘子、高橋豊子、滝口知子、竹村久子、田辺華子、玉瀬静枝、都築百合子、鵜沢智子、外崎玲子、友松扶慈子、西井れい子、土師澄子、広瀬孝子、細川ケイ、水野祥代、本橋玲子、森 光代、山岸早苗、湯沢直子、渡辺哲子		

I. 発掘調査に至る経緯

深谷市は、埼玉県の北部に位置し、利根川を挟んで群馬県と接する地域に広がっている。室町時代には深谷上杉氏の拠点として、江戸時代には中山道や利根川水運の要衝として繁栄してきた一方近代日本経済界の偉人であり、社会福祉事業等の推進者である渋沢栄一を始めとした優れた人材を輩出してきた。現在では県内第一位の農業生産地であると同時に、最も都市化の進行している地域でもある。

今回の発掘調査対象である小台遺跡の所在する上野台周辺は、JR高崎線深谷駅より徒歩約20分という交通の便と、最近開発が著しい上柴地区に西接する市街化区域であるという状況も手伝ってその様な傾向が最も顕著に現れている地域の一つである。

昭和63年3月、深谷市大字上野台字御屋敷2,352番地外におけるマンション建設計画が、事業者である村本建設株式会社よりの照会によって明らかとなった。これを受けた深谷市教育委員会は、当該地域周辺が縄文時代中期後半～後期初頭の大規模集落である可能性が極めて高いことから（註1）、翌4月に確認調査を実施した。その結果、建設予定地の一部、約3,000㎡について発掘調査の必要が認められたため、市教育委員会は文化財保存事業の一環として本調査の実施を決定、埋蔵文化財発掘調査通知書（昭和63年5月11日付深教社発第441号）を提出し、調査準備に入った。

註1 小台遺跡の発掘調査は、本報告書刊行時点（1990年3月）において、5次にわたる調査が実施されている（本報告は第4次発掘調査）。各調査の報告は下記の通りである。

小沢 国平 「深谷市小台遺跡調査報告書」 深谷市教育委員会 1957

蛭間真一他 「小台遺跡」 深谷市小台遺跡調査団 1979

澤出 晃越 「小台遺跡（第3次）」 深谷市教育委員会 1987

古池 晋禄 「小台遺跡（第5次）」 深谷市教育委員会 1989

II. 遺跡の地理的環境と周辺地域の歴史的環境（第1図・第2図）

深谷市の地形は、ほぼ南北に二分する事が出来る。北部の利根川中流低地を形成する妻沼低地、南部の寄居町付近（標高約100m）を扇頂とする荒川扇状地の浸食面段丘である櫛挽台地である。櫛挽台地は、高位面の櫛挽面（武蔵野Ⅱ面に比定）と、低位面の寄居面（一部は御稜威ヶ原面、立川面に比定）の二段丘面より構成されている。両者は、中央部をほぼ東西に走るJR高崎線付近を境界とする。両段丘面と低地部の標高は、境界面付近で櫛挽面40～45m、寄居面32～35m、妻沼低地部で30～35mを測る。両段丘面は、低地との比高差5～20m（櫛挽面）、及び2～5m（寄居面）を以て接している。櫛挽面北端部付近に残丘状の小丘陵である仙元山（標高98m）が存在するものの、台地面上はほぼ平坦である。

小台遺跡は、櫛挽台地櫛挽面上、北東端部を北東方向に流れる小河川である唐沢川の北岸上に所

在し、大字上野台地内東端部に推定20ha以上の範囲に広がっている。今回の発掘調査地は、唐沢川の北西約300mを流れる押切川の南岸に立地し、現時点の小台遺跡の範囲の北端部に位置している。標高は約56mである。

深谷市周辺の歴史的上限は、現時点で縄文時代前期中葉と推定される。遺構は未確認だが、本遺跡で土器片が出土している。但し、仙元山周辺での早期土器片採集、東方城跡発掘調査時の尖頭器出土の事例から、上限が草創期～早期まで遡る可能性が高い。中期には、本遺跡、島之上遺跡等、集落遺跡が台地上に開析された小河川沿岸に立地し、後期中葉まで継続する。最近の低地部の発掘調査では、深谷町遺跡、明戸東遺跡等、中期末葉～後期中葉の遺跡が確認され始めている。遺跡の動向について、今後の調査事例を含めた再検討を必要とする段階を迎えている。

弥生時代には、確認された遺跡の殆どが低地部に立地する。上敷免遺跡の中期前半の再葬墓、明戸東遺跡の後期の集落が確認されている。台地先端部、現在の埼玉工業大学深谷高校地内より中期後半の土器の出土が報告されたが、詳細は不明である。遺跡の低地部への集中は、稲作普及の影響と推定され、市内の台地部では、該期の遺跡は確認されていない。

古墳時代には、遺跡の数、規模とも低地部で急増する。集落跡が主体であるが、近年、東川端遺跡の方形周溝墓や原遺跡の円墳（上増田古墳群）等、古墳群の存在も確認された。生活域の低地部における比重はより高まっている。一方、台地部では割山遺跡で埴輪窯が確認されたが、生産地域としての様相や、低地部の生活域との関連性等の具体点が未確認のため、詳細は不明である。

奈良・平安時代も低地中心の傾向は変わらず、上敷免遺跡等に集落が確認されている。式内社とされる楡山神社が台地先端部に所在しており、更に、今も「原郷」の大字名が残る事から、幡羅郡衙関連遺跡の存在も推定される。台地部の様相には不明点が多く、今後の調査に負う所が大きい。

鎌倉時代、武蔵武士団の拠点が各所に構えられ、内ヶ島氏、蓮沼氏、荏原氏、人見氏等の、猪俣党に属する武士の館跡が確認される。殆どは低地部に立地し、基盤となる農村が低地部に多く所在していた事に起因すると推定される。今回の調査対象地である御所ヶ谷戸には、源頼朝の家人、五郎丸の墓とされる積石塚の存在が伝わるが、現在は消滅している。台地部では、人見地内の人見館跡以外は、該期に想定される遺跡は未発見である。鎌倉街道の脇道等は存在しているが、河川以外の水源に乏しい地理が影響し、生活地域としてはかなり厳しい環境だった事が考えられる。

室町時代～安土・桃山時代、深谷上杉氏が疋鼻和城・深谷城を拠点として約200年間、9代にわたる統治を行う。当地域周辺は、その重臣で、深谷四宿老の一人である秋元氏の所領となる。今も「秋元町」の地名にその名残を留め、菩提寺の元誓寺も現存している。小田原征伐による深谷上杉氏滅亡後、徳川氏の支配下で、松平康直・松平忠輝・酒井忠勝が一時その所領としたが、その後天領として代官支配地となる。当地域周辺は徳川氏に仕えた秋元氏の移封後、旗本領となった。江戸時代、深谷は中山道の宿場、利根川の河岸など、交通・経済の要衝として繁栄し、養蚕、窯業等も盛んであった。当地域は、『新編武蔵風土記稿』に「上野臺村」として記載され、調査対象地である御所ヶ谷戸の地名を見出すことができる。

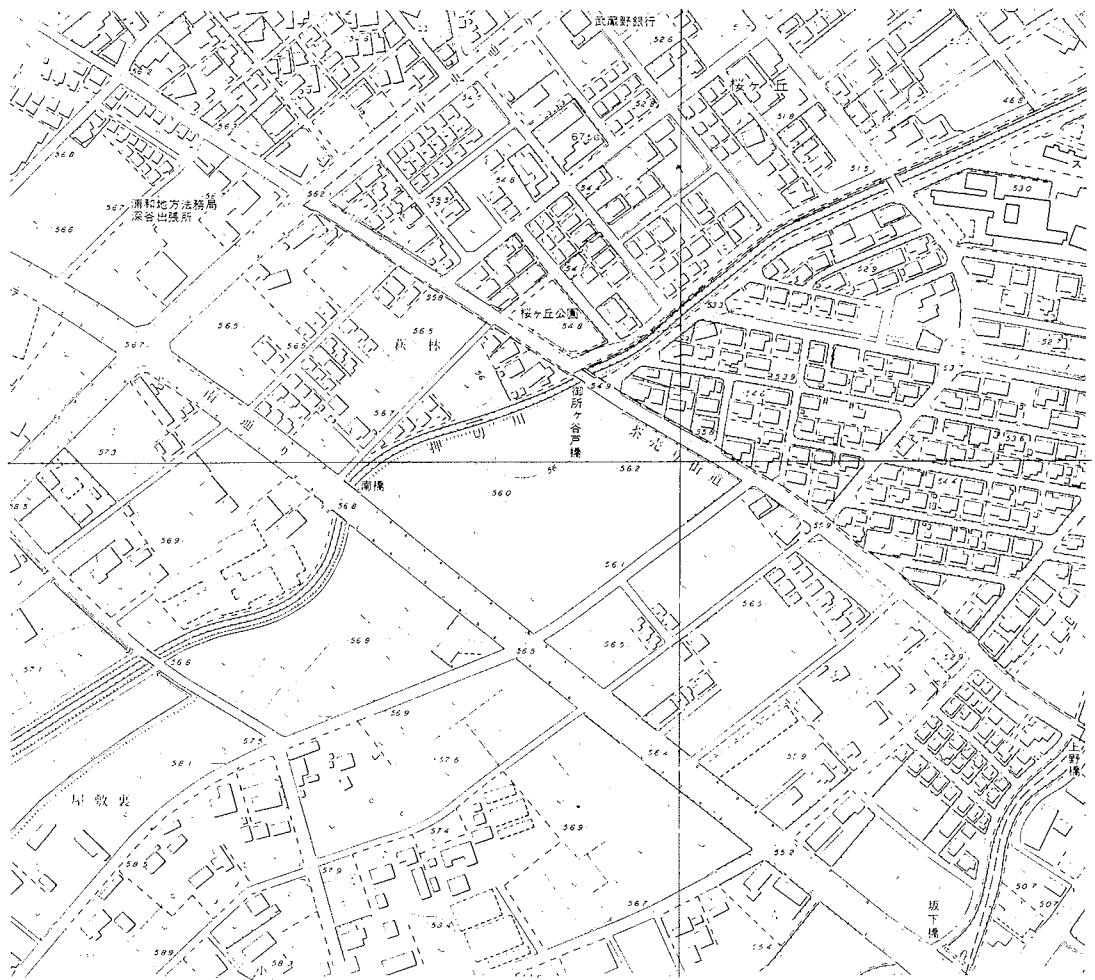
当地域は明治22年（1889）、藤澤村に編入された。明治時代以降の深谷では、渋沢栄一らが創設した日本煉瓦製造株式会社が煉瓦生産を開始し、従来の窯業と共に主要産業となる。製糸業も最盛



※スクリーントーンは、縄文時代遺跡

1. 荏原氏館跡
2. 蓮沼氏館跡
3. 諏訪台遺跡
4. 増田氏館跡
5. 明戸東遺跡
6. 東川端遺跡
7. 上敷免北遺跡
8. 上敷免遺跡
9. 内ヶ島氏館跡
10. 起会遺跡
11. 深谷町遺跡
12. 深谷城跡
13. 城下遺跡
14. 東方城跡
15. 斤鼻和城跡
16. 秋元氏館跡
17. 小台遺跡
18. 割山遺跡
19. 鼠裏遺跡
20. 萱場松原遺跡
21. 出口遺跡
22. 島之上遺跡
23. 前畠遺跡
24. 人見館跡

第1図 深谷市主要遺跡位置図（1/80,000）



第2図 調査区周辺地形図 (1/5,000)

期を迎え、台地部では養蚕や、それに伴う桑栽培が盛んに行われ、至る所で桑畑が広がる様になった。この様相は、基本的に昭和20年(1945)頃まで継続することとなる。

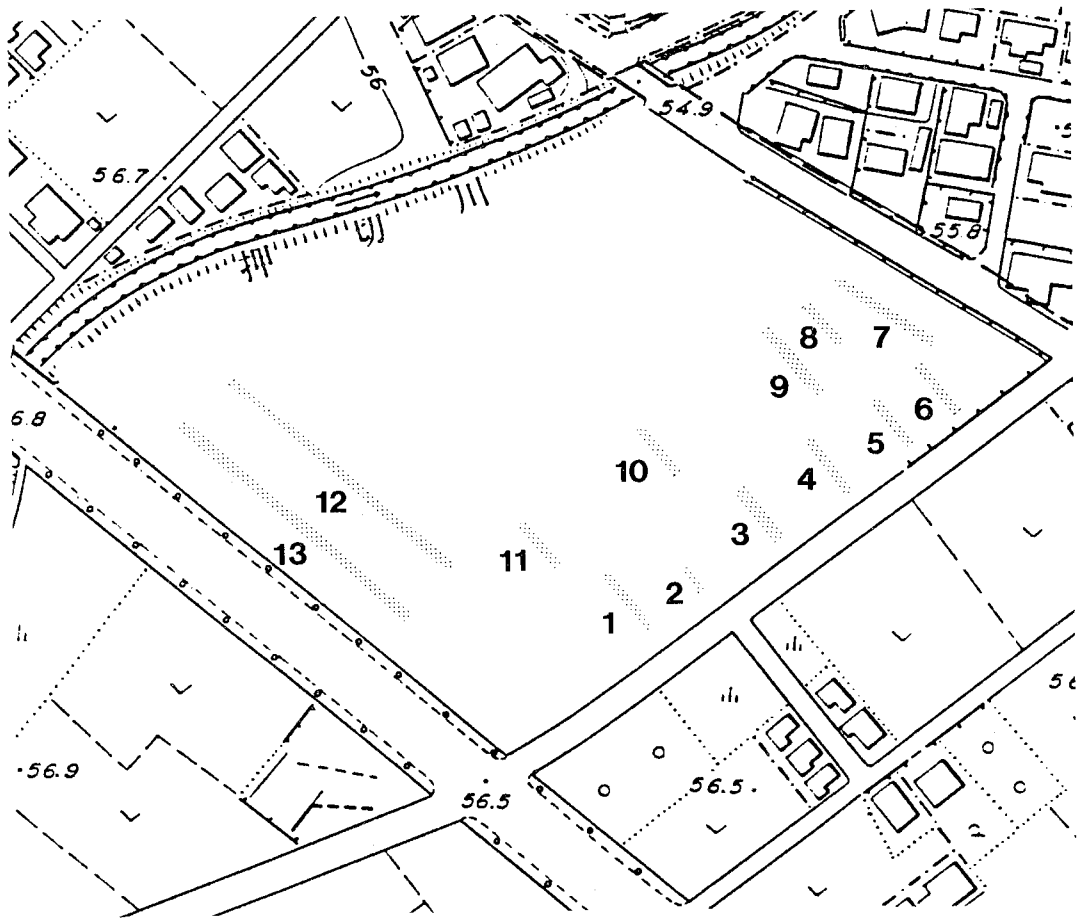
昭和30年(1955)、1町4村が合併して深谷市制が施行され、昭和48年(1973)、豊里村を合併し、現在の深谷市が誕生した。この頃より、工業を主軸とする産業の転換が図られ、それまで余り重視されなかった御稜威ヶ原に工業団地が誕生した。これに伴い、周辺地域は住宅地開発が進み、最近では大型店舗が進出するなど、市内でも発展著しい地域として、今日に至っている。

小台遺跡周辺地域は、時代背景、生業の変化の影響を最も受けた地域であり、ある時期は荒蕪地次の時期には居住地とその姿を様々に変化させてきたと言う事ができる。

Ⅲ. 確認調査

1. 調査の概要

確認調査は4月19日・20日の2日間実施した。調査方法は、平型バケット装着のパワーショベルによるトレンチ掘削を用い、建設予定地内に、幅約2mのトレンチを任意に13箇所設定した(第3図)。調査の結果、第3～第5トレンチにおいて遺物包含層を確認し、多量の遺物を採集した。以上の調査結果より、工事予定地内の約3,000㎡について本調査の実施を決定した。



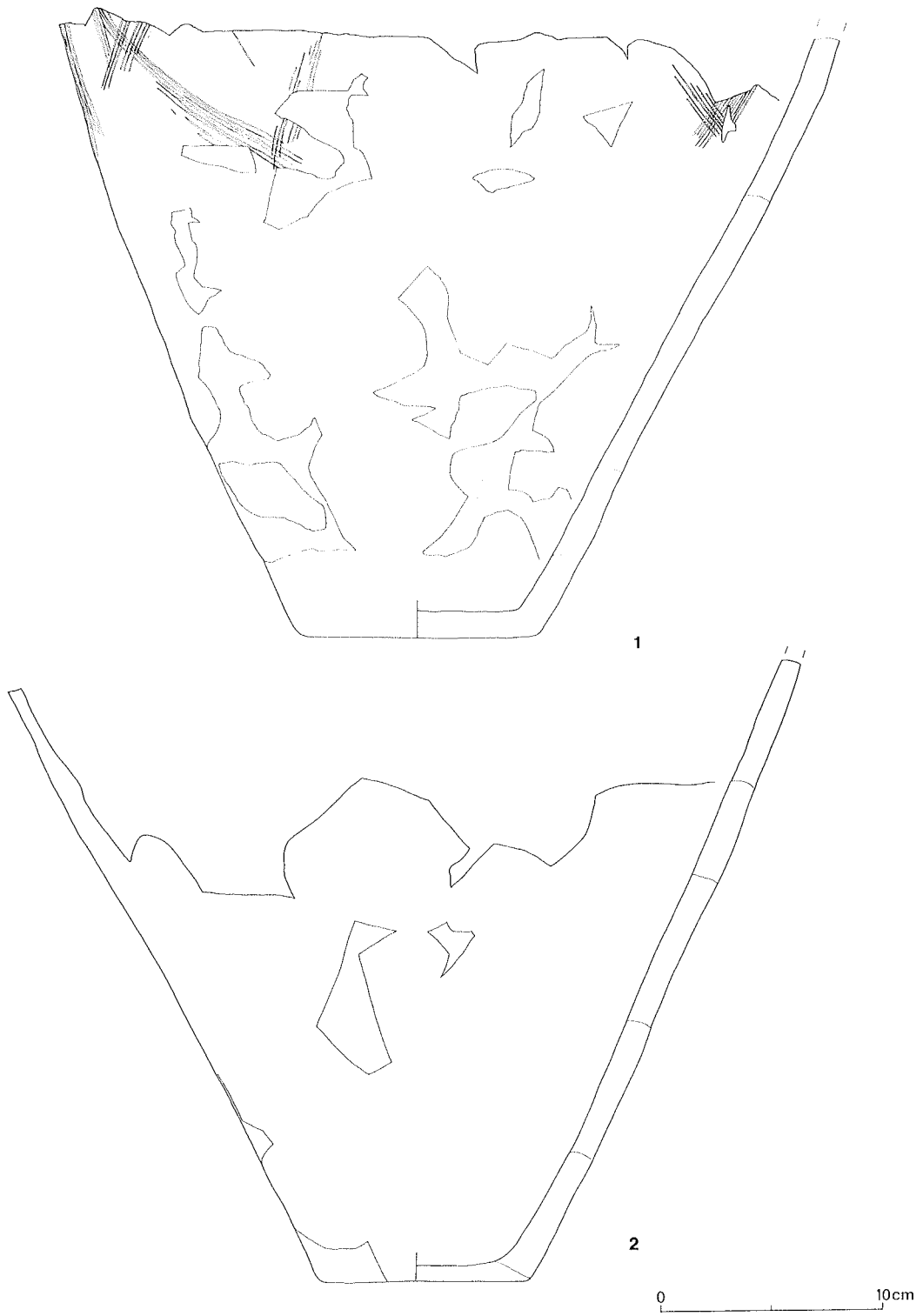
第3図 確認調査概要図

※数字はトレンチ番号

2. 出土遺物（第4図～第6図）

第4図、部分的に復元可能であった個体資料である。すべて上半分を欠失する。1. 底径11.0cm、現存高28.8cm。条線による粗雑な斜格子目文が描出される。2. 推定底径9.5cm、現存高28.5cm。無文。この2個体は、第5トレンチ掘削時に、1を内側、2を外側に、正位に重ねた状態で出土した。第5図1～4、中期後半の土器類である。1. 口縁部～胴部。隆線で口縁部文様帯及び懸垂文を描出。地文はLR縄文。2～4、胴部。沈線区画内に磨消しが施される。地文は2がRL縄文、3がLR縄文。5～9、第6図10～12、後期初頭の土器類である。5～7、口縁部。5. 沈線文が描出される。6・7、沈線区画文が描出される。7は波状口縁を呈し、頂部以下に逆「C」状文が貼付される。8～12、胴部。8～10、沈線区画文が描出され、10は短沈線が充填される。11. 条線による鋸歯状文が描出される。12. 条線文が描出される。13～15、底部。13・14、推定底径約9cm。15. 推定底径約13.5cm。第6図16. 打製石斧。現長9.6cm、刃幅4.5cm、最大厚2.0cm、現重93.0g。刃部に再生使用の痕跡が認められる。石質は粗粒を多量に含むホルンフェルス。

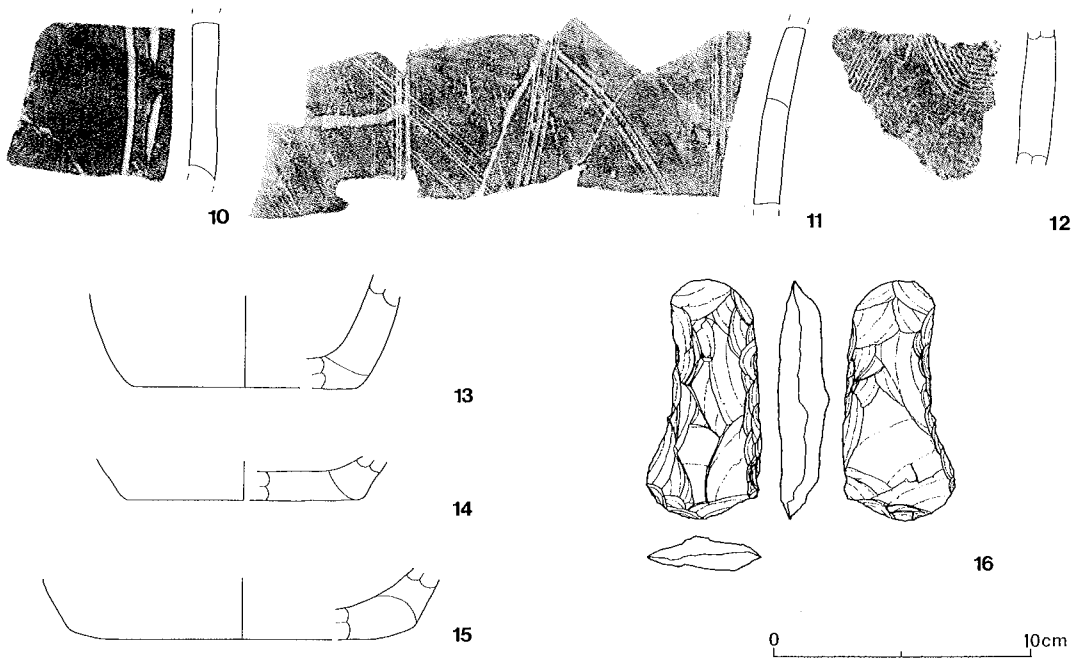
13. 14は第3トレンチ、1～3、5～12、15・16は第4トレンチ、4は第7トレンチの出土。以上の調査結果より、工事予定地内の約3,000㎡について本調査の実施を決定した。



第4図 確認調査出土遺物(1) (1/3)



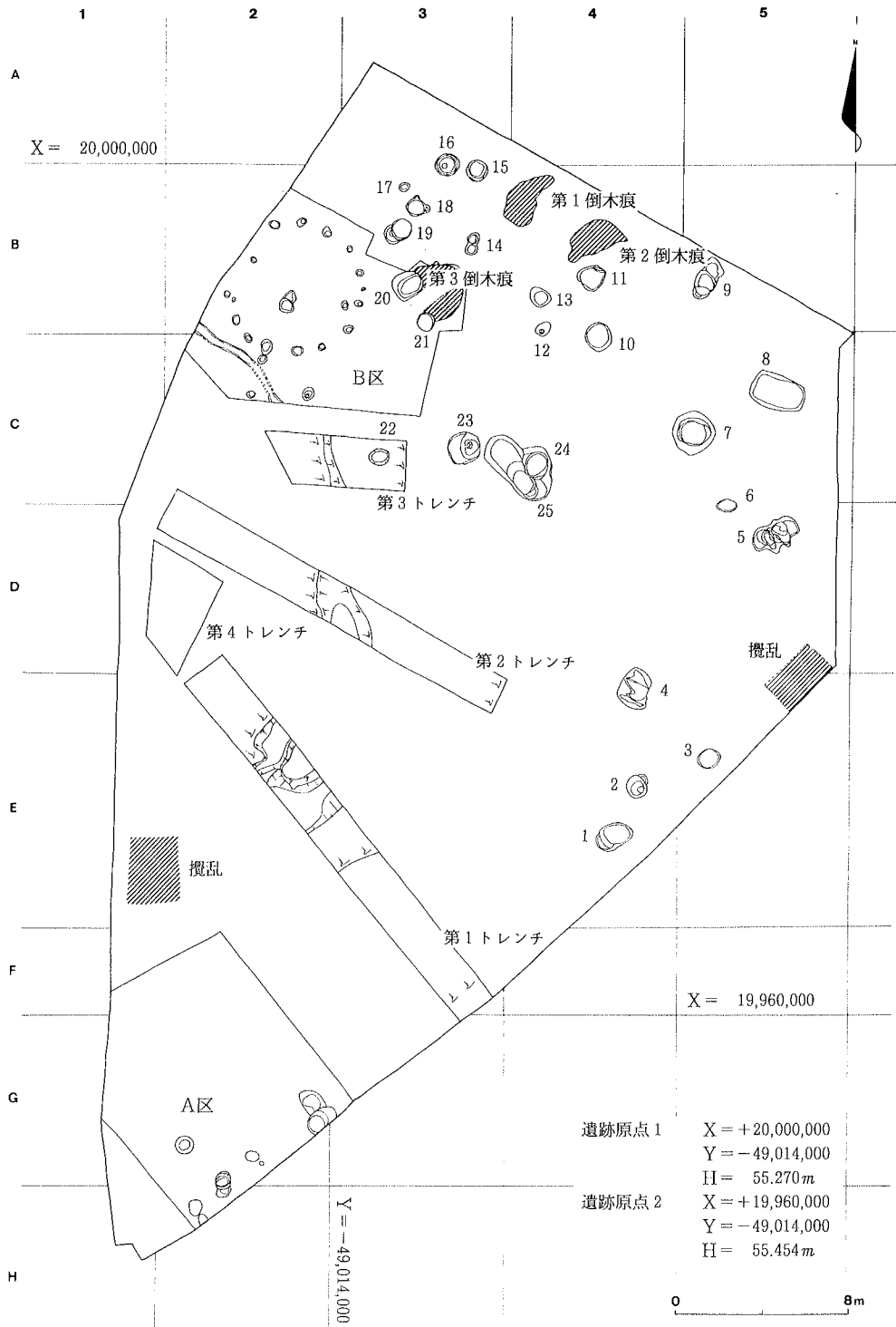
第5図 確認調査出土遺物(2) (1/3)



第6図 確認調査出土遺物(3) (1/3)

IV、本調査の概要

5月10日より重機による表土削除を開始、同13日より作業員による調査区精査に着手した。この結果、調査区東南部より西部にいたる、調査区の過半に及ぶ遺物包含層を確認した。このため、特に出土遺物の多い南東部に重点調査区（A区）、西部にはこれまでの調査で存在が推定されていた埋没谷を確認するためのトレンチを2本設定して調査を進めた（第1・第2トレンチ）。A区からは土壙8基が検出され、この内の1基は埋甕炉跡である事が確認され、トレンチでも地山の落ち込みが認められた。しかし、17日夜半の降雨により、A区と第1トレンチを含む遺物包含層南半部が水没、調査不能となったため、水没を免れた北半部におけるトレンチ（第3トレンチ）設定と、地山確認面における精査に着手した。この結果、土壙36基を検出したため、水没地域の排水作業と湧水状況に対応する形で、A区、土壙群、トレンチの調査を併行した。6月7日、トレンチ調査をほぼ終了する。A区では先に確認した土壙が住居跡の一部である可能性が出てきたため、調査区範囲の拡大を含む最終確認を実施、これを第1号住居跡として記録作業を行い、21日に全作業を終了した。22日、第3トレンチ北側の遺物包含層中より埋甕を検出したため、周辺地域に精査区（B区）を設定、調査を開始した。これにより住居跡1軒（第2号住居跡）、埋甕2基を検出し、土壙群の調査と併行して作業を実施した。全作業は7月8日迄に終了、調査区全測図作成、写真撮影を経て、13日、器材の撤収を以て調査の全行程を終了した。



7 図 調査区全測図 (1/360)

V. 検出遺構及び出土遺物（第8図～第73図）

今回の発掘調査における検出遺構の総数は、住居跡2軒、土壌36基である。また、旧河川の流路跡の一部も確認された。出土遺物はプラスチックコンテナ31箱分に上り、時期も縄文時代前期中葉から後期前半に及んだが、殆ど小破片であった。

本章では、重点調査区、土壌群、トレンチの順に記述していく事とする。なお、出土遺物の内の土器に関しては、可能な限り下記の帰属時期区分に拠る事とした。

- I群 縄文時代前期中半
- II群 縄文時代前期後半
- III群 縄文時代中期前半
- IV群 縄文時代中期中半
- V群 縄文時代中期後半
- VI群 縄文時代後期前半

i. A区検出遺構（第8図）

本区は調査区の南端部、F-1・2、G-1～3、H-2の各グリッドに及ぶ範囲に設定される（第7図）。全面に極めて多量の遺物を包含する暗茶褐色土をのせていたが、地山確認面より、住居跡1軒と、土壌8基を検出した。土壌については、他の単独出土の土壌群とは別に、頭にAを付して呼称する。一部住居跡の遺構と重複するが、その都度記述するものとする。

(1) 第1号住居跡（第8図）

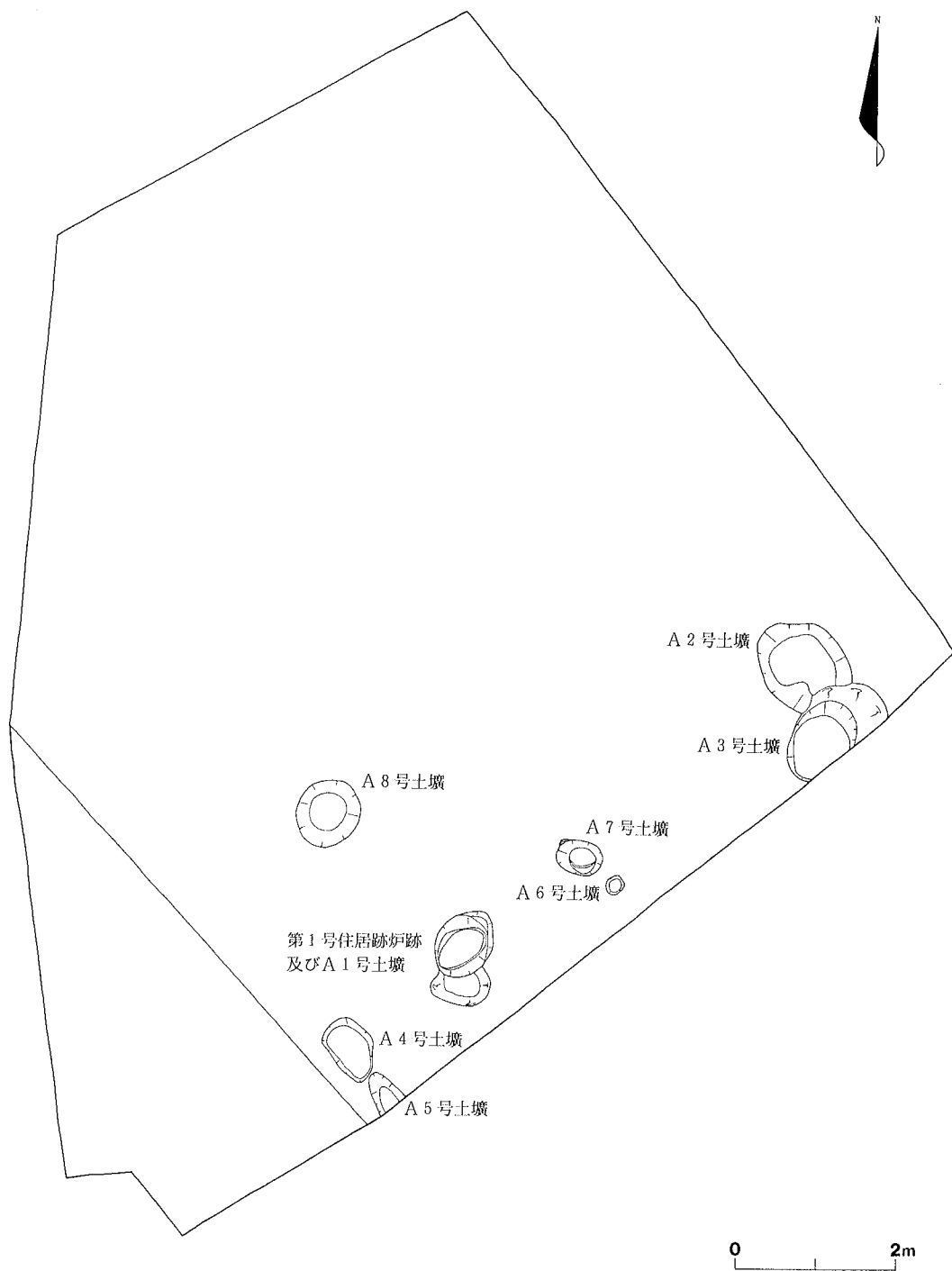
F-2、G-2グリッドに位置する。形状は円形を呈したものと推定されるが、壁が削平されて消滅しているため、規模等の詳細は不明である。A4、A6、A7の各土壌を柱穴として伴う可能性が有る。埋甕炉が検出された。

○炉跡（第9図）

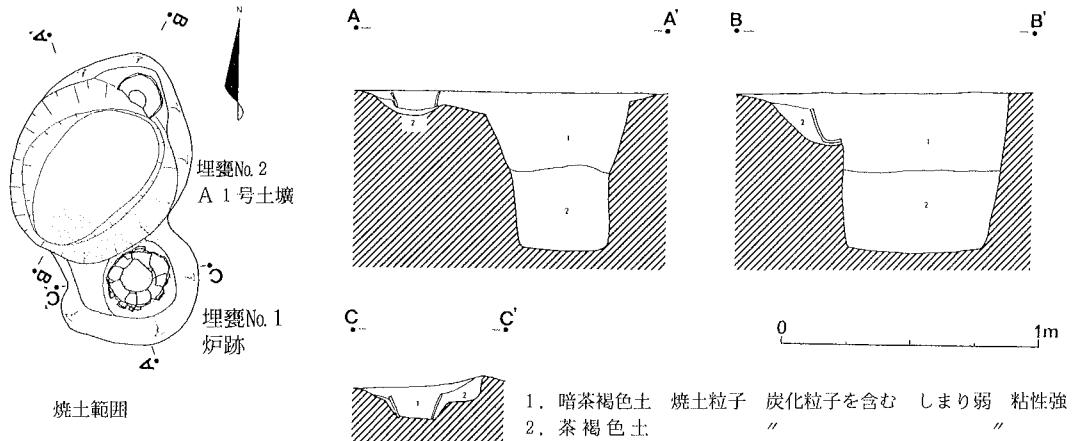
G-2グリッド南端に位置する。長軸125cm、短軸50cmを測る。A1号土壌に切られるため、平面プランが一部不明のため、不整形円形を呈する2基の土壌が独立或いは連続する形状としか表現出来ない。深さは南部分で約10cm、北部分で約20cmを測る。壁は北側の一部を除き緩やかに立ち上がる。埋甕は2个体確認され、南部分出土の个体周辺に極めて多量の焼土が検出された。少量の遺物が出土している。

○第1号住居炉跡出土遺物（第10図～第12図）

第10図、炉体に転用されていた个体である。1. 深鉢の口縁部である。口唇部の大半と胴部を欠損・欠失する。2～3条の連弧文が粗雑に施文される。弧線の一部は棒状化し、端部は蕨手状



第 8 图 A 区平面图 (1 / 50)



第9図 第1号住居炉跡 (1/30)

に描出される。地文は粗雑な条線。2. 深鉢の胴部である。上半部と過半を欠失・欠損する。隆線で懸垂文が描出される。地文は矢羽状沈線文。第11図1～5、口縁部。1. 沈線で施文される。2. 隆帯と沈線で渦巻文が描出され、区画内に沈線文が充填される。3. 擦痕に近い沈線で施文される。4. 浅い沈線で施文される。5. 口唇直下に沈線文、以下に連弧文と懸垂文が描出される。地文はRL縄文。6～13、胴部。6. 隆線で区画される。地文はRL縄文。7. 懸垂文が描出される。8. 隆線と沈線で懸垂文が描出される。区画内には斜行沈線が充填される。9. 沈線で施文される。10. 矢羽状沈線文が粗雑に描出される。11. 刺突で施文される。12. 懸垂文が描出される。13. 沈線区画内にRL縄文が施文される。1は埋甕(第10図1)内、2～14は掘り方覆土中より出土。

14. 土製円盤。直径3.2cm、厚さ約1cm、現重12.8g。地文は条線。

第12図、石鏃。現長1.75cm、最大幅1.2cm、最大厚2.5cm、現重0.4g。両脚部を欠損する。形態は凹基無茎。調整は極めて入念。石質は黒耀石。埋甕(第10図1)の東部、掘り方直上より出土。帰属は概ねV群と推定される。

(2) A 1号土壙 (第9図)

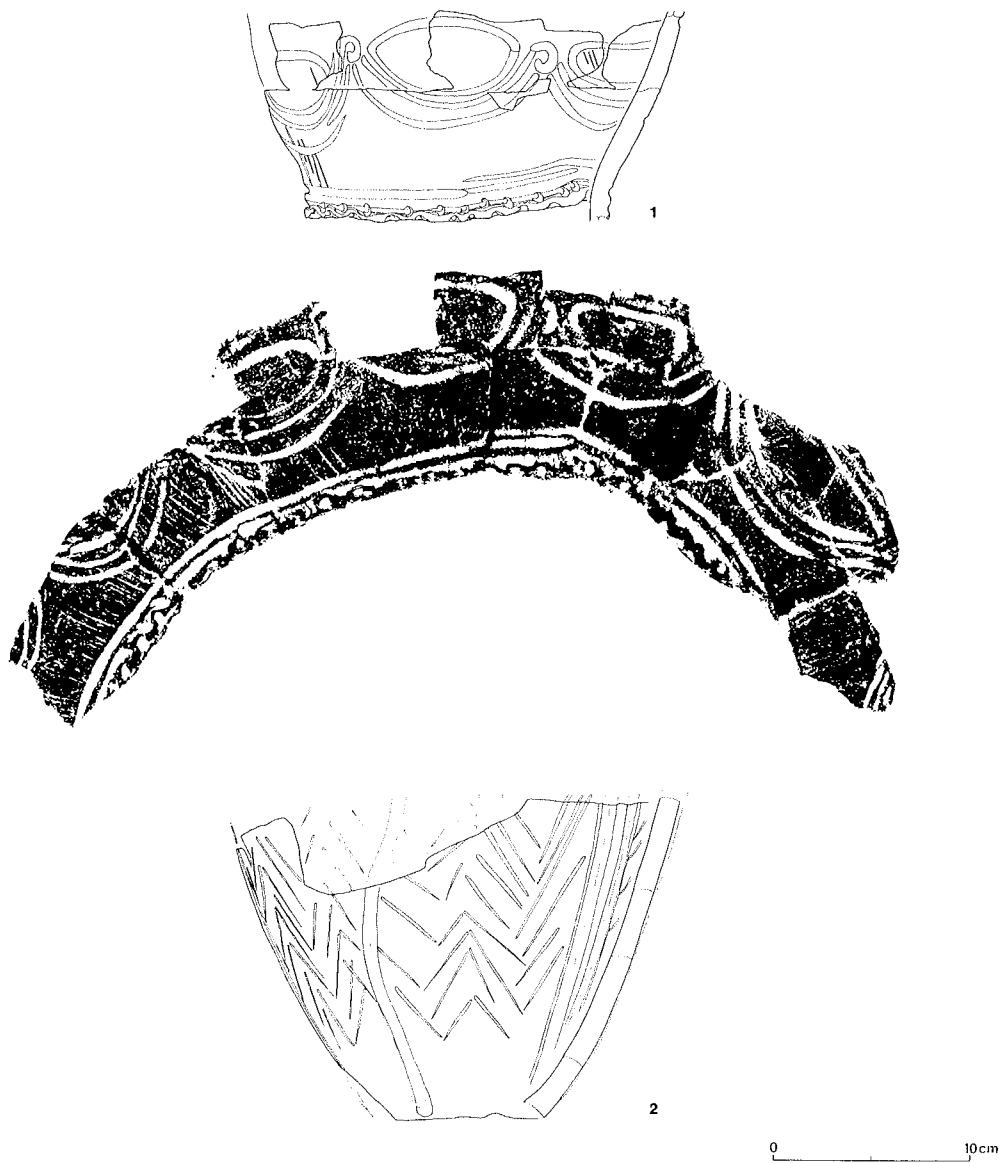
第1号住居炉跡のほぼ中央部に、これを切って構築される。直径約70cm。平面プランはほぼ円形を呈する。深さ63cm。壁は上半で若干開くものの、ほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は殆ど無い。

(3) A 2号土壙 (第13図)

G-2・3グリッドの境界部に位置する。A 3号土壙に南端部を切られる。長軸推定約140cm、短軸102cmを測る。平面プラン楕円形を呈する。深さ約25cm。壁は緩やかに外湾しつつ立ち上がる。

○A 2号土壙出土遺物 (第14図)

1. 口縁部。波状を呈する。口唇部直下に沈線文、頂部以下に懸垂文が描出される。2. 胴部。隆線で懸垂文が描出される。地文は矢羽状沈線文。

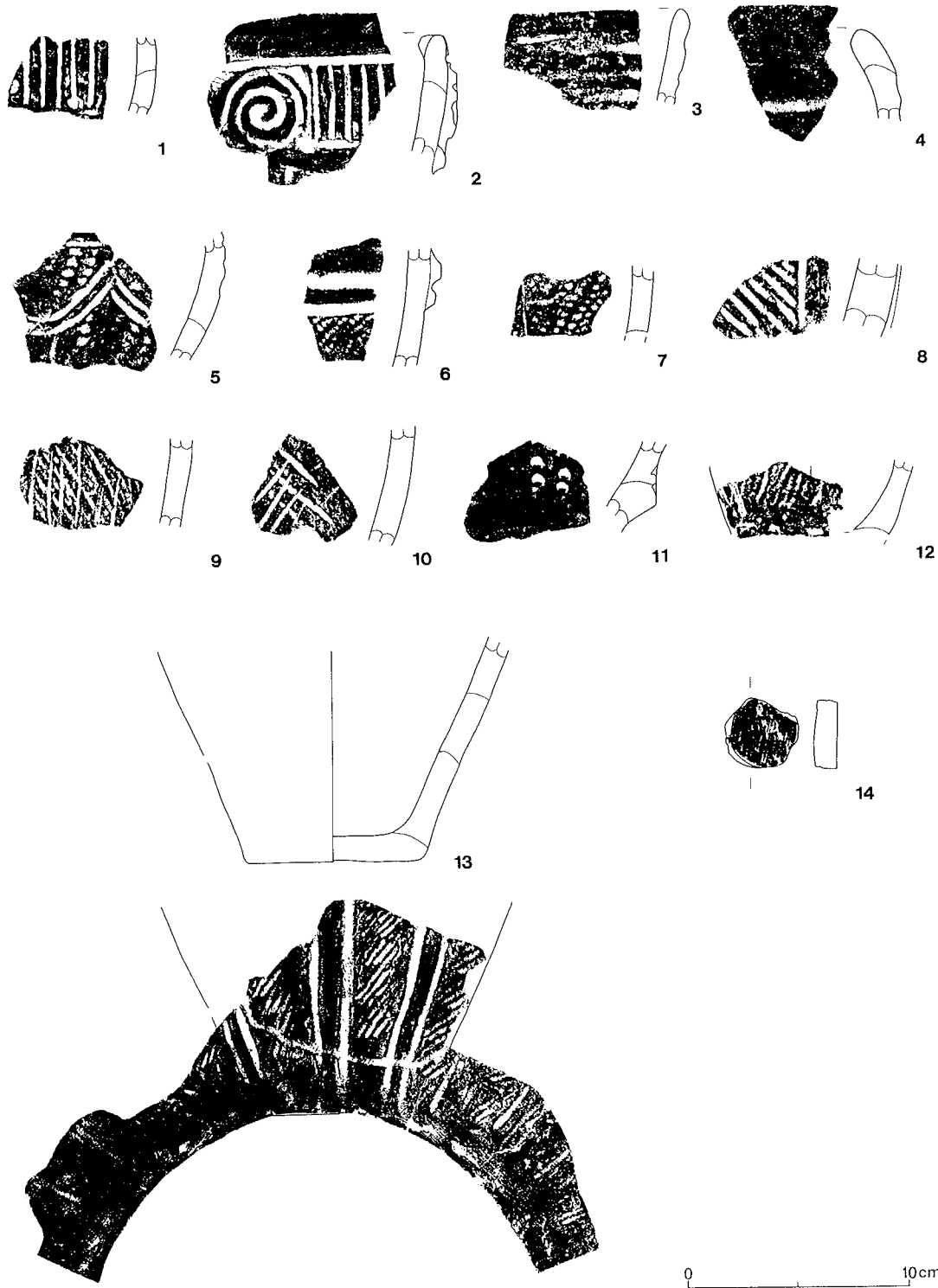


第10図 第1号住居跡出土遺物(1) (1/4)

帰属はV群と推定される。

(4) A 3号土壇 (第13図)

A 2号土壇の南端部を切って構築される。一部調査区外。長軸141cm、短軸推定80cm以上。平面プラン不整楕円形を呈する。深さ69cm。壁は下半が外湾するが、南側ではほぼ垂直、北側は緩やかに立ち上がる。



第11图 第1号住居炉跡出土遺物(2) (1/3)

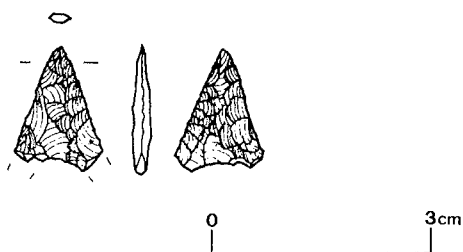
○A 3号土壙出土遺物（第15図）

1～4、口縁部。1. 隆線と沈線による区画内に撚糸文Lが充填される。2. 沈線で施文される。3. 口唇部を欠損。隆線と沈線による区画内にRL縄文が施文される。4. 口唇部を欠損。隆線と沈線による区画内に短沈線が施文される。

5～8、胴部。5・6、隆線と沈線により区画される。5の地文はRL縄文。6の地文は撚糸

文L。6は1と接合する。7. 沈線で懸垂文が描出される。地文はRL縄文。8. 隆線と沈線で懸垂文が描出される。地文はRL縄文。9. 隆線区画内にRL縄文が施文される。10. 底部。底径7.0cm。11. 土製円盤。長径4.4cm、短径3.4cm、厚さ1.2cm、現重23.4g。地文はRL縄文。

帰属はV群と推定される。



第12図 第1号住居炉跡出土遺物(3) (原寸)

(5) A 4号土壙（第13図）

H-2・G-2グリッド境界部、第1号住居炉跡より南西へ約4.7mの地点に位置する。長軸80cm、短軸55cm。平面プラン不整楕円形を呈する。深さ21cm、壁はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は無い。

(6) A 5号土壙（第13図）

A 4号土壙の南東にほぼ接して位置する。一部調査区外。長軸推定50cm以上、短軸40cm。平面プラン長楕円形を呈すると推定される。深さ15cm。壁は45°以上で立ち上がる。出土遺物は無い。

(7) A 6号土壙（第13図）

G-2グリッド南半部、第1号住居炉跡より北東へ約4.7mの地点に位置する。直径約20cm。平面プランほぼ円形を呈する。深さ15cm。壁はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物は無い。

(8) A 7号土壙（第13図）

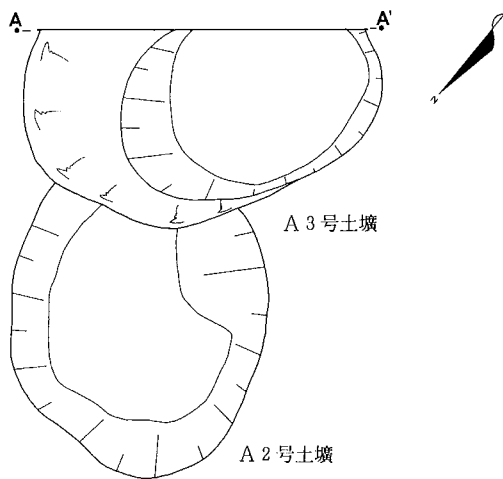
A 6号土壙の北東約20cmの地点に位置する。長軸60cm、短軸45cm。平面プラン楕円形を呈する。深さ22cm。一部棚状を呈する。壁は60°以上で立ち上がる、出土遺物は無い。

(9) A 8号土壙（第13図）

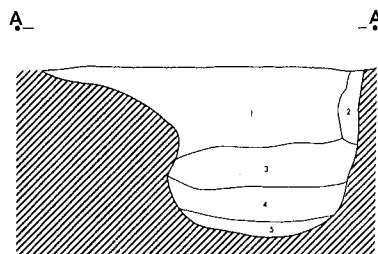
A 1号土壙の北東約7.5mに位置する。直径約80cm。平面プランほぼ円形を呈する。深さ約64cm。壁は上半が若干開くものの、ほぼ垂直に立ち上がる。

○A 8号土壙出土遺物（第16図）

1. 口縁部。隆線と沈線による区画内に、RL縄文が施文される。2～7、胴部。2. 隆線と



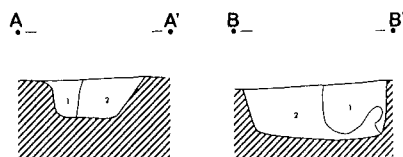
A 3号土坑



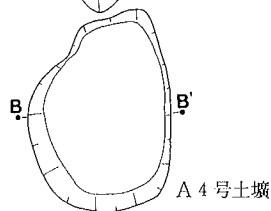
- | | | | |
|----------|--------------------|--------|-------|
| 1. 明褐色土 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む | しまり弱 | 粘性強 |
| 2. ローム土 | 黒色土ブロックを多量に含む | しまり弱 | 粘性やや強 |
| 3. 暗褐色土 | 赤色粒子・白色粒子・炭化粒子を含む | しまり弱 | 粘性強 |
| 4. 暗茶褐色土 | ローム粒子を含む | しまり弱 | 粘性強 |
| 5. 茶褐色土 | ロームブロックを少量含む | しまりやや強 | 粘性強 |



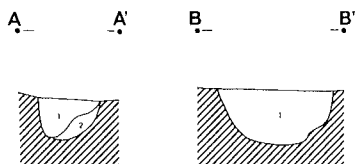
A 5号土坑



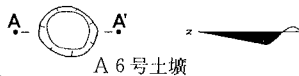
- | | | | |
|----------|--------------------|--------|-------|
| 1. 暗褐色土 | ローム粒子・白色粒子・黒色粒子を含む | しまり強 | 粘性弱 |
| 2. 明茶褐色土 | 白色粒子を含む | しまりやや強 | 粘性やや強 |



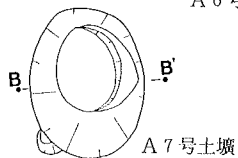
A 4号土坑



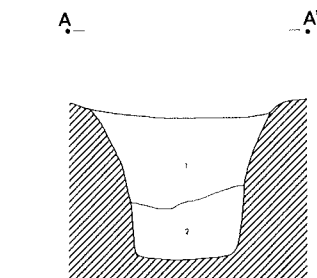
- | | | | |
|----------|-------------------|------|-------|
| 1. 暗茶褐色土 | ロームブロック・焼土粒子を少量含む | しまり弱 | 粘性やや強 |
| 2. 茶褐色土 | 焼土粒子・黒色粒子を含む | しまり弱 | 粘性弱 |



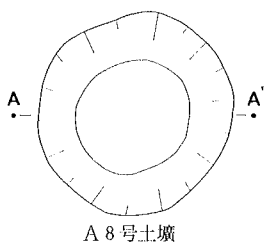
A 6号土坑



A 7号土坑



- | | | | |
|----------|-----------------|------|-------|
| 1. 暗茶褐色土 | 焼土粒子・炭化粒子を含む | しまり強 | 粘性やや強 |
| 2. 暗灰褐色土 | ロームブロック・焼土粒子を含む | しまり弱 | 粘性やや強 |



A 8号土坑

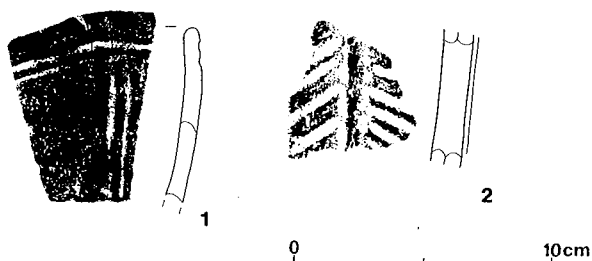
0 1m

第13図 A区検出遺構 (1/30)

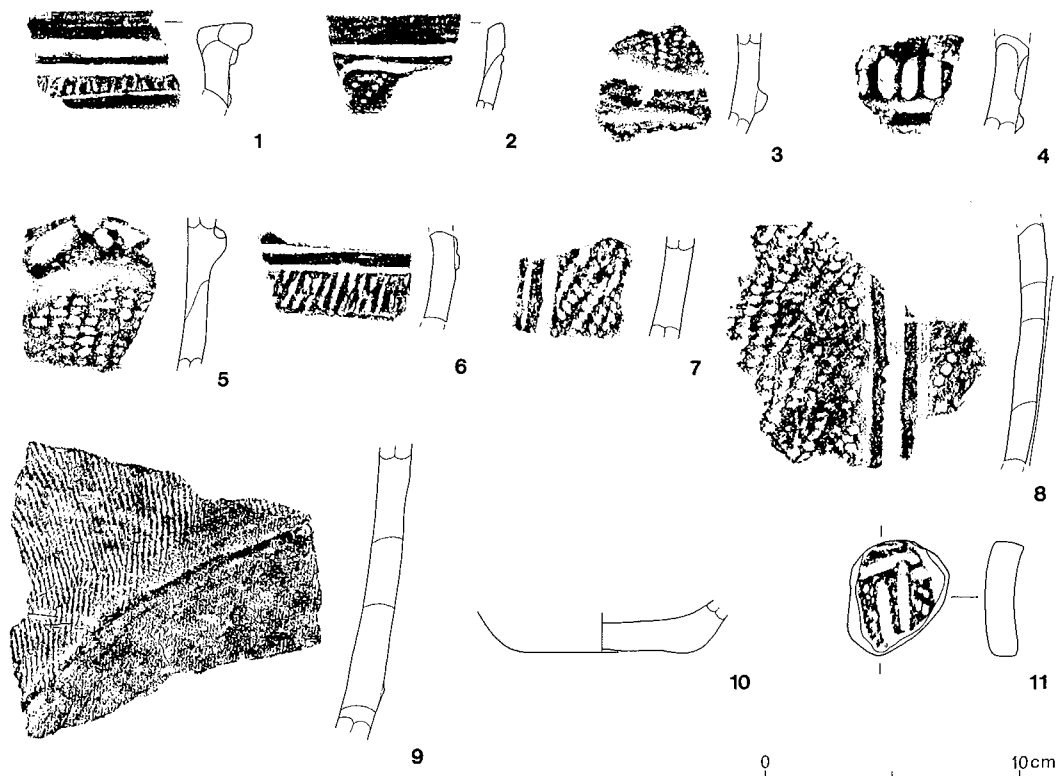
沈線で施文される。地文はRL縄文。3. 隆線で懸垂文が描出される。地文は波状の条線。4. 弧線文が描出される。地文はRL縄文。5~7. 沈線区画内が磨消される。地文は5がRL縄文、6がLR縄文、7が撚糸文Lを用いた施文。網目状撚糸文の可能性有り。8・9、口縁部。8. 沈線区画が描出される。9. 口唇部直下に沈線と刺突で施文される。10~13、胴部。10. 沈線区画内に刺突が施文される。11. 沈線で施文される。12. 沈線区画内に条線が施文される。13. 波状条線が施文される。14. 底部。底径6.4cm。

帰属は一部を除いて概ねV群・VI群と推定される。

A4号・A7号の両土壺は、その位置関係から、第1号住居跡の柱穴の可能性が有る。A5号・A6号土壺もこれに含まれると推定される。しかし、各土壺とも出土遺物が無いため、推測の域を出ない。A1号土壺は具体的な構築時期を示す出土遺物が無いものの、第1号住居跡内の埋甕(第10図2)を半載する形で構築され、覆土中にこの埋甕に接合する破片が確認された事から、住居構築時期より下る事が推定される。また、A1号土壺はA8号土壺と規模、形状とも近似し



第14図 A2号土壺出土遺物(1/3)



第15図 A3号土壺出土遺物(1/3)

ており、同時期構築の可能性が有る。

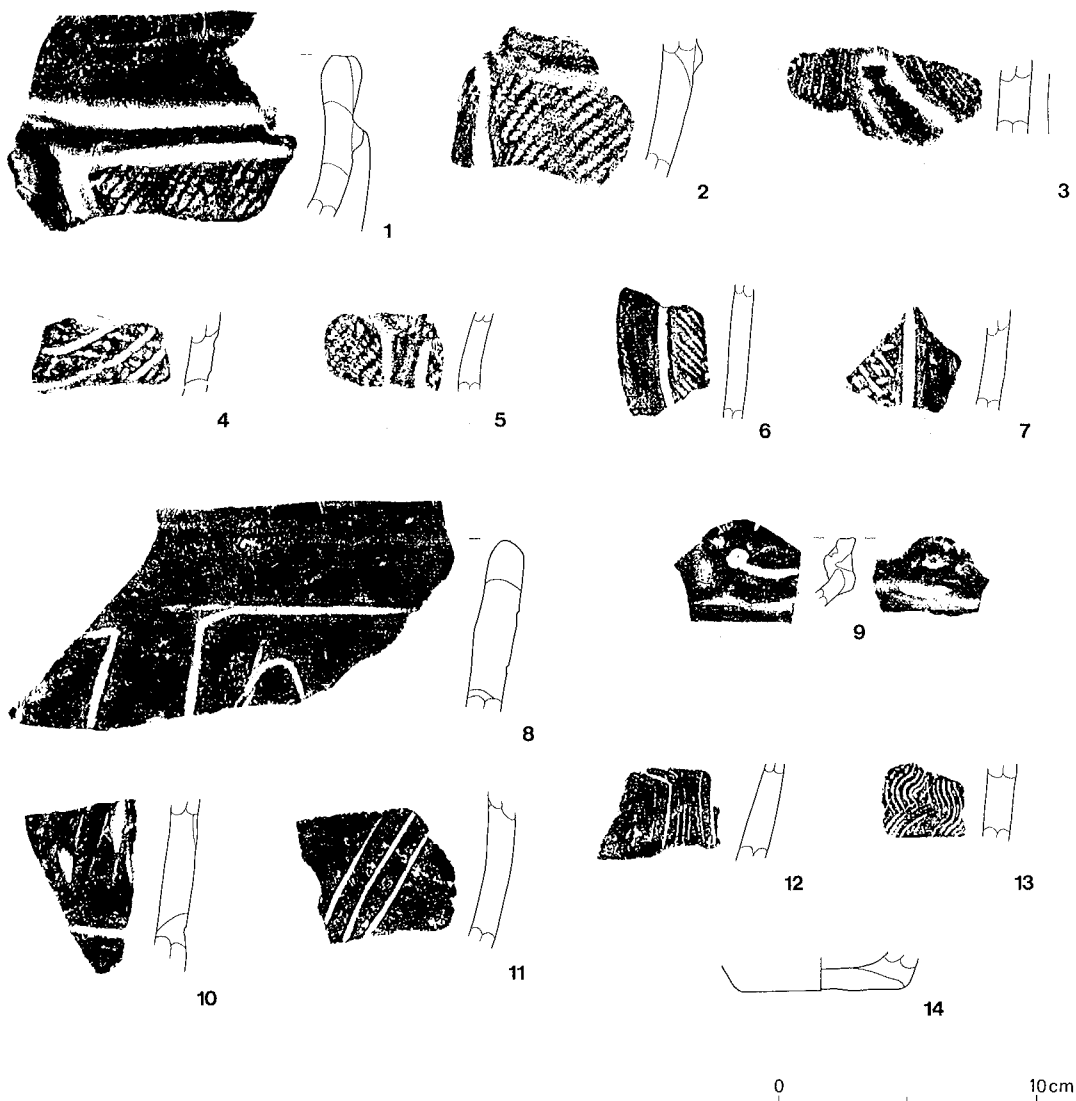
(10) A区出土遺物 (第17図～第19図)

遺物包含層中出土遺物を一括した。

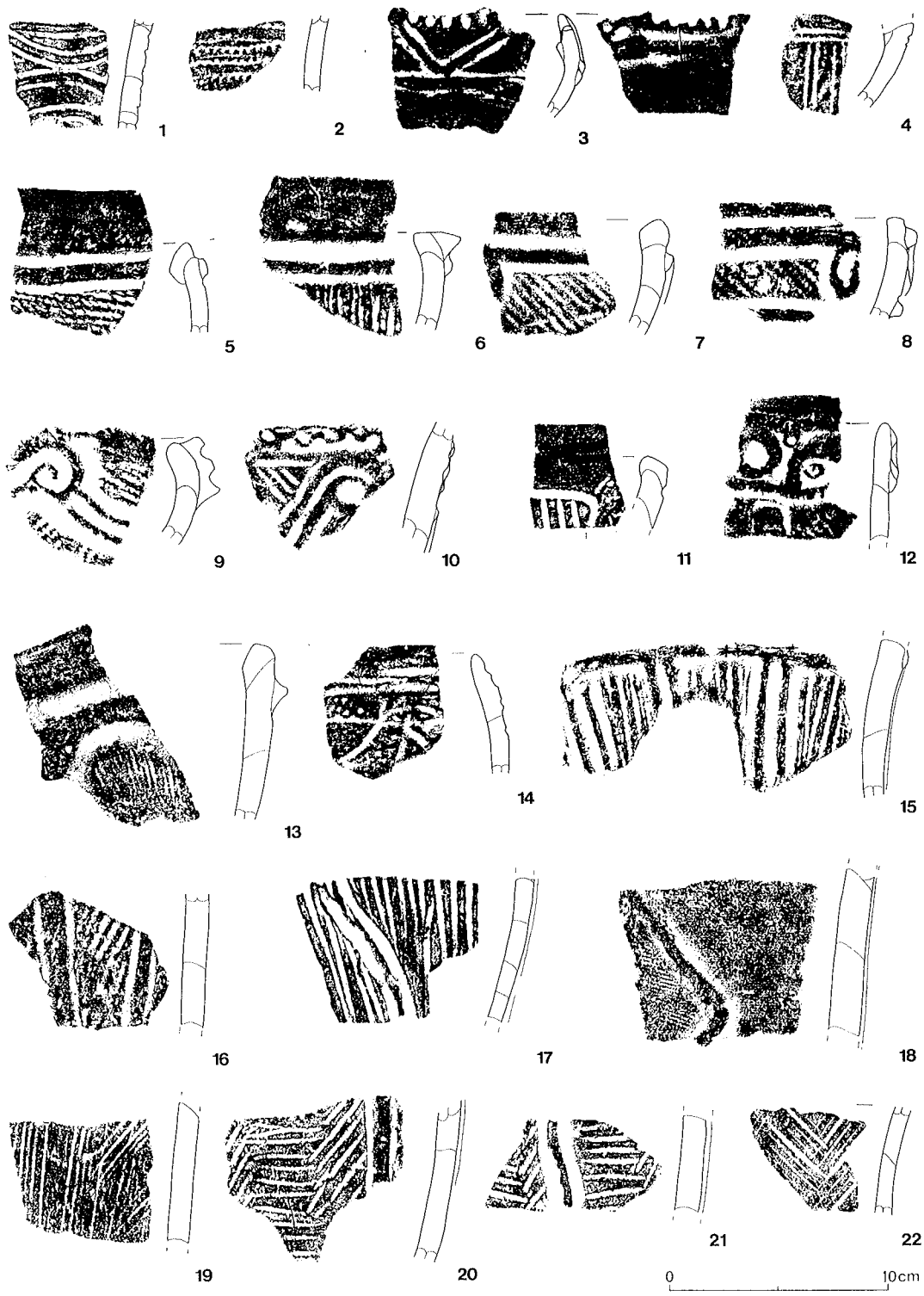
○土器

1・2、胴部。1. 沈線で施文される。2. 押印文が施文される。

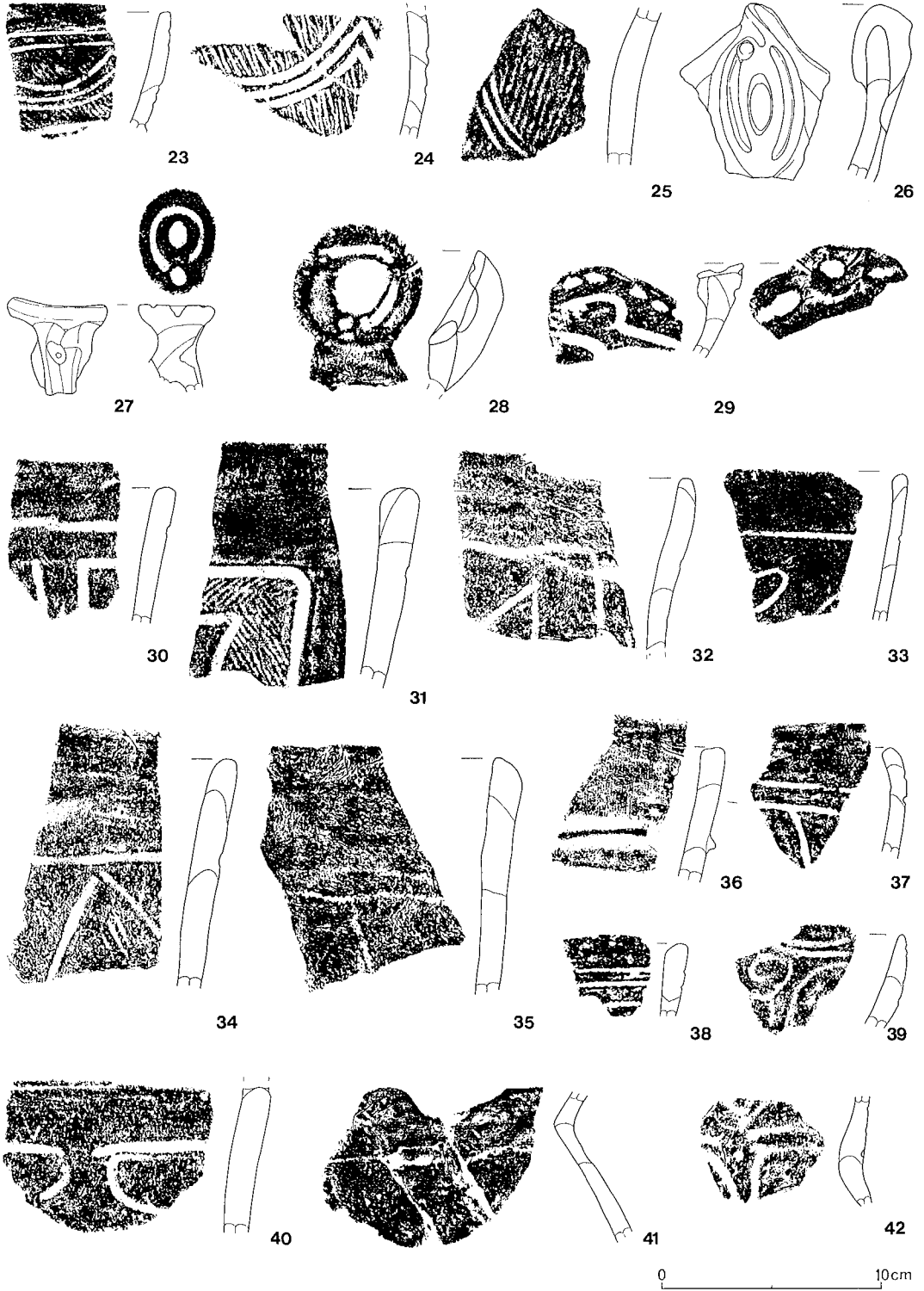
3. 口縁部。口唇部に刻目、隆線と沈線で区画文が描出される。4. 胴部。沈線で施文される。
地文はRL縄文。



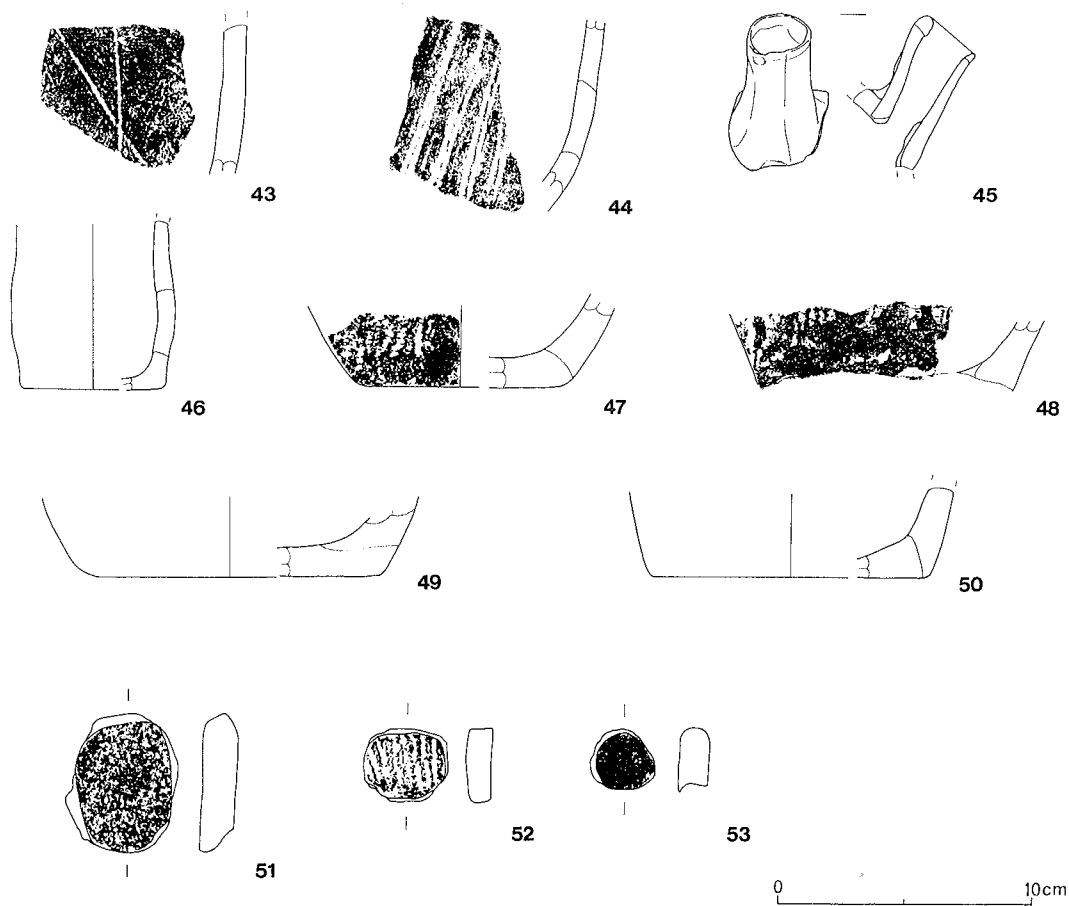
第16図 A 8号土壙出土遺物 (1/3)



第17图 A区出土遺物(1) (1/3)



第18图 A区出土遺物(2) (1/3)

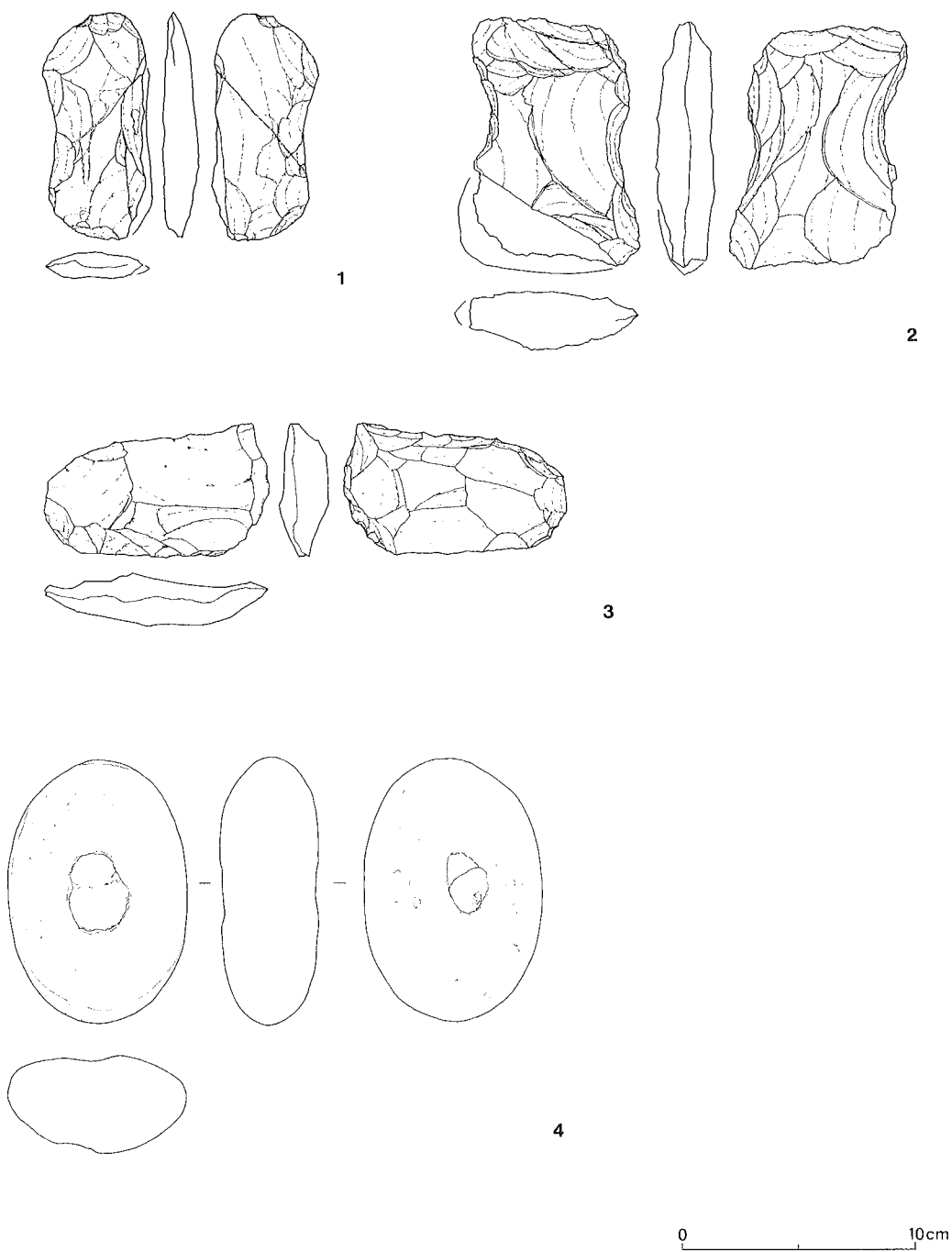


第19図 A区出土遺物(3) (1/3)

5～14、口縁部。5・6. 隆線と沈線で区画文が描出される。5は撚糸文L、6は条線文を地文とする。7・8、隆線で区画文が描出される。7はLR縄文、8はRL縄文を地文とする。9.

隆線と沈線で右端が蕨手状の弧線文が描出される。10. 口唇部を欠損。隆線、沈線、刺突で施文される。11. 沈線で施文される。12. 隆線と沈線で区画文が描出される。13. 隆線と沈線による区画内に条線が施文される。14. 波状沈線が施文される。地文はRL縄文。15～22、胴部。15. 隆線で区画文と懸垂文が施文される。16. 沈線区画内が磨消される。地文はRL縄文。17. 隆線と沈線で懸垂文が施文される。地文は条線文。18. 隆線区画内にRL縄文が施文される。19. 地文は条線。20・21、隆線と沈線で懸垂文が描出される。矢羽状沈線が施文される。22. 矢羽状沈線が施文される。第18図1、24、25、連弧文が描出される。地文は1がLR縄文、24が撚糸文L、25がRL縄文。

26～39、口縁部。26. 波状口縁を呈する。頂部に沈線と刺突を併用した貼付文が描出される。30・31、沈線区画内にRL縄文が施文される。32～35、沈線区画文が描出される。36. 隆線で施文される。37. 沈線で施文される。38. 沈線で施文される。補修孔を有す。39. 沈線で施文される。40～44、胴部。40、沈線区画文が描出される。42. 沈線と刺突で施文される。43. 斜格子目



第20图 A区出土遺物(4) (1/3)

沈線文が描出される。44. 沈線で施文される。45. 注口土器の注口部である。口径2.3cm。46～50、底部。46. 推定底径約5.5cm。47. 底径7.8cm。地文はRL縄文。48. 推定底径約10cm。地文はRL縄文。49. 推定底径約11.5cm。50. 推定底径約11cm。

51～53、土製円盤。51. 長径5.6cm、短径4.1 cm、厚さ1.3cm、現重35.9g。52. 長径3.4cm、短径2.9cm、厚さ1.0cm、現重12.7g。地文は撚糸文L。53. 直径2.5cm、厚さ1.2cm、現重8.5g。

○石器（第20図）

1・2、打製石斧。1. 現長9.9cm、最大幅4.4cm、最大厚1.5cm、現重90g。図中右側縁部を欠損する。全体的に風化が著しい。石質はホルンフェルス。2. 現長10.8cm、現存刃幅7.3cm、最大厚2.5cm、現重250g。刃部を欠損する。調整は粗雑。風化著しい。石質はホルンフェルス。3 スクレイパーであろう。現長5.9cm。最大厚2.2cm、現重125g。調整はやや粗雑。石質はホルンフェルス。4. 凹石。長径11.6cm、短径7.7cm、最大厚4.2cm、重さ480g。断面楕円形を呈する平滑な円礫で、両面に凹みを有す。石質は輝石安山岩。

帰属は概ねⅡ群～Ⅵ群と推定される。

ii. B区検出遺構（第21図）

B区は調査区の北西端、B-2・3、C-2・3の各グリッドに及ぶ範囲に設定した。本区より住居跡1軒、埋甕2基が検出された。記述方法は、A区に準ずるものとする。

(1) 第2号住居跡（第21図・第22図）

B-2・C-2グリッドに位置する。一部調査区外と推定される。壁は確認されなかったが、柱穴が18基検出された。平面プランは円形を呈したと推定される。推定直径約7.5m。炉は地床炉で、住居内のやや南寄りに造られている。長軸110cm、短軸約50cmの浅い掘り込みの南側を、更に長軸70cm、短軸61cmの規模で約15cm掘り窪めた形態を呈する。

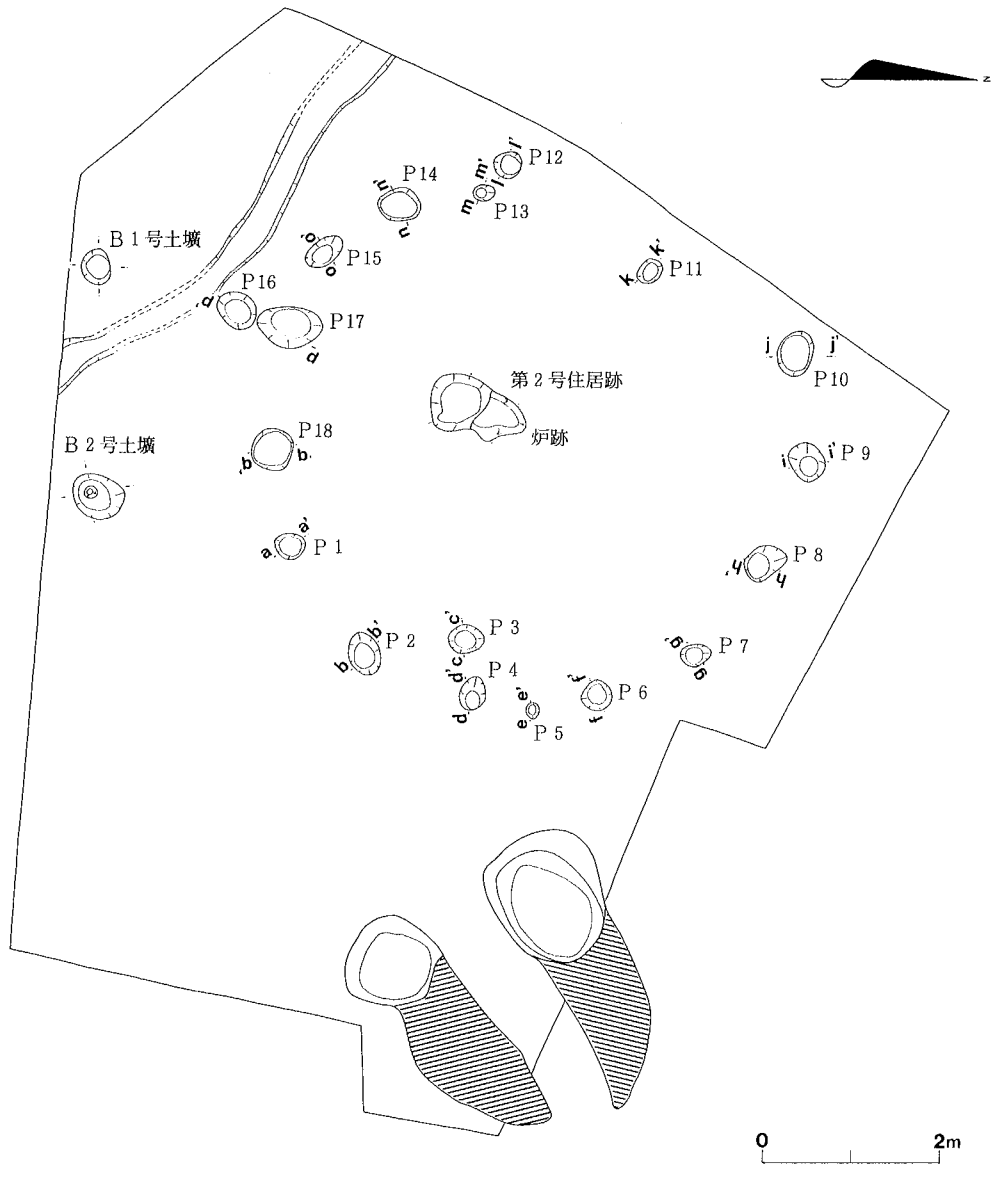
○第2号住居跡出土遺物（第23図）

1. 口縁部。口唇部に押引文、以下に沈線区画と撚糸文Lが施文される。2～4、胴部。2. 隆線で懸垂文が施文される。地文はLR縄文。3・4、沈線で懸垂文が施文される。3の地文はRL縄文、4は条線。5. 底部。推定底径約10cm、隆線と沈線で懸垂文が施文される地文は撚糸文L。1・2はP1、3はP4、4・5はP2の出土である。

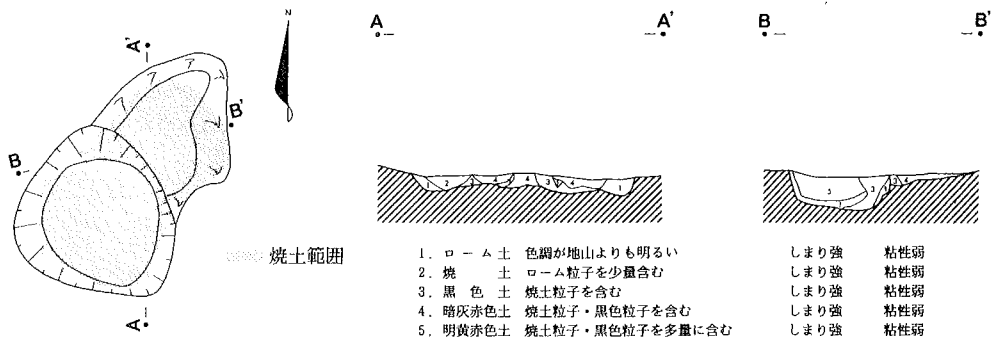
帰属は概ねV群と推定される。

(2) B1号土壇（第24図）

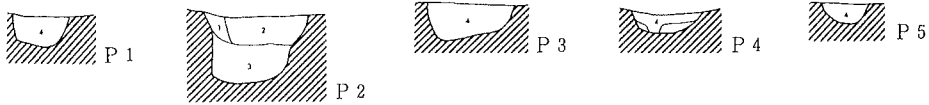
C-2グリッド内、第2号住居跡P16の南方約1.5mに位置する。長径37cm、短径30cmを測り、平面プラン楕円形を呈する。深さ18cm。深鉢の一部が正位に埋設されていた。



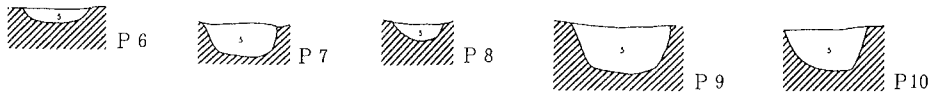
第21图 B区平面图 (1/50)



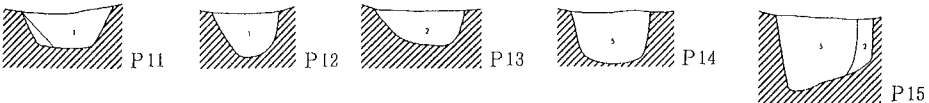
a_ a' b_ b' c_ c' d_ d' e_ e'



k_ k' l_ l' m_ m' n_ n' o_ o'



f_ f' g_ g' h_ h' i_ i' j_ j'

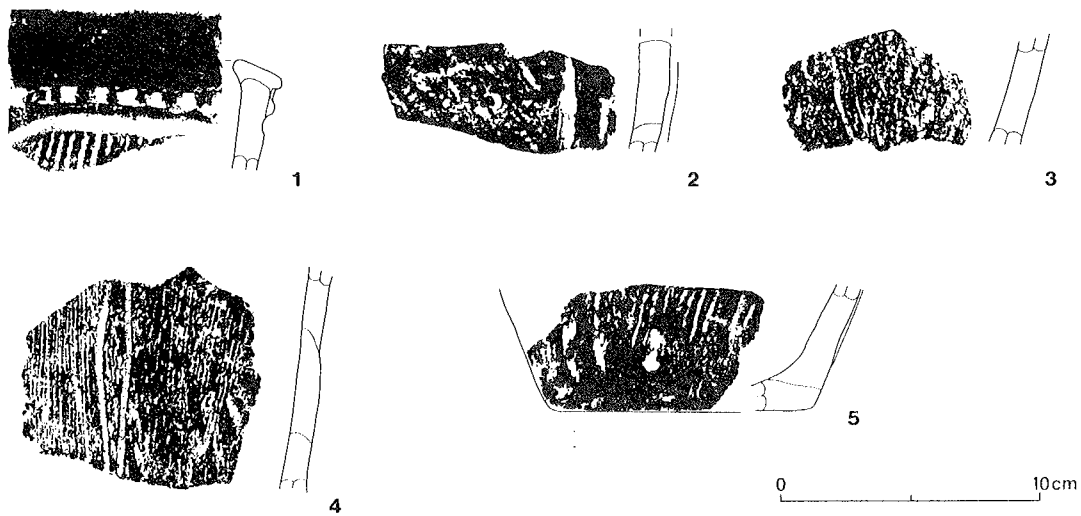


p_ p' q_ q'

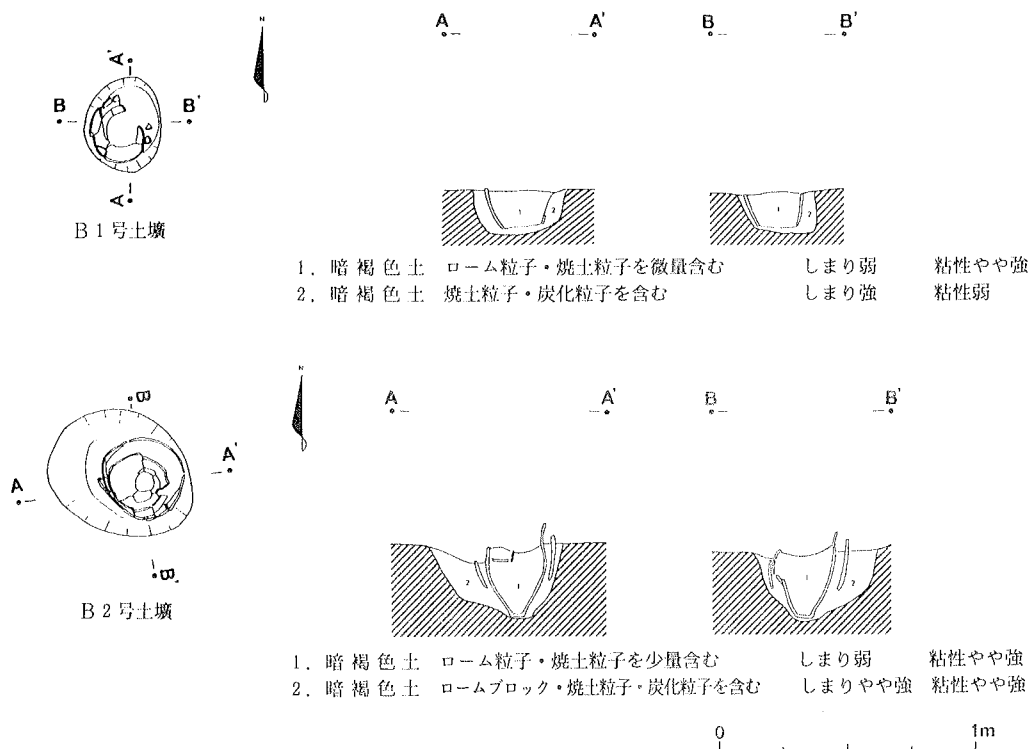


- | | | | |
|----------|------------------|------------|-----|
| 1. 明黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む | しまり強 | 粘性弱 |
| 2. 暗黄褐色土 | ローム粒子を多量に含む | しまり弱 | 粘性強 |
| 3. 暗灰褐色土 | ローム粒子・炭化粒子を含む | しまり強 (1より) | 粘性強 |
| 4. 暗黄灰色土 | ローム粒子・黒色粒子を多量に含む | しまり弱 | 粘性強 |
| 5. 暗黄褐色土 | 黒色粒子を微量含む | しまり弱 | 粘性強 |

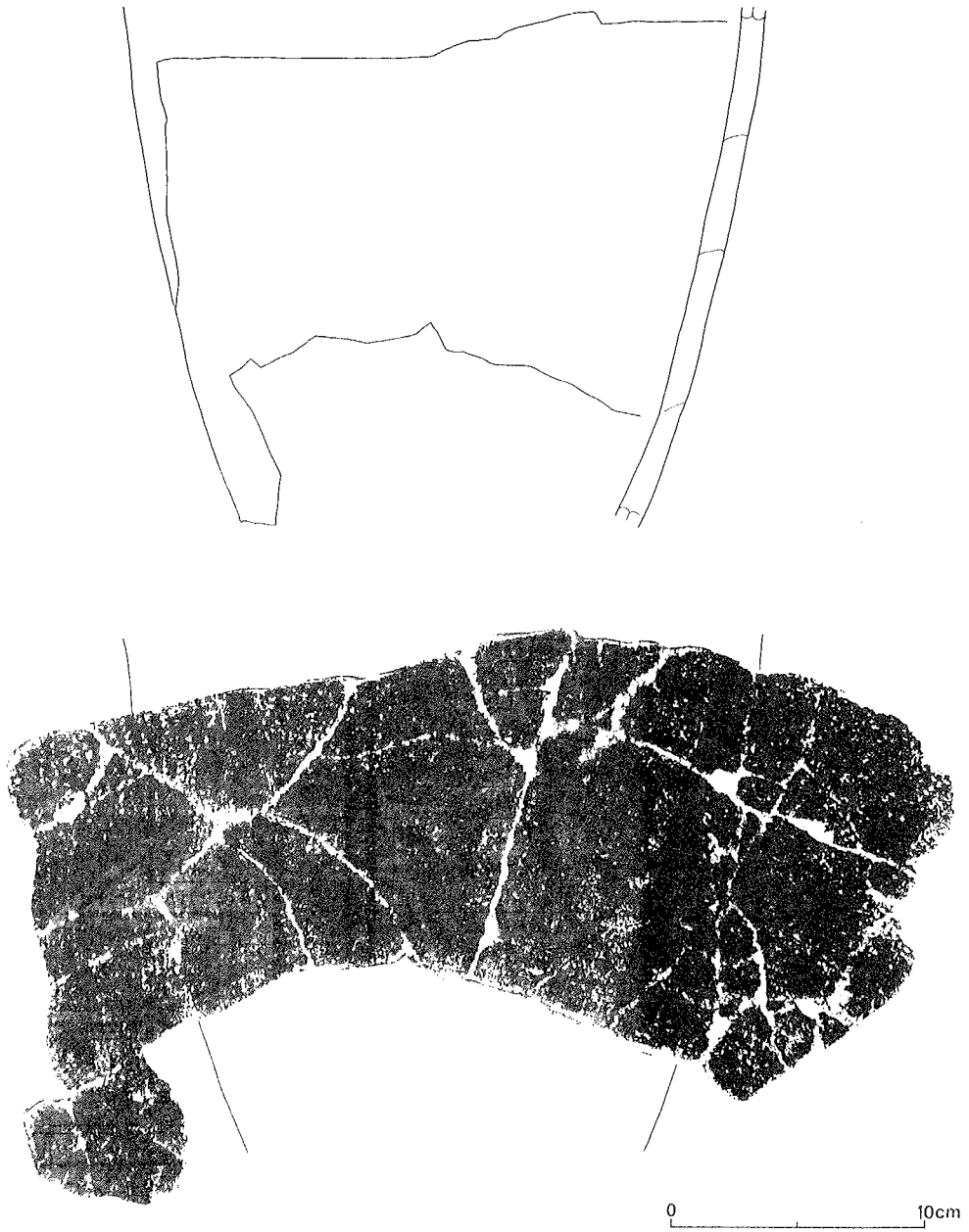
第22図 第2号住居炉跡及び柱穴 (1/30)



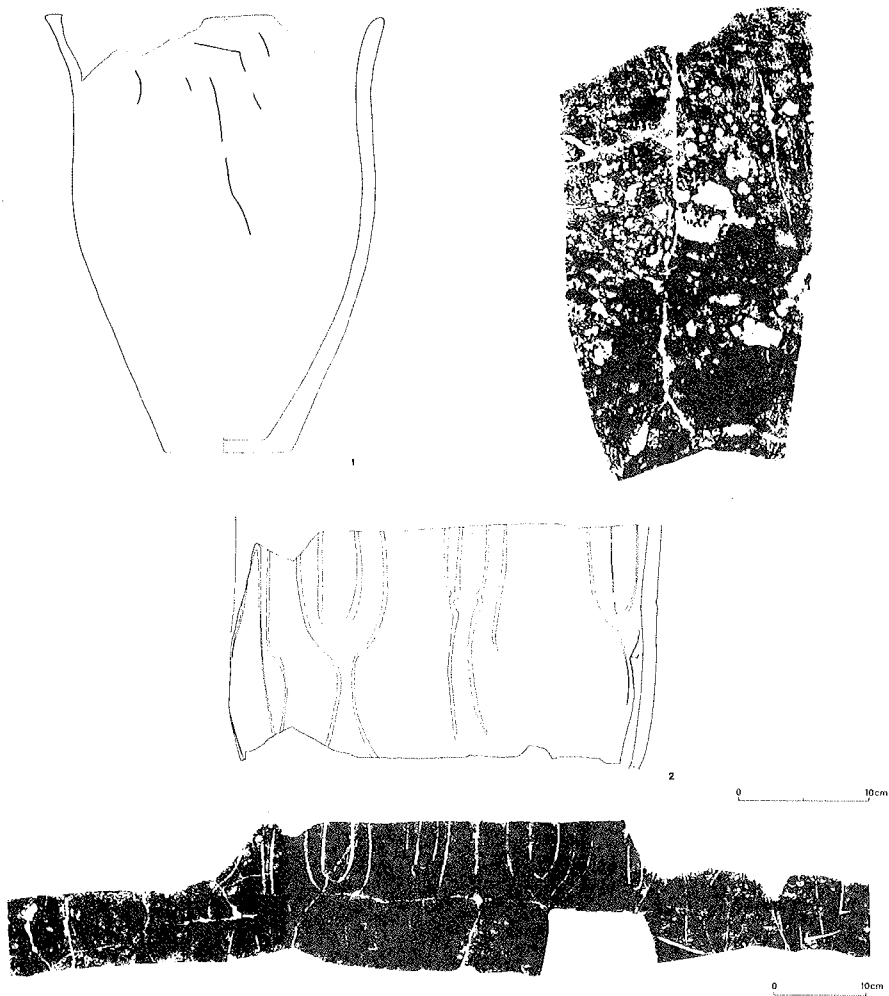
第23図 第2号住居跡出土遺物(1/3)



第24図 B区内検出遺構(1/30)



第25図 B 1号土壙出土遺物(1/3)



第26図 B2号土壙出土遺物（1／6・1／8）

○B1号土壙出土埋甕（第25図）

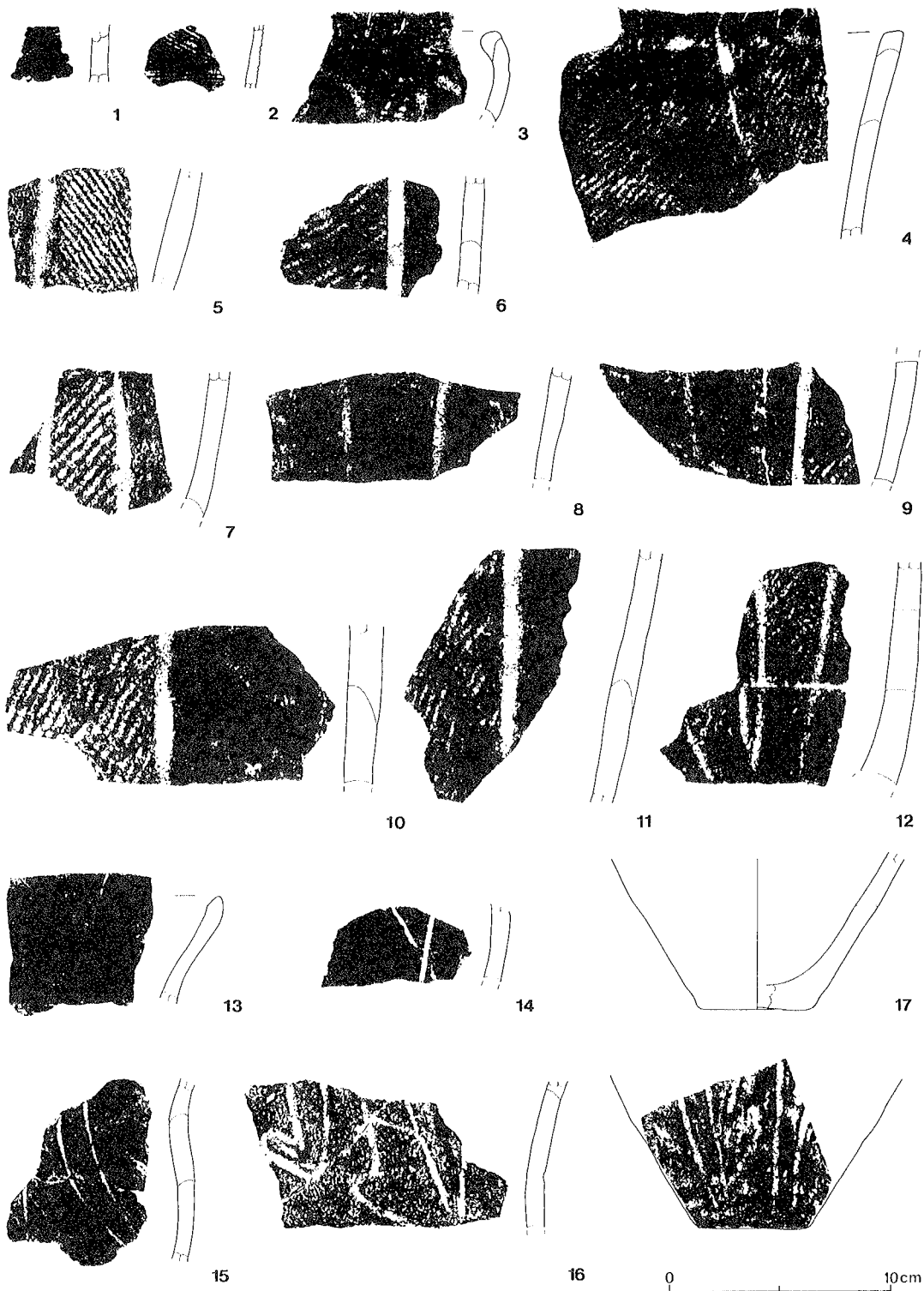
深鉢の胴部中位である。残高21.2cm。下半部と周胴1／3を欠失する。地文はRL縄文。帰属はV群の可能性が有る。

(3) B2号土壙（第24図）

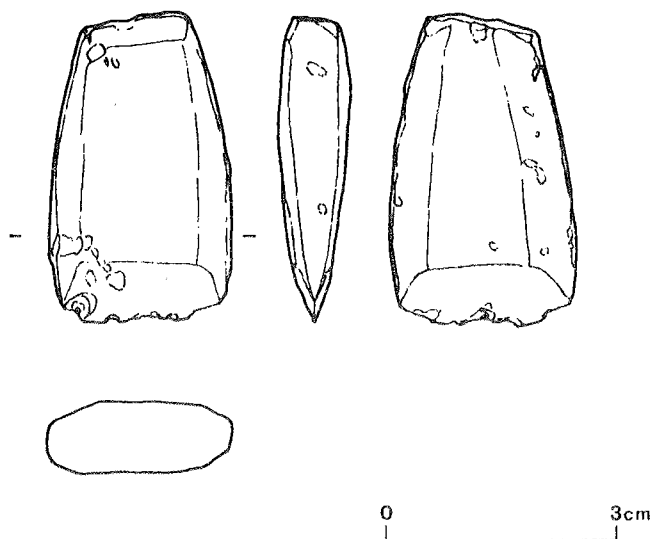
C-2グリッド内、B1号土壙の東方約2.5mに位置する。長径60cm、短径49cmを測る。平面プラン楕円形を呈する。深さ30cm。中央が窪んだ堀り込みに、深鉢2個体が正位に重ねられて出土した。

○B2号土壙出土埋甕（第26図1・2）

1. 深鉢である。口縁部を欠損したものの、ほぼ完形の状態で埋設されていたと推定される。推定口径26.2cm、器高34.2cm、胴部中位以下に被熱による剥落が著しく認められる。沈線区画文



第27图 B区出土遗物(1) (1/3)



第28図 B区出土遺物（原寸）

らしき痕跡も一部に認められるものの、無文の可能性が高い。2. 深鉢の胴部中位である。胴径32.8cm、残存高19.5cm。沈線区画文が描出される。

土壌内には、1を内側、2を外側に破片を嵌め込む様にして埋設されていた。
 帰属はVI群と推定される。

(4) B区出土遺物（第27図・第28図）

遺物包含層中よりの出土である。

第27図1・2、胴部。1. 地文は貝殻文。2. 沈線文が描出される。

3・4、口縁部。3. 沈線区画文が描出される。地文はRL縄文。4. 地文はRL縄文。波状を呈する可能性が有る。5～12、胴部。すべて磨消しが施されている。地文はすべてRL縄文。

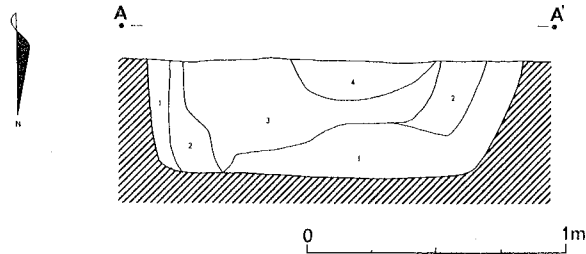
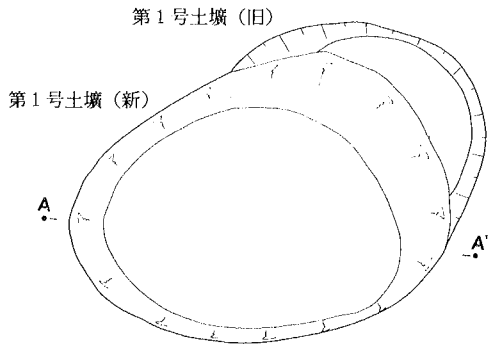
13. 口縁部。14～16、胴部。14・15、沈線で施文される。16. 沈線区画内に刺突が施文される。17. 胴部～底部。区画内が磨消される。地文はRL縄文。

第28図. 小型磨製石斧。現長4.1cm、刃幅2.1cm、最大厚1.0cm、現重17.2g。刃部の一部を欠損し、全体的に風化が著しいものの、面取り整形の状態は認められる。石質は蛇紋岩であろう。

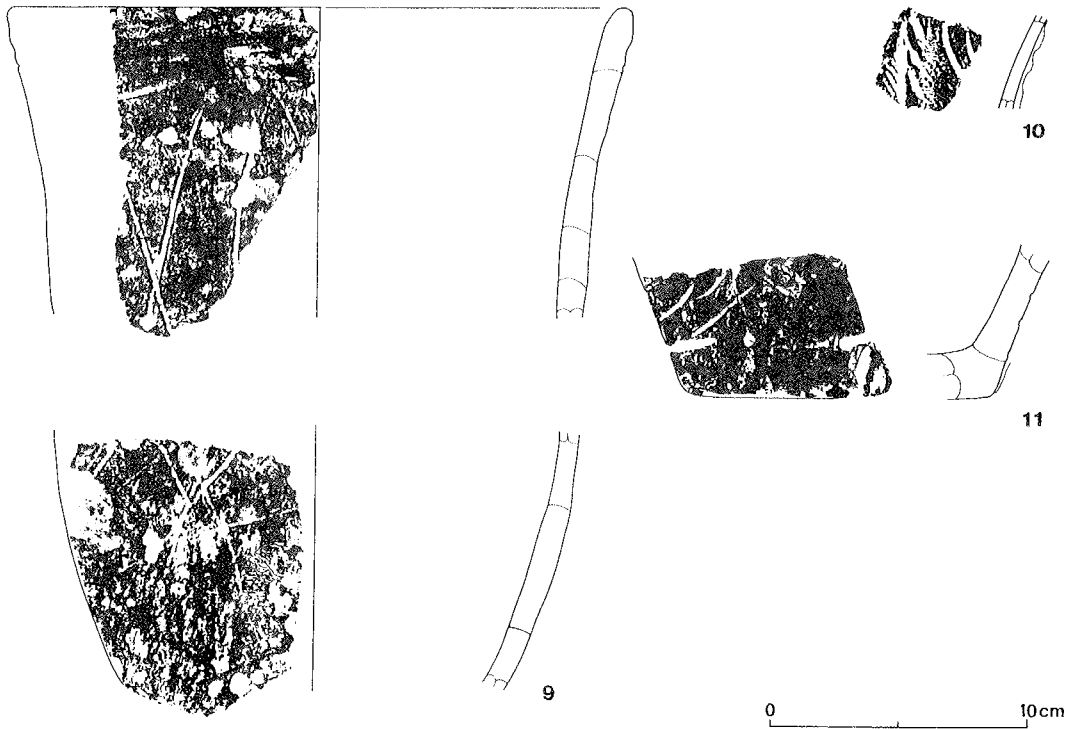
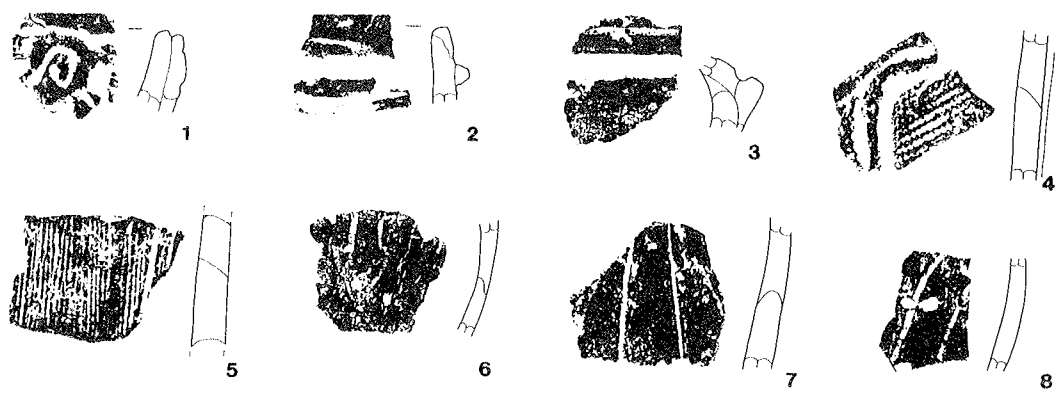
帰属は概ねI群～VI群と推定される。

iii. 単独検出の遺構（第29図～第71図）

A・B両区内検出を除く遺構の内、土壌25基について番号を付し、以下に記述する。それ以外の土壌はすべて重複関係を持つ土壌の記述内で触れるものとする。



- | | | | |
|----------|-----------------|------|-------|
| 1. 暗黄灰色土 | ロームブロック・赤色粒子を含む | しまり弱 | 粘性弱 |
| 2. 暗赤褐色土 | 赤色粒子を少量含む | しまり弱 | 粘性やや強 |
| 3. 暗黄褐色土 | ローム粒子・白色粒子を含む | しまり弱 | 粘性弱 |
| 4. 茶褐色土 | | しまり弱 | 粘性弱 |



第29図 第1号土壇及び出土遺物 (1/30・1/3)

(1) 第1号土壇 (第29図)

E-4 グリッド南半部に位置する。長軸170cm、短軸114cm、平面プラン不整楕円形を呈する。深さ46cm。壁はほぼ垂直に立ち上がる。南西部で土壇 (第1号土壇 (旧)) と切り合う。

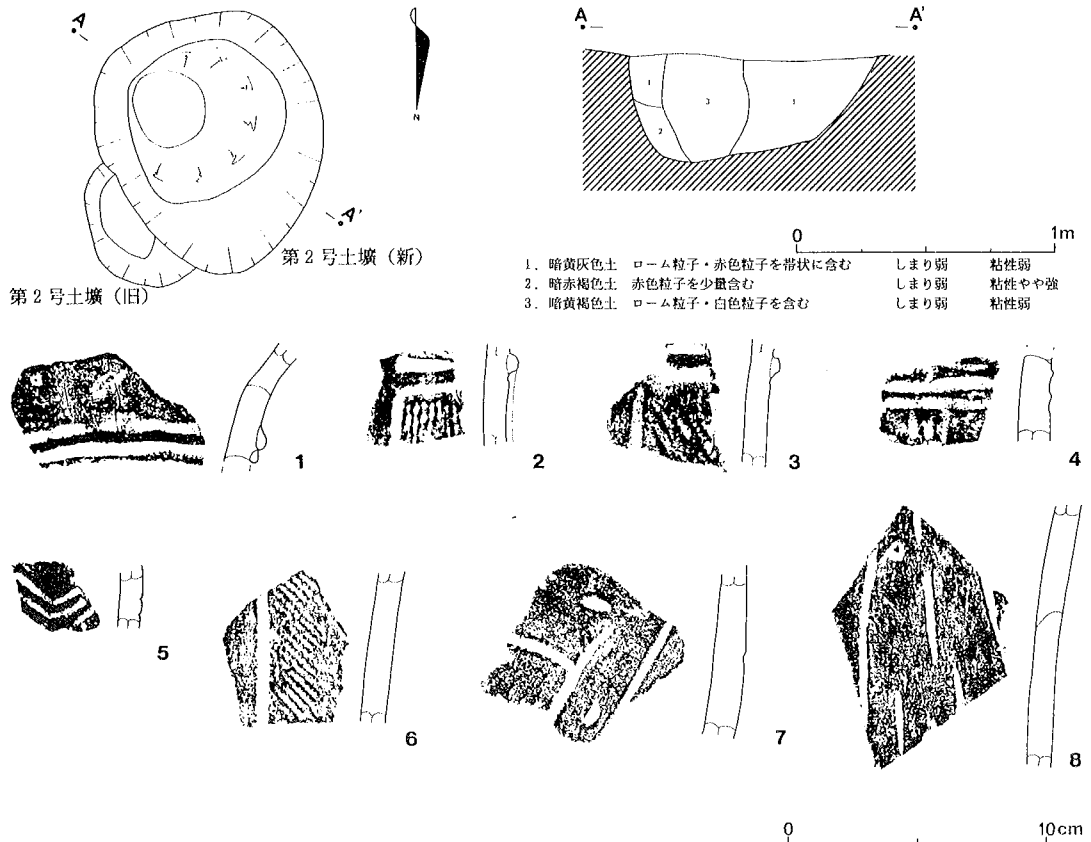
○第1号土壇出土遺物 (第29図)

1・2、口縁部。隆線と沈線で施文される。3～8、胴部。3. 浅鉢の屈曲部。沈線で施文される。4. 隆線と沈線で懸垂文が描出される。地文はLR縄文。5. 地文は条線。6～8、沈線区画文が描出される。9. 口縁部及び胴部下半である。8とともに同一個体の可能性が高い。斜格子目文が描出される。10. 胴部。刻目を有する隆線で懸垂文が描出される。地文はRL縄文。1. 底部。推定底径約12cm。矢羽状沈線文が施文される。

帰属は概ねV群・VI群と推定される。

(2) 第2号土壇 (第30図)

E-4 グリッド内、第1号土壇の北東約1.5mに位置する。長軸104cm、短軸90cm。平面プラン不整楕円形を呈する。北東部で小土壇 (第2号土壇 (旧)) と切合う。深さ44cm。壁は外湾し急角度で立ち上がる。



第30図 第2号土壇及び出土遺物 (1/30・1/3)

○第2号土壇出土遺物（第30図）

1. 頸部。隆線と沈線で区画文が描出される。無文帯を有する。2～6、胴部。2・3、隆線と沈線で施文される。2. 地文は撚糸文L。3. 磨消しを伴う。地文はRL縄文。4. 沈線で施文される。地文はRL縄文。5. 弧線文が描出される。地文は条線。6. 沈線で施文される。磨消しを伴う地文はRL縄文。7・8、胴部。沈線区画内に刺突が施文される。

帰属は、V群・VI群と推定される。

(3) 第3号土壇（第31図）

E-5グリッド内、第2号土壇の北東約3mに位置する。長軸105cm、短軸86cm。平面プランは楕円形を呈する。深さ19cm。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

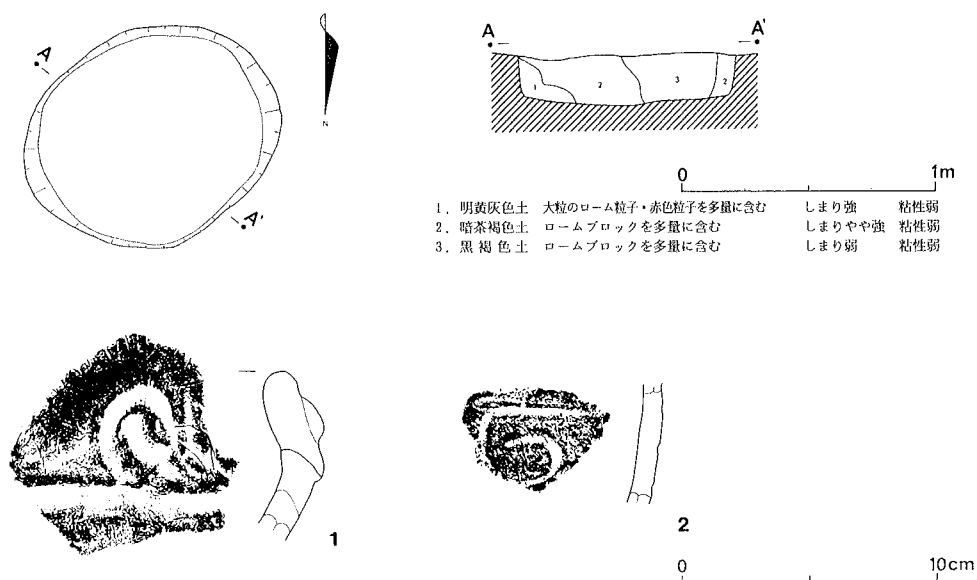
○第3号土壇出土遺物（第31図）

1. 口縁部。波状口縁を呈すると推定される。頂部に渦巻文が描出される。2. 胴部。沈線で施文される。

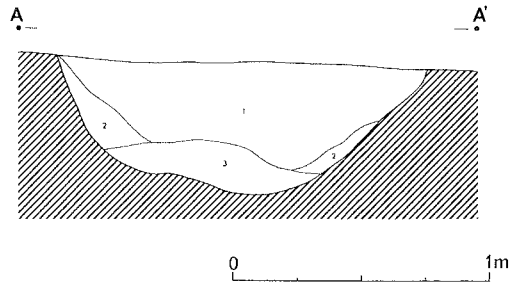
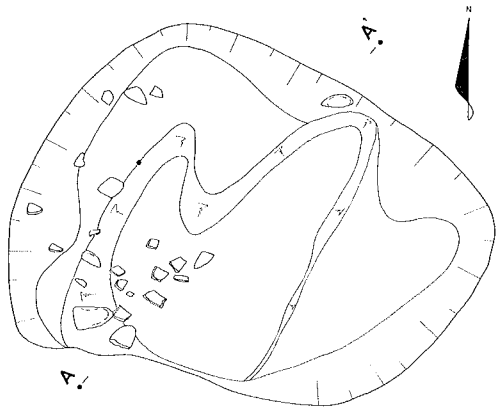
帰属はV群と推定される。

(4) 第4号土壇（第32図）

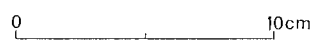
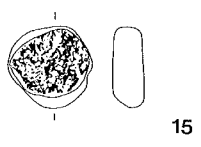
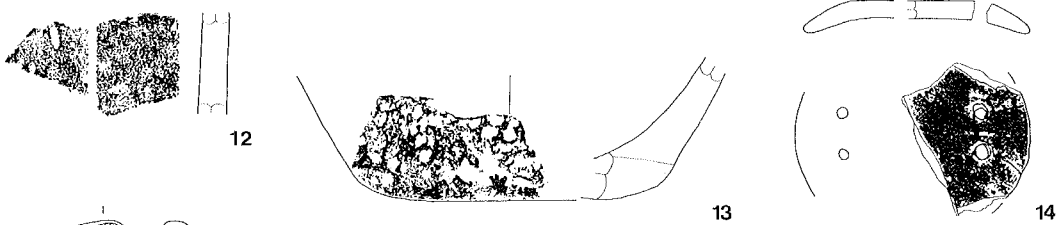
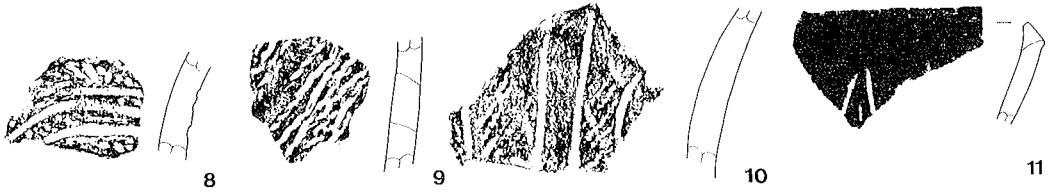
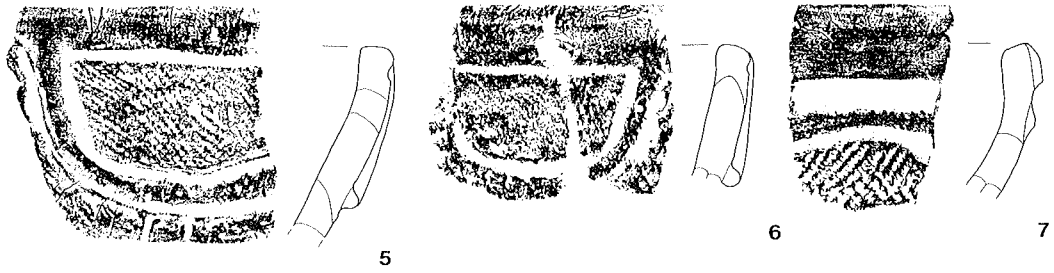
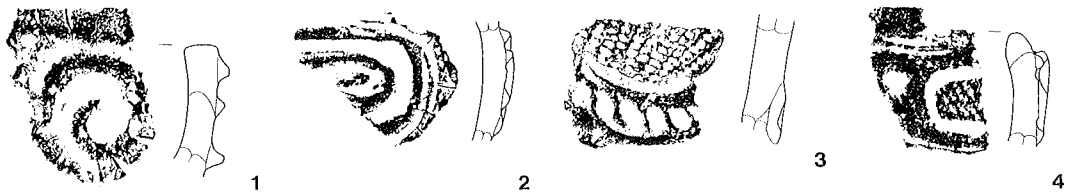
E-4グリッド内に位置する。長軸190cm、短軸140cm。平面プランは不整形円形を呈する。深さ52cm。壁は外湾しつつ立ち上がる。



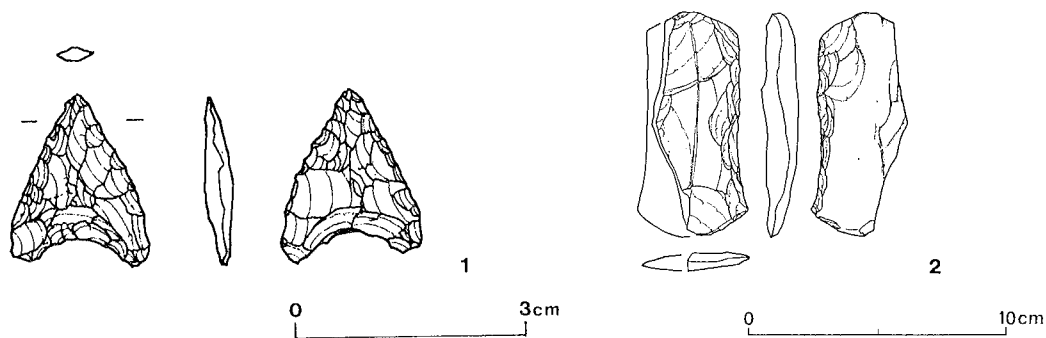
第31図 第3号土壇及び出土遺物（1/30・1/3）



- 1. 暗茶褐色土 ローム粒子・白色粒子・炭化粒子を含む しまり強 粘性弱
- 2. 明黄褐色土 ローム粒子・炭化粒子を含む しまり強 粘性やや強
- 3. 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む しまり弱 粘性強



第32図 第4号土壌及び出土遺物(1) (1/30・1/3)



第33図 第4号土壌出土遺物(2) (原寸・1/3)

○第4号土壌出土遺物 (第32図・第33図)

第32図1～7、口縁部。1. 隆線と沈線で施文される。2. 口唇部欠損。隆線と沈線で施文される。3. 上半部を欠損する。隆線と沈線で施文される。地文はRL縄文。4. 隆線・沈線・刺突で施文される。地文はRL縄文。5・6. 隆線と沈線で施文される。地文はRL縄文。7. 隆線と沈線で施文される。地文はRLとLRによる羽状縄文。8. 頸部であろう。沈線で施文される。地文はRL縄文。9・10、胴部。地文はやや撚りの緩い撚糸文L。10. 磨消しが伴う。地文はRL縄文。

11. 口縁部。沈線で施文される。12. 胴部。沈線と刺突で施文されている。

13. 底部。推定底径約12cm。地文はRL縄文。14. 土製蓋。推定径約9cm、厚さ0.7cm、2個一組の小孔が穿たれている。15. 土製円盤。直径3.2cm、厚さ1.2cm、現重15.1g。地文は撚糸文L。

第33図、石鏃。現長2.35cm。最大幅1.8cm、最大厚4.1cm。現重1.5g。ほぼ完存する。形態は凹基無茎。調整は入念である。石質はチャート。2. 打製石斧。現長8.9cm、最大幅1.8cm、最大厚1.4cm、現重60.4g。原礫面を残す。図中左側縁部を欠損する。石質は真岩。

帰属はV群・VI群と推定される。

(5) 第5号土壌 (第34図)

D-5グリッド内、第4号土壌の北東約9mに位置する。長軸約2m、短軸約1.5m、平面プラン不整楕円形を呈する。東端部が柵状を呈する。深さ約32cm、壁は急角度で立ち上がる。

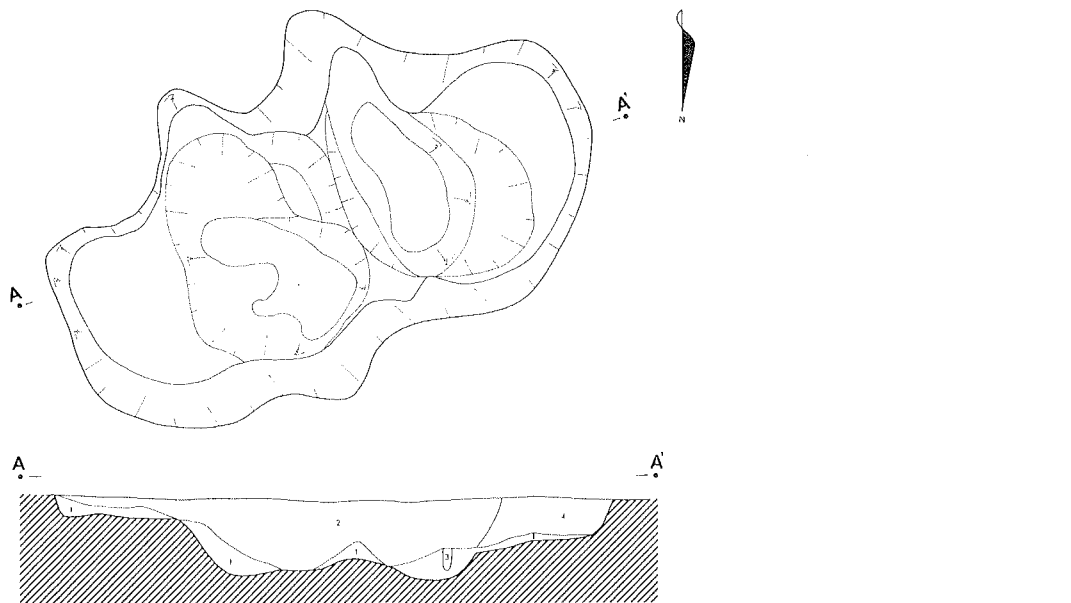
○第5号土壌出土遺物 (第34図)

胴部。地文は異条のLRL。

帰属は不明。

(6) 第6号土壌 (第35図)

C-5・D-5グリッド境界部、第5号土壌の北西約2mに位置する。長軸89cm、短軸58cm。平面プラン楕円形を呈する。上部は削平されている。深さ7cm。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。



- | | | | |
|------------|------------------|------|-----|
| 1. 暗黄灰色土 | ローム粒子・黒色粒子を多量に含む | しまり弱 | 粘性強 |
| 2. 黒褐色土 | ローム粒子・赤色粒子を多量に含む | しまり弱 | 粘性強 |
| 3. ロームブロック | | | |
| 4. 暗黄褐色土 | ローム粒子を多量に含む | しまり弱 | 粘性強 |

0 1m



0 10cm

第34図 第5号土壌及び出土遺物 (1/30・1/3)

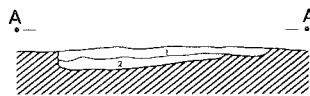
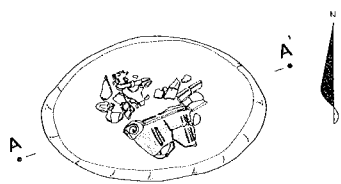
たものと推定される。

○第6号土壌出土遺物 (第35図・第36図)

1～3、口縁部。1. 隆線と沈線で施文される。地文はLR縄文。2. 隆線とで施文される。地文はRL縄文。3. 隆線と沈線で施文される。地文はLR縄文。4. 頸部。隆線で施文される。地文はRL縄文。5・6、胴部。5. 隆線で施文される。地文はRL縄文。6. 浅鉢であろう。内面屈曲部を中心に赤色顔料が残存する。7. 底部。推定底径約8cm。

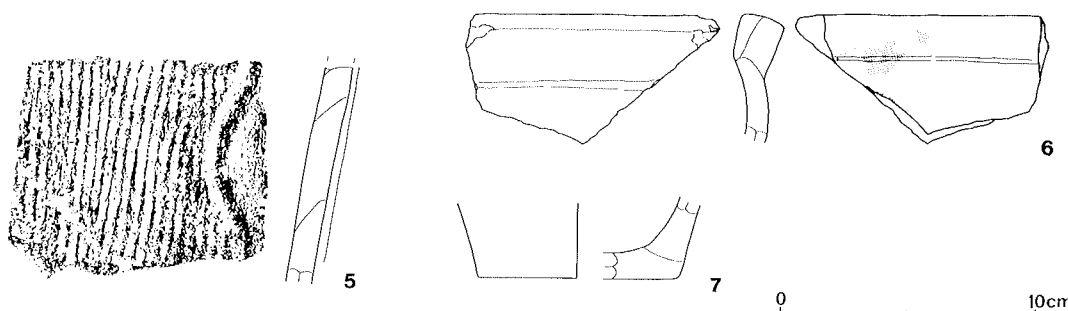
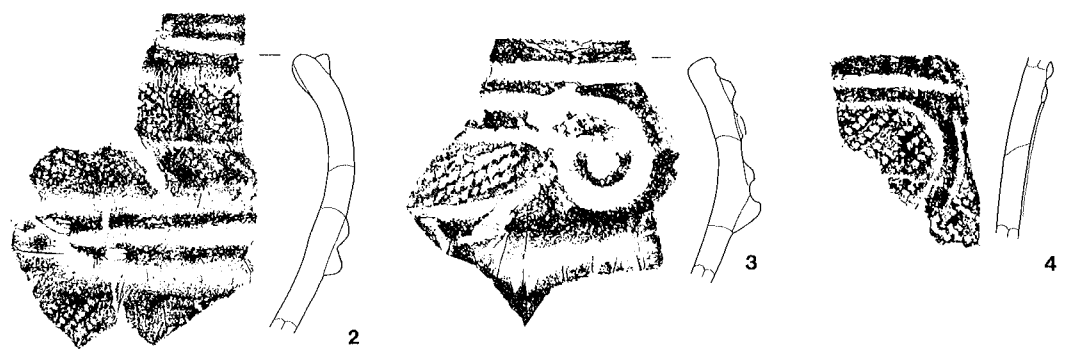
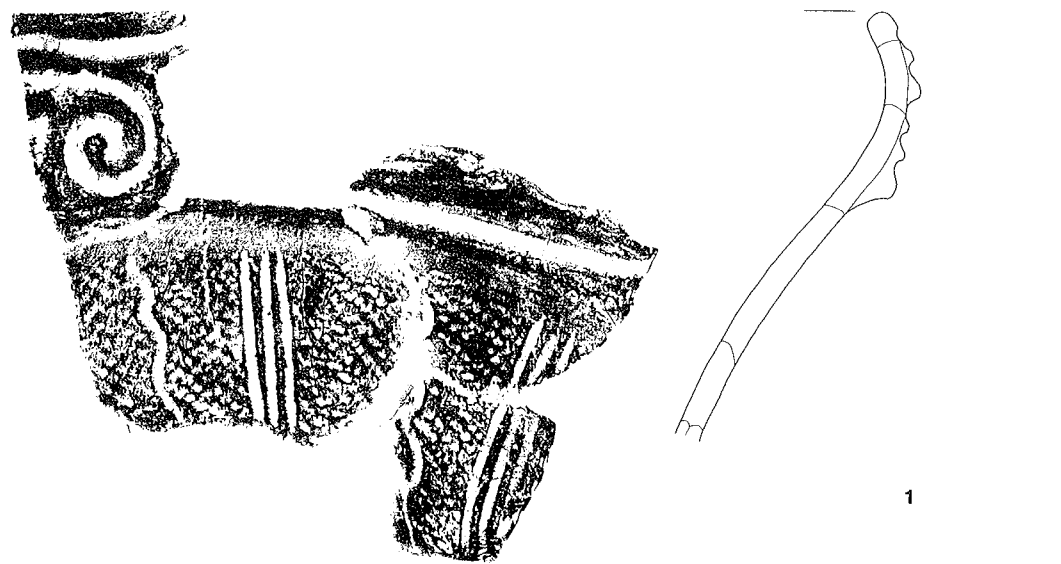
第36図、打製石斧。現長8.9cm、最大幅4.1cm、最大厚1.8cm、現重73.4g。原礫面を一部残す刃部を欠損する。石質はホルンフェルス。

帰属はV群と推定される。



0 1m

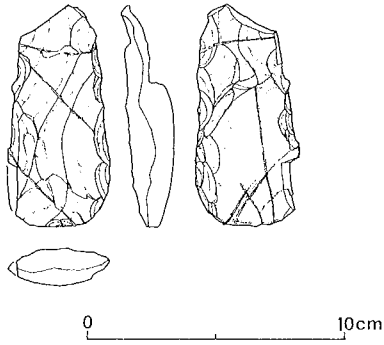
- 1. 赤茶褐色土 焼土粒子・白色粒子を含む しまり強 粘性弱
- 2. 暗黄灰色土 しまり強 粘性弱



0 10cm

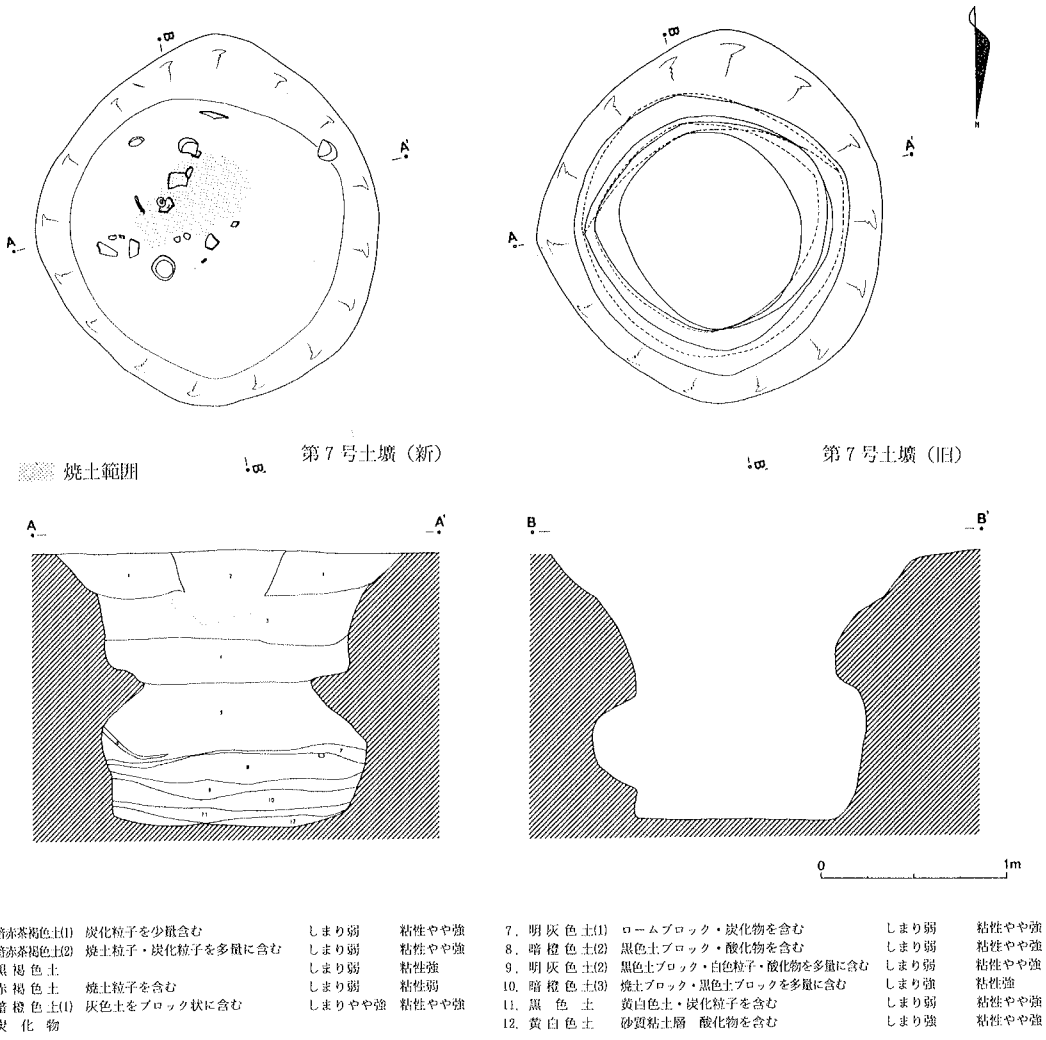
第35図 第6号土壙及び出土遺物(1) (1/30・1/3)

(7) 第7号土壙 (第37図)



第36図 第6号土壙出土遺物 (1/3)

C-4・C-5グリッドの境界部、第6号土壙の北西約3mに位置する。本土壙は最初貯蔵穴として構築され、放棄埋没後、再度土壙を構築し、火熱を使用したと推定される。貯蔵穴(第7号土壙(旧))は深さ1.5mを測り、断面はキンチャク型を呈している。規模は明確ではないが、平面プラン円形を呈したと推定される。底面は下層の礫層に達している。再構築された土壙(第7号土壙(新))は直径約200cm、平面プランはほぼ円形を呈する。深さ約40cm、壁は外湾しつつ緩やかに立ち上がる。中央部の掘り込み部分に焼土域が確認されている。



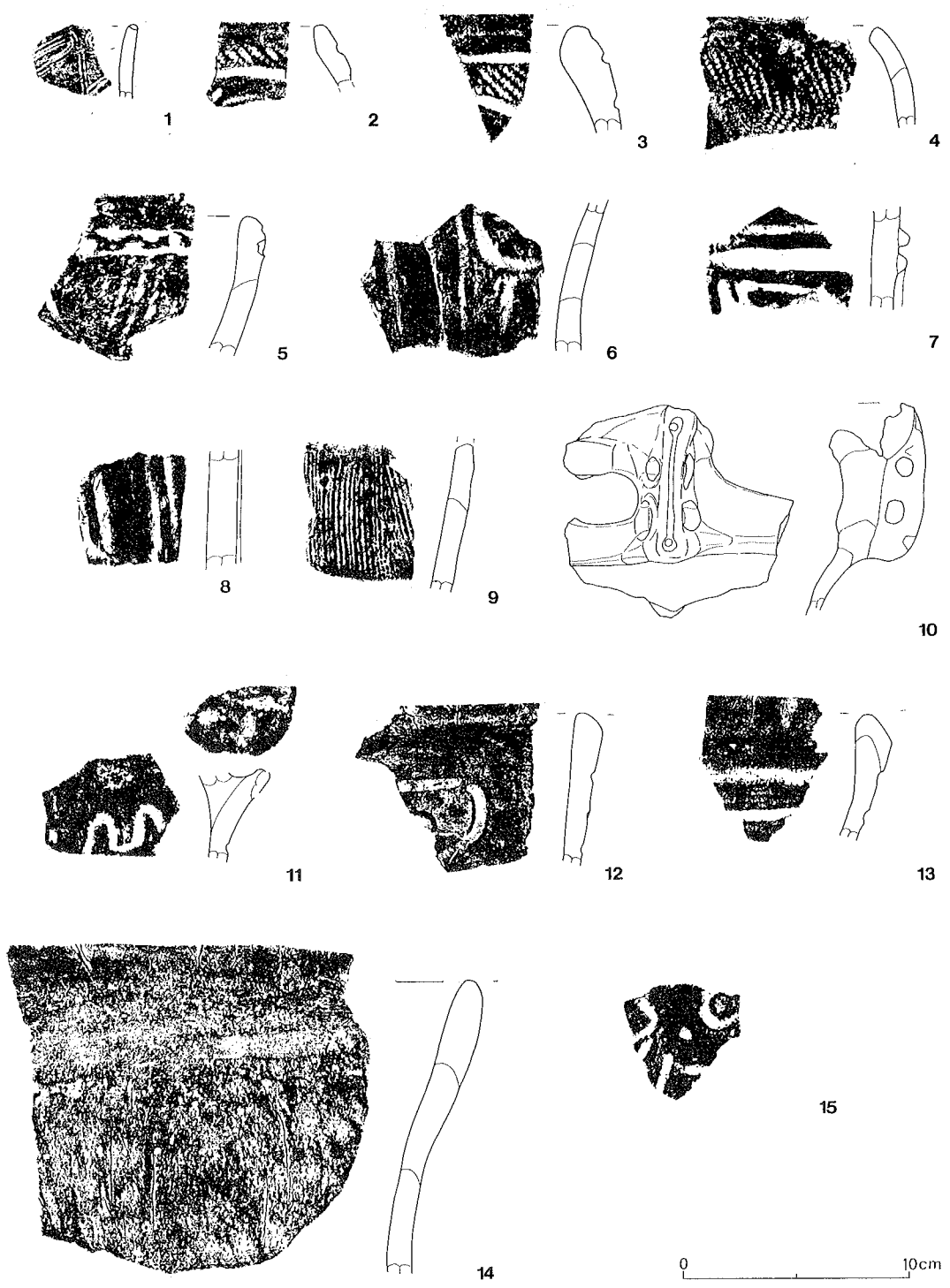
- 1. 暗赤褐色土① 炭化粒子を少量含む
- 2. 暗赤褐色土② 焼土粒子・炭化粒子を多量に含む
- 3. 黒褐色土
- 4. 赤褐色土 焼土粒子を含む
- 5. 暗褐色土① 灰色土をブロック状に含む
- 6. 炭化物

- しまり弱 粘性やや強
- しまり弱 粘性やや強
- しまり弱 粘性強
- しまり弱 粘性弱
- しまりやや強 粘性やや強

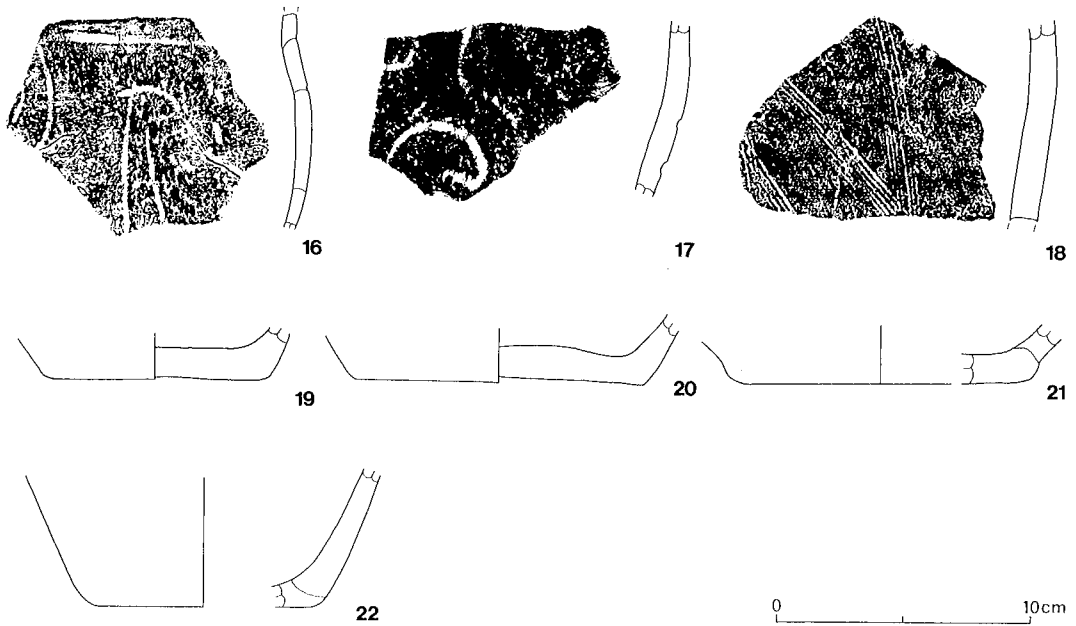
- 7. 明灰色土① ロームブロック・炭化物を含む
- 8. 暗褐色土② 黒色土ブロック・炭化物を含む
- 9. 明灰色土② 黒色土ブロック・白色粒子・炭化物を多量に含む
- 10. 暗褐色土③ 焼土ブロック・黒色土ブロックを多量に含む
- 11. 黒色土 黄白色土・炭化粒子を含む
- 12. 黄白色土 砂質粘土層 炭化物を含む

- しまり弱 粘性やや強
- しまり弱 粘性やや強
- しまり弱 粘性やや強
- しまり強 粘性強
- しまり弱 粘性やや強
- しまり強 粘性やや強

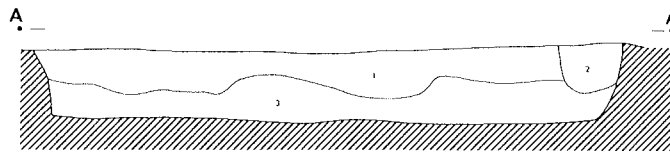
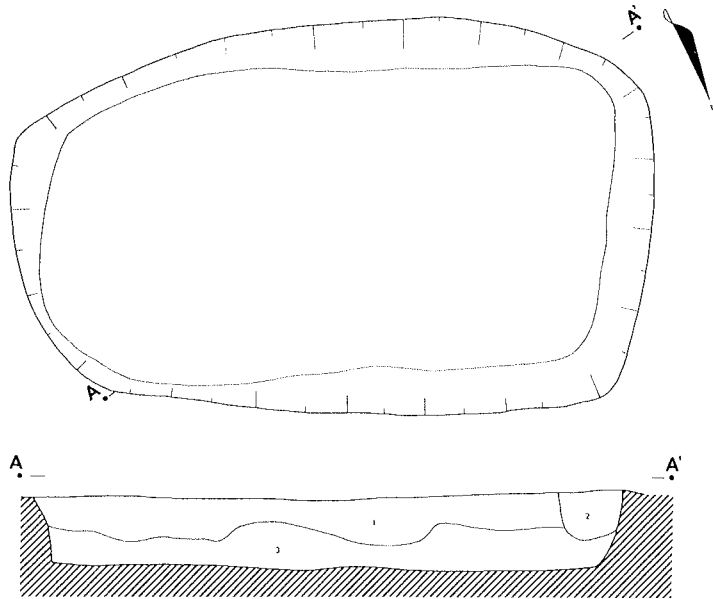
第37図 第7号土壙 (1/40)



第38图 第7号土壙出土遺物(1) (1/3)



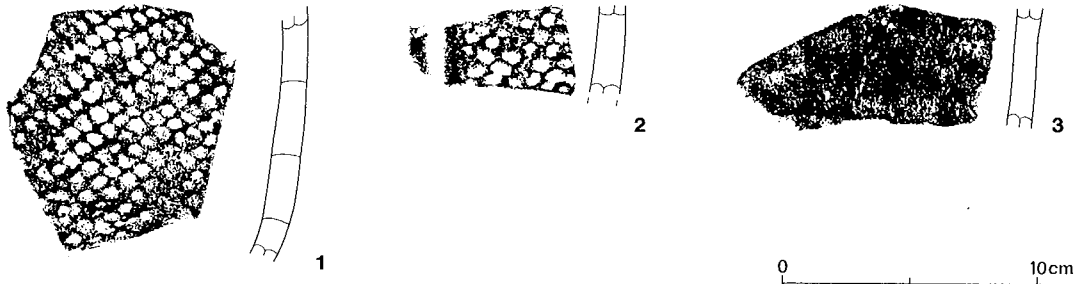
第39図 第7号土壇出土遺物(2) (1/3)



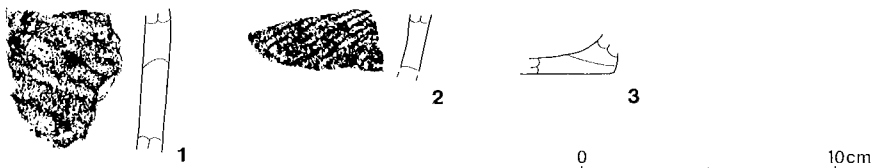
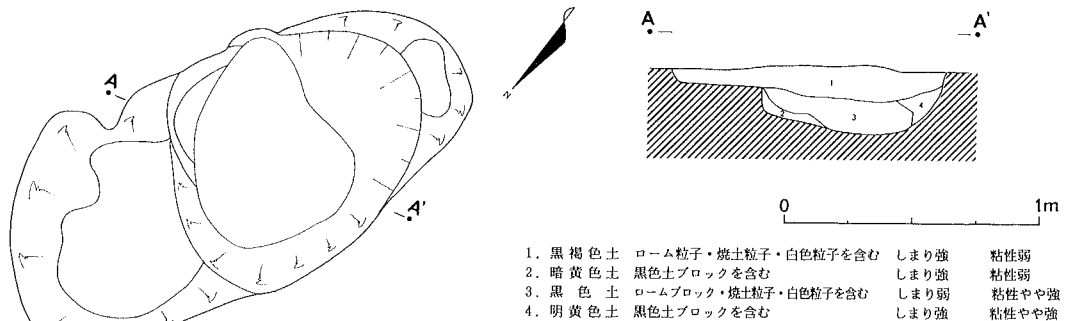
0 1m

- | | | |
|--------------------------|------|-------|
| 1. 暗茶褐色土 焼土粒子・白色粒子を多量に含む | しまり強 | 粘性弱 |
| 2. 暗茶褐色土 焼土粒子・白色粒子を多量に含む | しまり強 | 粘性弱 |
| 3. 暗黄色土 白色粒子を含む | しまり弱 | 粘性やや強 |

第40図 第8号土壇 (1/30)



第41図 第8号土壌出土遺物 (1/3)



第42図 第9号土壌及び出土遺物 (1/30・1/3)

○第7号土壌出土遺物 (第38図・第39図)

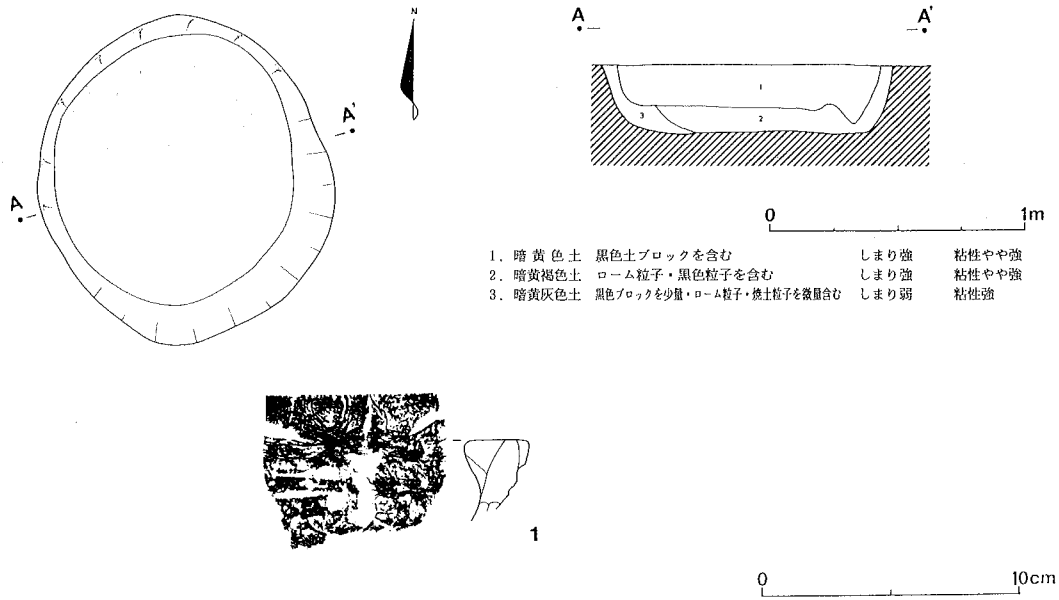
第38図 1～5、口縁部。1. 沈線で施文される。2・3、沈線区画が描出される。地文はRL縄文。4. 地文はRL縄文。5. 沈線と刺突で連弧文が描出される。地文は撚糸文L。6～9、胴部。6. 沈線で施文される。地文はLR縄文。7・8、隆線で施文される。9. 地文は条線。

10～14、口縁部。10. 隆線で施文された把手を備える。11. 把手基部。沈線で施文される。12. 沈線と刺突で施文される。13. 沈線で施文される。15. 隆線、沈線、刺突で施文される。16～18、胴部。16・17、沈線で施文される。18. 条線文が描出される。19～22、底部。19. 底径8.8cm。20. 底径11.4cm。21. 底径12.0cm。22. 推定底径約9cm。

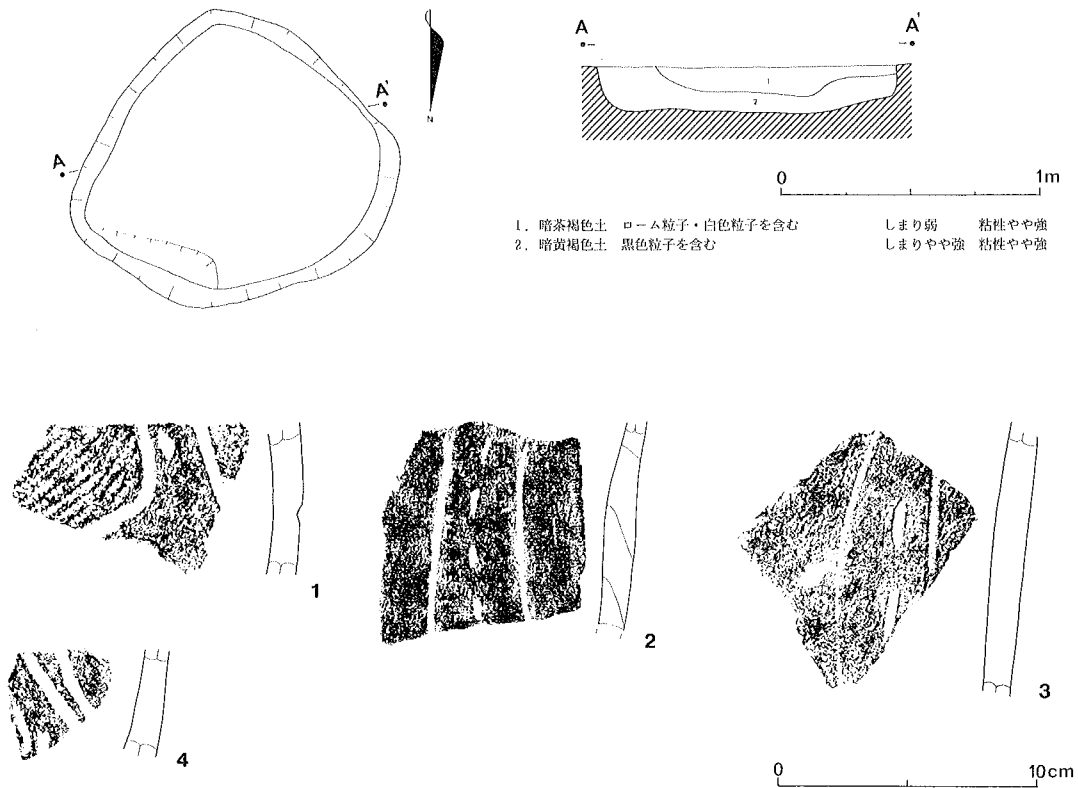
帰属は概ねⅢ群～Ⅵ群と推定される。

(8) 第8号土壌 (第40図)

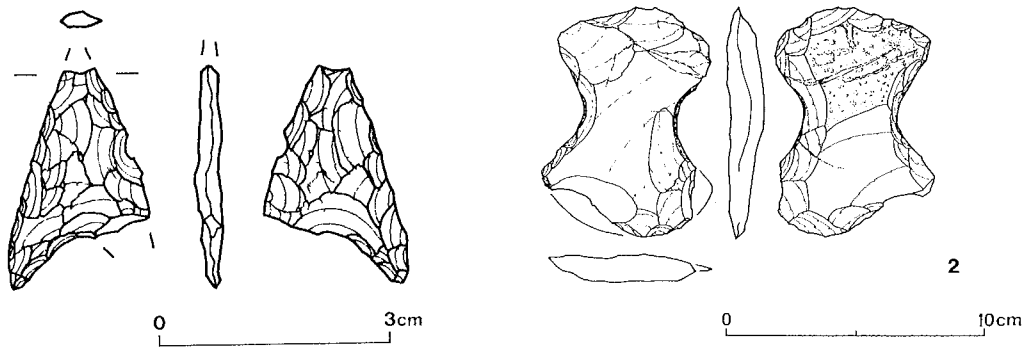
C-5グリッド内、第7号土壌の北東約2.5mに位置する。長軸253cm、短軸156cm。平面プラン隅丸方形を呈する。深さ27cm。壁はほぼ垂直に立ち上がる。



第43図 第10号土壌及び出土遺物 (1/30・1/3)



第44図 第11号土壌及び出土遺物(1) (1/30・1/3)



第45図 第11号土壙出土遺物（原寸・1/3）

○第8号土壙出土遺物（第41図）

全て胴部。1. 地文はRL縄文。2. 沈線で施文される。地文はRL縄文。
 帰属は不明だが、V群の可能性が高い。

(9) 第9号土壙（第42図）

B-4・B-5グリッド境界部、第8号土壙の北西約5mに位置する。長軸197cm、短軸96cm
 平面プラン不整楕円形を呈する。中央部が更に掘り窪んだ形態を呈する。深さ26cm。壁はやや外
 湾するものの、ほぼ垂直に立ち上がる。

○第9号土壙出土遺物（第42図）

1・2、胴部。2. 地文はRL縄文。3. 底部。小破片のため、推定底径の算出不能。
 帰属は不明。

(10) 第10号土壙（第43図）

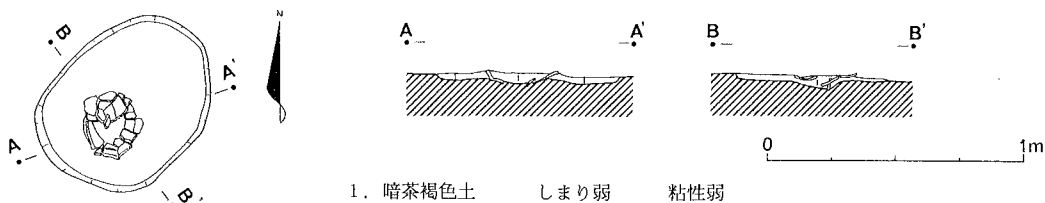
B-4・C-4グリッド境界部、第9号土壙の南西約4.7mに位置する。直径約130cm。平面プ
 ランはほぼ円形を呈する。深さ27cm。壁は外湾しつつほぼ垂直に立ち上がる。

○第10号土壙出土遺物（第43図）

口縁部。表面の剥離風化が著しいが、沈線で施文される。地文はLR縄文。
 帰属は不明だが、V群の可能性が有る。

(11) 第11号土壙（第44図）

C-4グリッド内、第10号土壙の北約1.7mに位置する。直径約130cm。平面プラン不整円形を
 呈する。深さ18cm。壁はほぼ垂直に立ち上がる。



1. 暗茶褐色土 しまり弱 粘性弱

第46図 第12号土壙 (1/30)

○第11号土壙出土遺物 (第44図・第45図)

全て胴部。1. 沈線区画内に刺突とRL縄文が施文される。2. 沈線区画内に刺突が施文される。

第45図 1. 石鏃。現長3.0cm、最大幅1.8cm、最大厚3.0cm、現重1.6g。先端部と図中右脚部を欠損する。形態は凹基無茎を呈する。石質はホルンフェルス。2. 打製石斧。現長9.2cm、刃幅5.8cm、最大厚1.3cm、現重88.1g。原礫面を残す。刃部を一部欠損する。石質はホルンフェルス。帰属はVI群と推定される。

(12) 第12号土壙 (第46図)

B-4・C-4グリッド境界部、第11号土壙の西約1.8mに位置する。上部は殆ど削平されている。長軸76cm、短軸58cm。平面プラン楕円形を呈する。深さ4.0cm。壁はほぼ垂直に立ち上がっていたと推定されるが、詳細は不明。

○第12号土壙出土遺物 (第47図)

胴部～底部。推定底径約8.2cm。沈線で施文される。地文はRL縄文。帰属はV群と推定される。

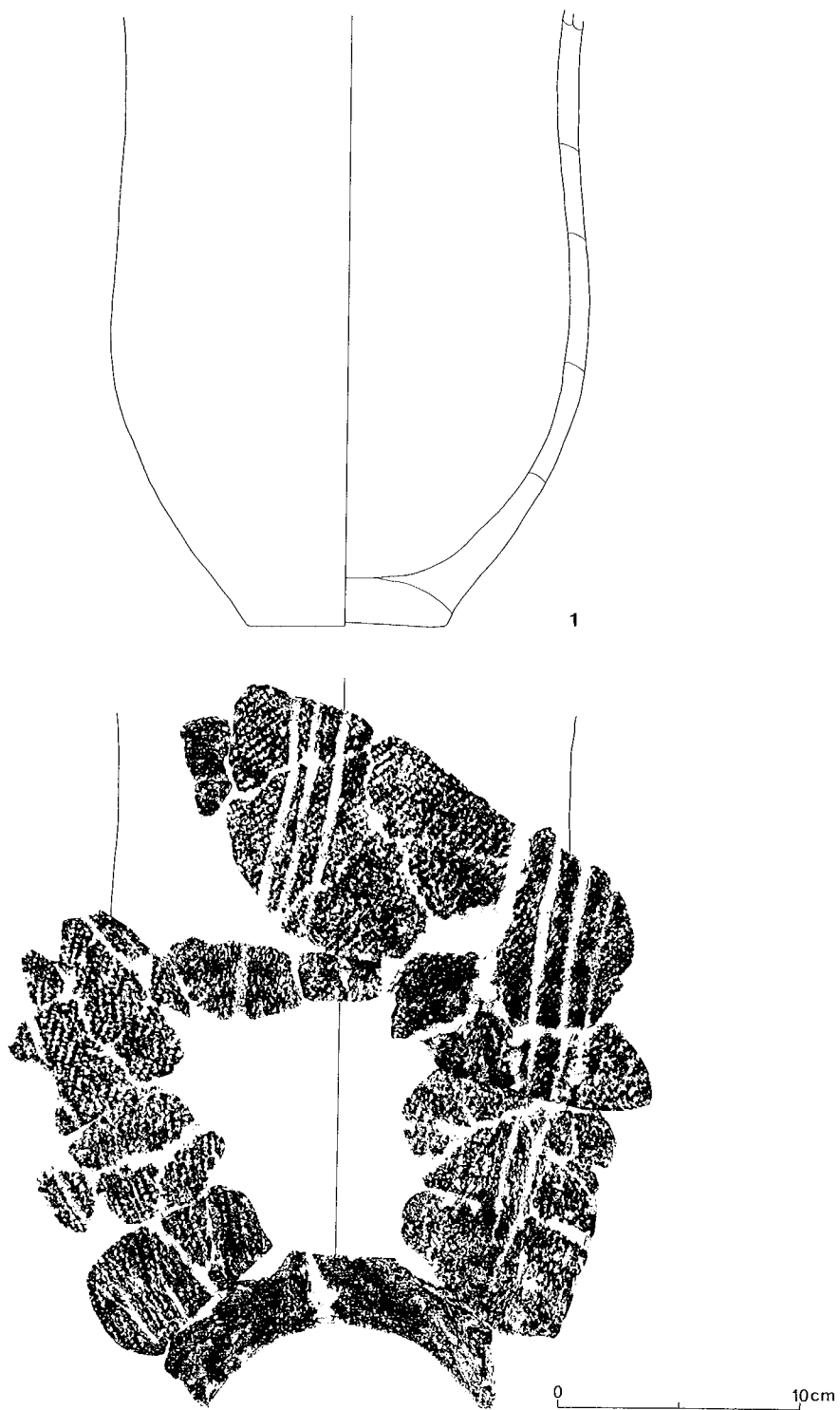
(13) 第13号土壙 (第48図)

B-4グリッド内、第12号土壙の北約1.7mに位置する。直径約90cm。平面プラン不整円形を呈する。深さ33cm。壁は一部外湾するが、ほぼ垂直に立ち上がる。

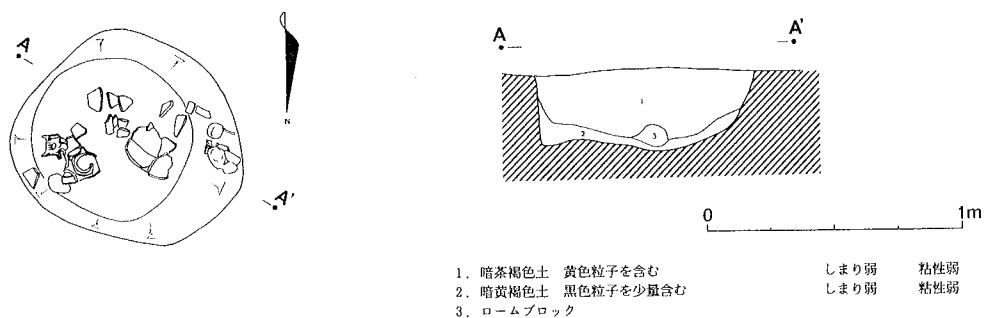
○第13号土壙出土遺物 (第49図・第50図)

第49図 1・2、口縁部。1. 剣先状の把手を備える。隆線と沈線で施文される。地文はRL縄文。2. 四脚の把手と直下にX状把手を備える。縄文が施文されるが、器面の風化が著しく、原体の判別は不明。3・4、頸部。3. 隆線で施文される。4. 沈線で施文される。地文はRL縄文。5～10胴部。5～12、地文は全てRL縄文。10. 沈線と刺突で施文される。11・12、赤彩土器片。11. 外面屈曲部上に幅約7mmで横位、内面に幅約5mmで放射状に塗彩される。12. 内面屈曲部上に塗彩される。第50図 13・14、底部。13. 推定底径約16cm。隆線と沈線で施文される。地文はRL縄文。14. 推定底径約10cm。

15. 磨石。長径9.8cm、短径7.1cm、最大厚5.1cm、重さ360g。断面不整楕円形を呈する円礫で、



第47图 第12号土坑出土遗物 (1/3)



第48図 第13号土壙 (1/30)

図中正背面に磨痕、上下端部に敲打痕が認められる。軟質。全体的に風化著しい。石質は安山岩。帰属はV群・VI群と推定される。

(14) 第14号土壙 (第51図)

B-3グリッド内、第13号土壙の北西約3mに位置する。推定長軸約60cm、短軸52cm。平面プラン楕円形を呈する。北に直径55cm、平面プラン不整形円形を呈する土壙(第14号土壙(旧)、出土遺物無し)を切って構築されている。深さ37cm。壁は急角度で立ち上がる。

○第14号土壙出土遺物 (第51図)

胴部。地文はRL縄文。
帰属は不明。

(15) 第15号土壙 (第52図)

B-3グリッド北東端、第14号土壙の北約2.7mに位置する。直径約100cm。平面プランほぼ円形を呈する。深さ50cm。断面キンチャク型を呈する。

○第15号土壙出土遺物 (第52図)

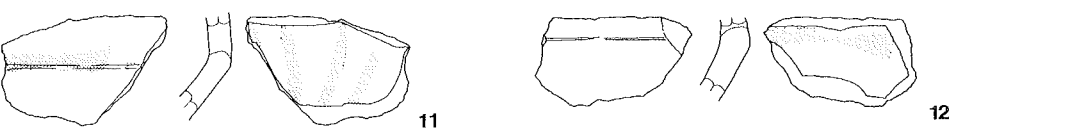
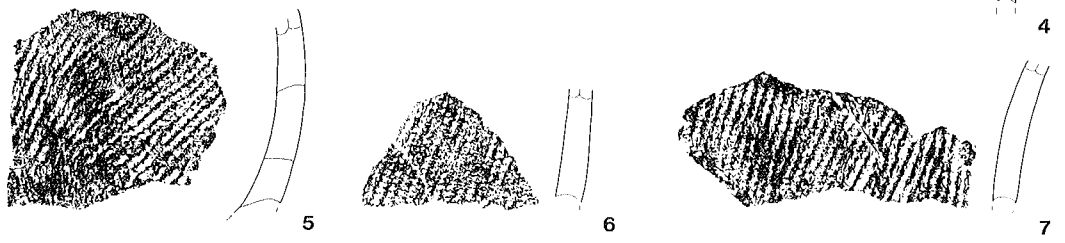
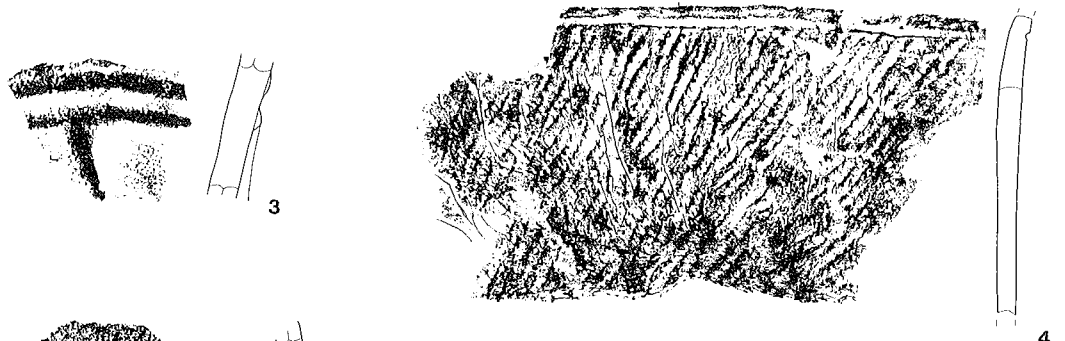
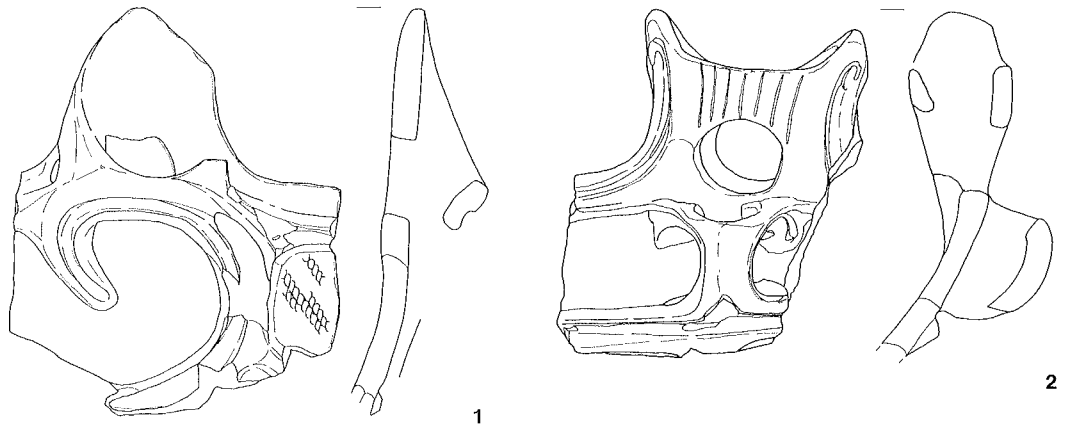
1~3、口縁部。1・2、隆線と沈線で施文される。2の地文はRL縄文。3. 沈線で施文される地文はRL縄文。4. 胴部。隆線で施文される。地文はRL縄文。

5~8、胴部。沈線で施文される。6は刺突が施文される。

9. 土製円盤。長径3.7cm、短径3.2cm、厚さ1.0cm、現重14.6g。沈線で施文される。地文はRL縄文。

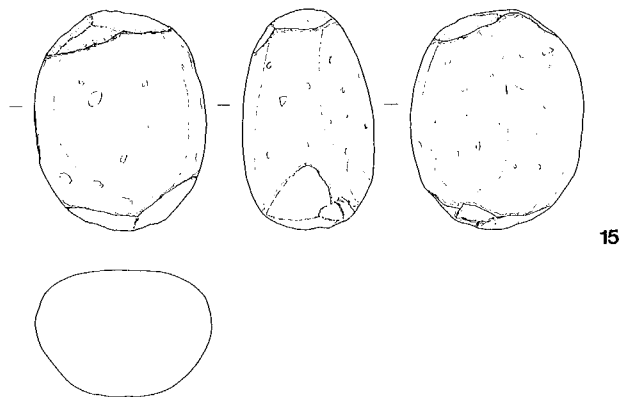
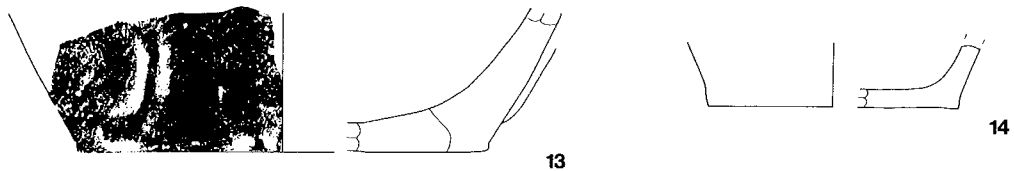
10. 石鏃。現長1.7cm、最大幅1.6cm、最大厚0.4cm、現重1.3g。ほぼ完形。形態は凹基無茎調整は丁寧。石質はチャート。

帰属はV群、VI群と推定される。



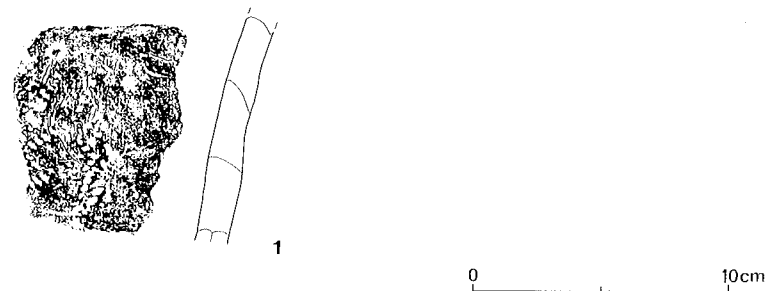
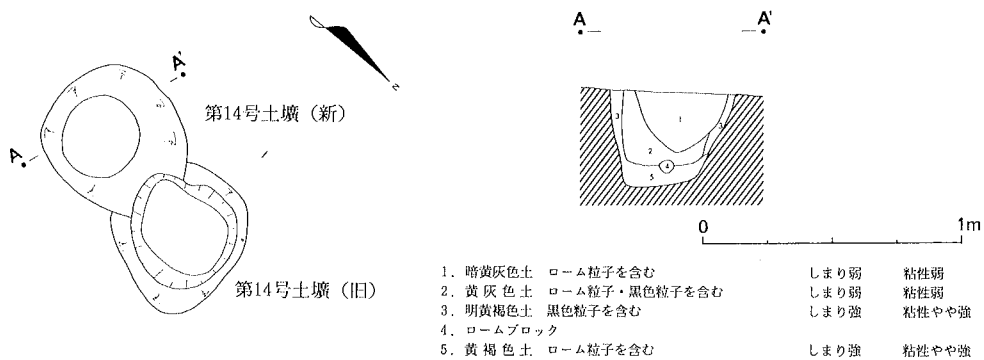
0 10cm

第49图 第13号土坑出土遗物(1)

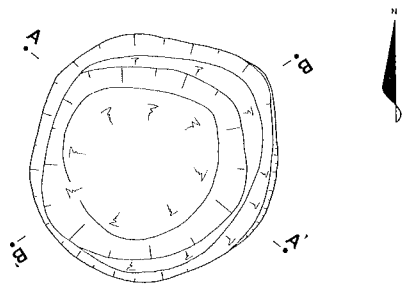


0 10cm

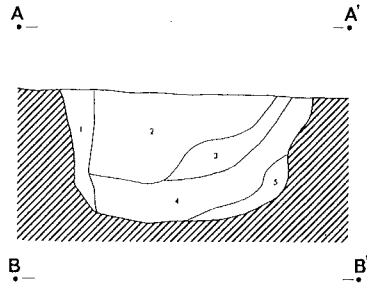
第50図 第13号土壌出土遺物(2) (1 / 3)



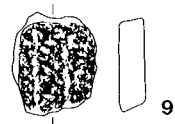
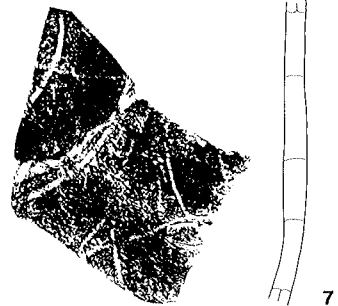
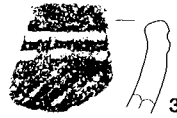
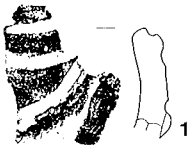
第51図 第14号土壌及び出土遺物 (1 / 30・1 / 3)



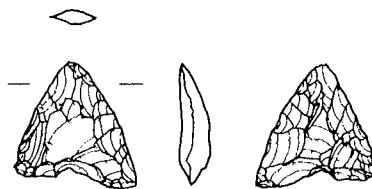
0 1m



- | | | | |
|-------------|---------------|------|-------|
| 1. 明黄褐色土 | 明灰色粒子を含む | しまり弱 | 粘性弱 |
| 2. 暗黄灰色土(1) | ローム粒子・炭化粒子を含む | しまり弱 | 粘性やや強 |
| 3. 明黄灰色土 | ローム粒子・炭化粒子を含む | しまり弱 | 粘性やや強 |
| 4. 暗黄灰色土(2) | ロームブロックを多量に含む | しまり弱 | 粘性強 |
| 5. 黒色土 | ロームブロックを含む | しまり弱 | 粘性強 |

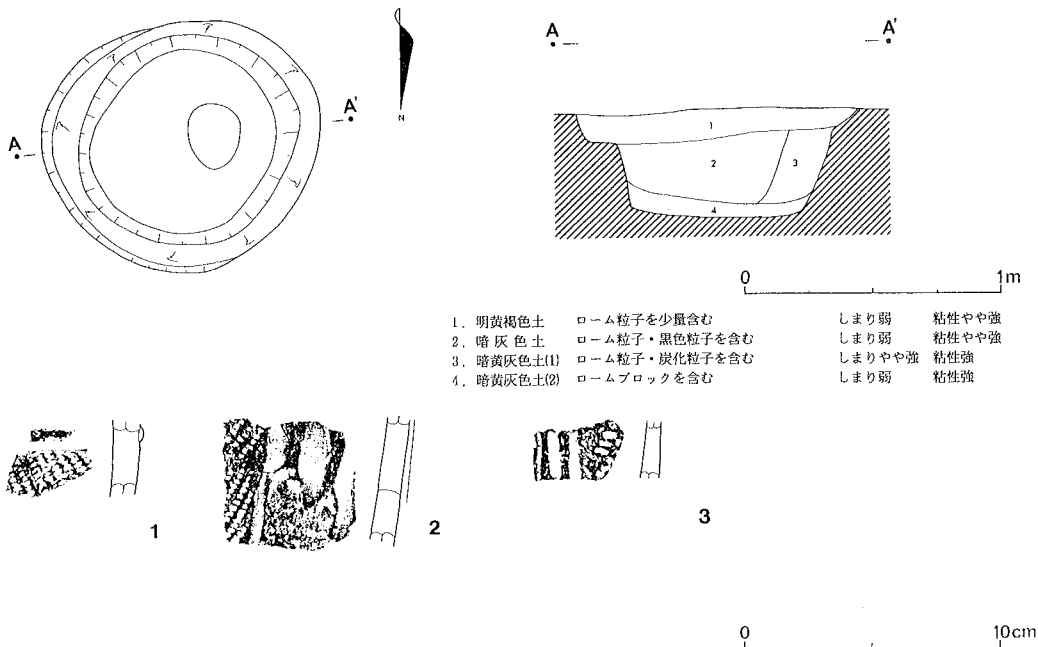


0 10cm

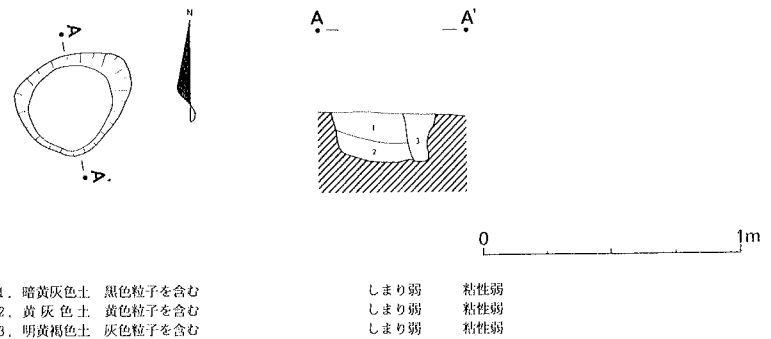


0 3cm

第52図 第15号土壌及び出土遺物 (1/30・1/3・原寸)



第53図 第16号土壙及び出土遺物 (1/30・1/3)



第54図 第17号土壙 (1/30)

(16) 第16号土壙 (第53図)

A-3・B-3グリッド境界部、第15号土壙の北西約40cmに位置する。長軸110cm、短軸100cm平面プラン楕円形を呈する。深さ43cm。断面キンチャク型に類する形態を呈する。

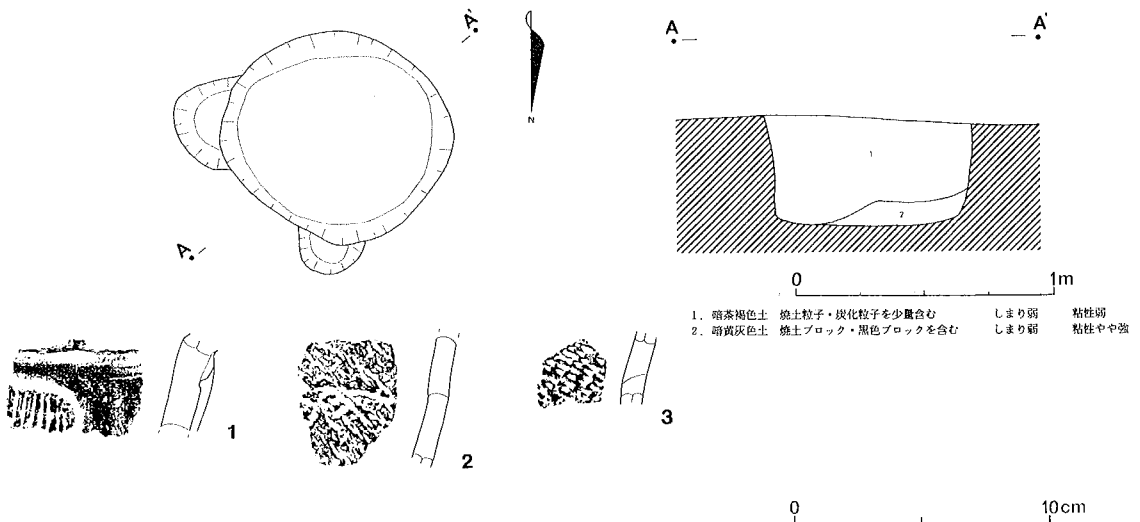
○第16号土壙出土遺物 (第53図)

全て胴部。1. 隆線で施文される。地文はLR縄文。2. 隆線と沈線で施文される。地文はRL縄文。3. 沈線で施文される。地文はRL縄文。

帰属はV群と推定される。

(17) 第17号土壙 (第54図)

B-2グリッド内、第16号土壙の南西約1.5mに位置する。長軸47cm、短軸37cm。平面プラン



第55図 第18号土坑及び出土遺物（1/30・1/3）

不整形円形を呈する。深さ20cm。壁は急角度で立ち上がる。出土遺物は無かった。

(18) 第18号土坑（第55図）

B-3グリッド内、第17号土坑の南東約50cmに位置する。長軸93cm、短軸80cm。平面プラン不整形円形を呈する。小型の土坑2基と切り合う。深さ43cm。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

○第18号土坑出土遺物（第55図）

1. 口縁部。口唇部を欠損する。隆線と沈線で施文される。2・3、胴部。2. 地文はLの撚糸文と推定される。3. 偽縄文を地文とする。

帰属は1がV群、2・3は不明。

(19) 第19号土坑（第56図）

B-3グリッド内、第18号土坑の南西約40cmに位置する。長軸130cm、短軸90cm。平面プラン不整形楕円形を呈する。南西の土坑（第19号土坑（新））は、北東の土坑の埋没後の構築と推定される。深さは旧土坑76cm、新土坑46cm。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

○第19号土坑出土遺物（第56図）

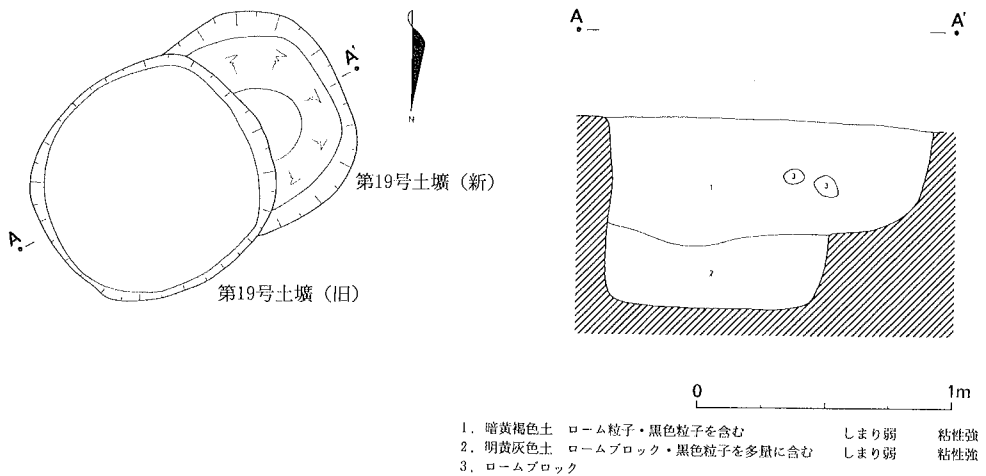
1. 口縁部。沈線で施文される。

2. 口縁部。沈線で施文される。補修孔を有する。3. 胴部。条線文が施文される。

帰属はV群・VI群と推定される。

(20) 第20号土坑（第57図）

B-3グリッド内、B区北東端に位置する。倒木痕と切り合う。長軸130cm、短軸110cm。平面



第56図 第19号土坑及び出土遺物 (1/30・1/3)

プラン不整円形を呈する。深さ35cm。壁は明確ではないが、急角度で立ち上がる様である。倒木後の構築と推定される。内部より直径5～20cmの礫が多量に出土した。

○第20号土坑出土遺物 (第58図)

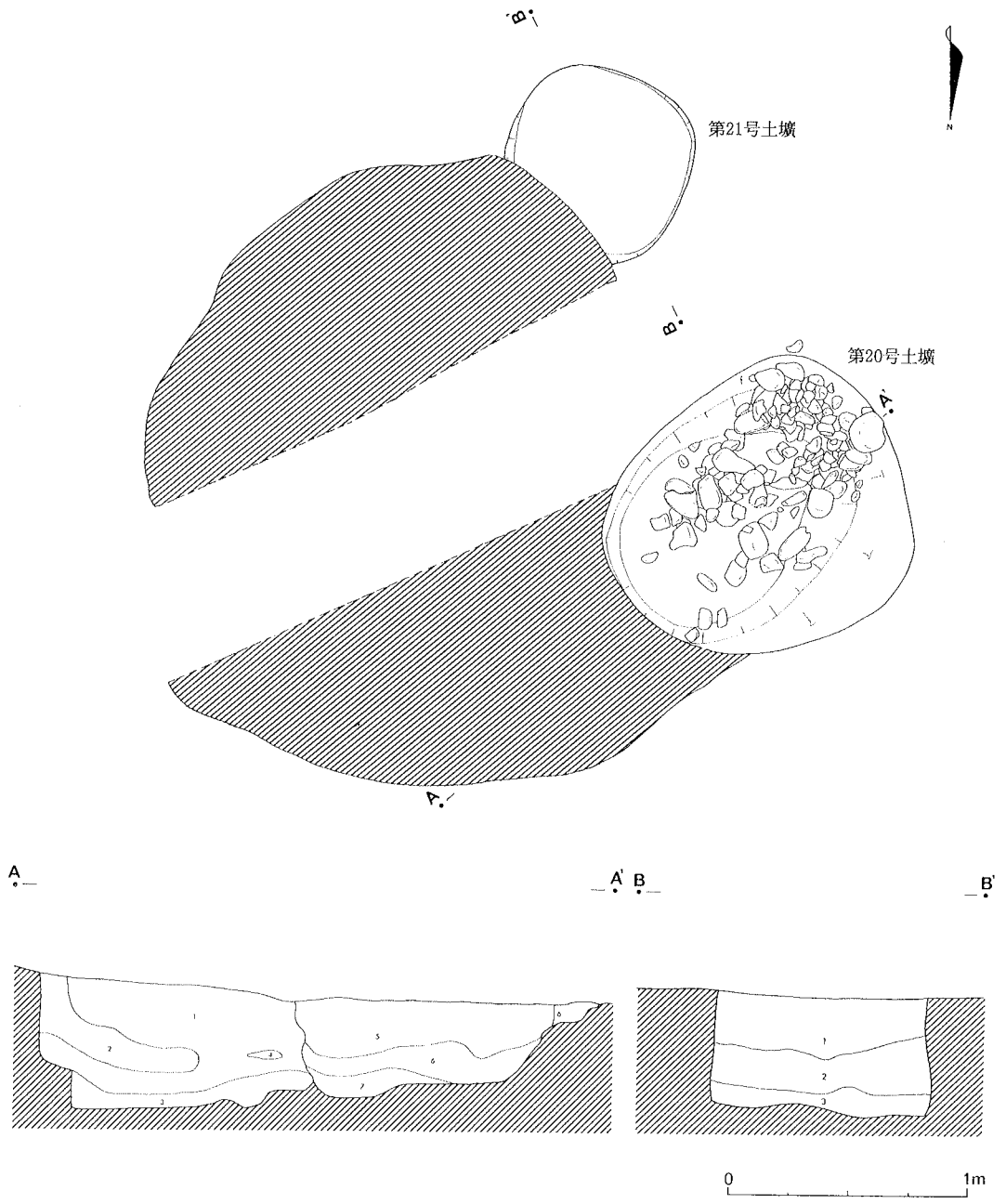
1・2、口縁部。1. 隆線で施文される。3. 頸部。沈線で施文される。地文は燃糸文L。

4・5、打製石斧。4. 現長8.1cm、最大幅3.8cm、最大厚1.3cm、現重58.7g。刃部を欠損する。石質はホルンフェルス。5. 全長9.4cm、刃幅3.2cm、最大厚1.4cm、重さ55.4g。全体的に風化が著しい。石質はホルンフェルス。6. 磨石。現長6.9cm、幅7.7cm、最大厚3.4cm、現重390g。一部欠損する。本来は断面長楕円形を呈する、平滑な長楕円礫であったと推定される。図中正背面に磨痕、上端部と左側縁部に敲打痕が認められる。石質は輝石安山岩。

帰属はV群・VI群と推定される。

(2) 第21号土坑 (第57図)

B-3 グリッド内、第20号土坑の南約65cmに位置する。直径約85cm。平面プランほぼ円形を呈する。



第20号土坑土層説明

- 1. 茶褐色土 黑色粒子を含む
- 2. 明黄褐色土 燒土粒子・黄色粒子を含む
- 3. 黄灰色土 燒土粒子を含む
- 4. 黑色土
- 5. 暗茶褐色土 ローム粒子・炭化粒子を含む
- 6. 黒褐色土 炭化粒子を含む
- 7. 暗黄灰色土 ローム粒子を含む

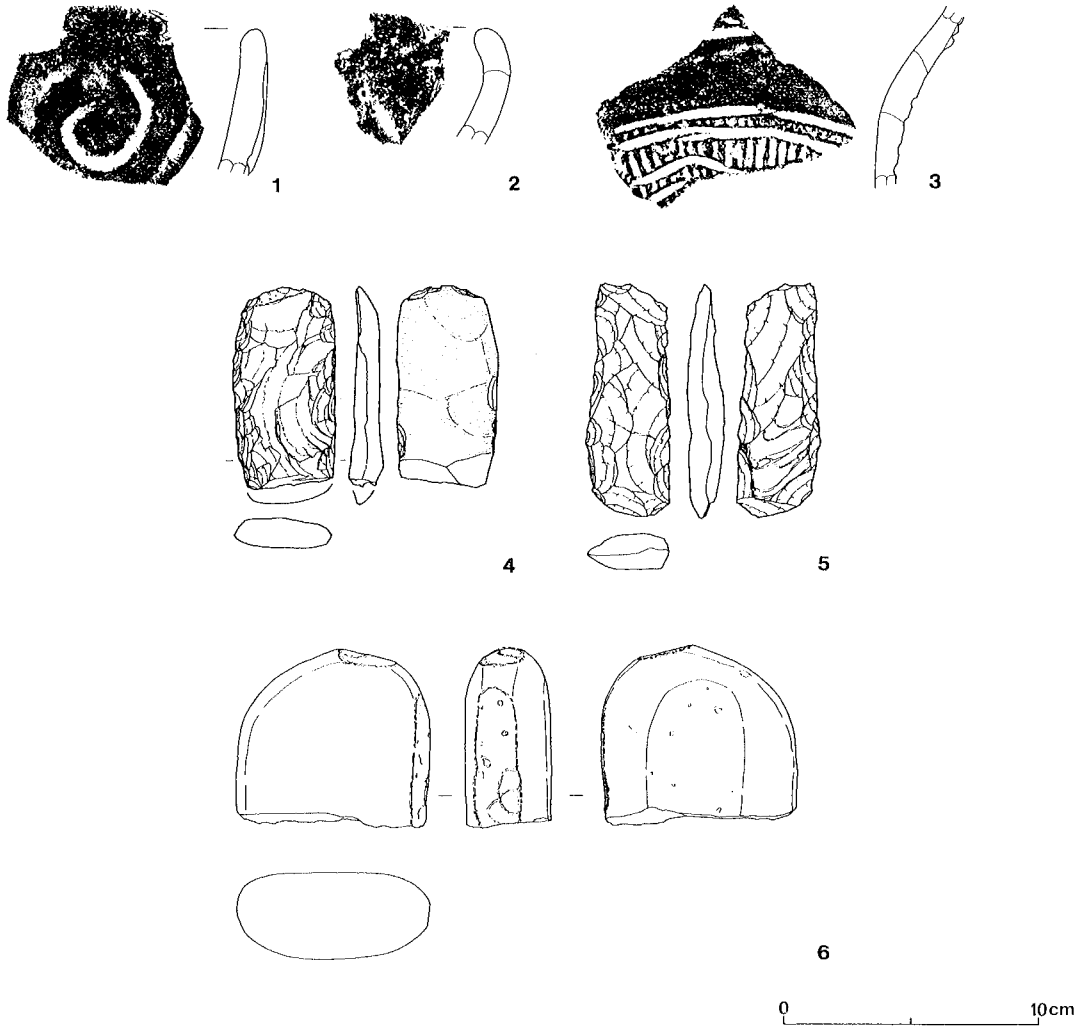
しまり弱 粘性やや強
 しまり弱 粘性やや強
 しまり弱 粘性やや強
 しまり弱 粘性やや強
 しまり弱 粘性やや強
 しまり弱 粘性やや強

第21号土坑土層説明

- 1. 褐色土(1) ローム粒子・白色粒子・炭化粒子を含む
- 2. 褐色土(2) ローム粒子・白色粒子・炭化粒子を多量に含む
- 3. 黄灰色土

しまり弱 粘性やや強
 しまり弱 粘性やや強

第57図 第20号・第21号土坑 (1/30)



第58図 第20号土壙出土遺物（1／3）

壁はほぼ垂直に立ち上がる。北東端部が倒木により損壊している。

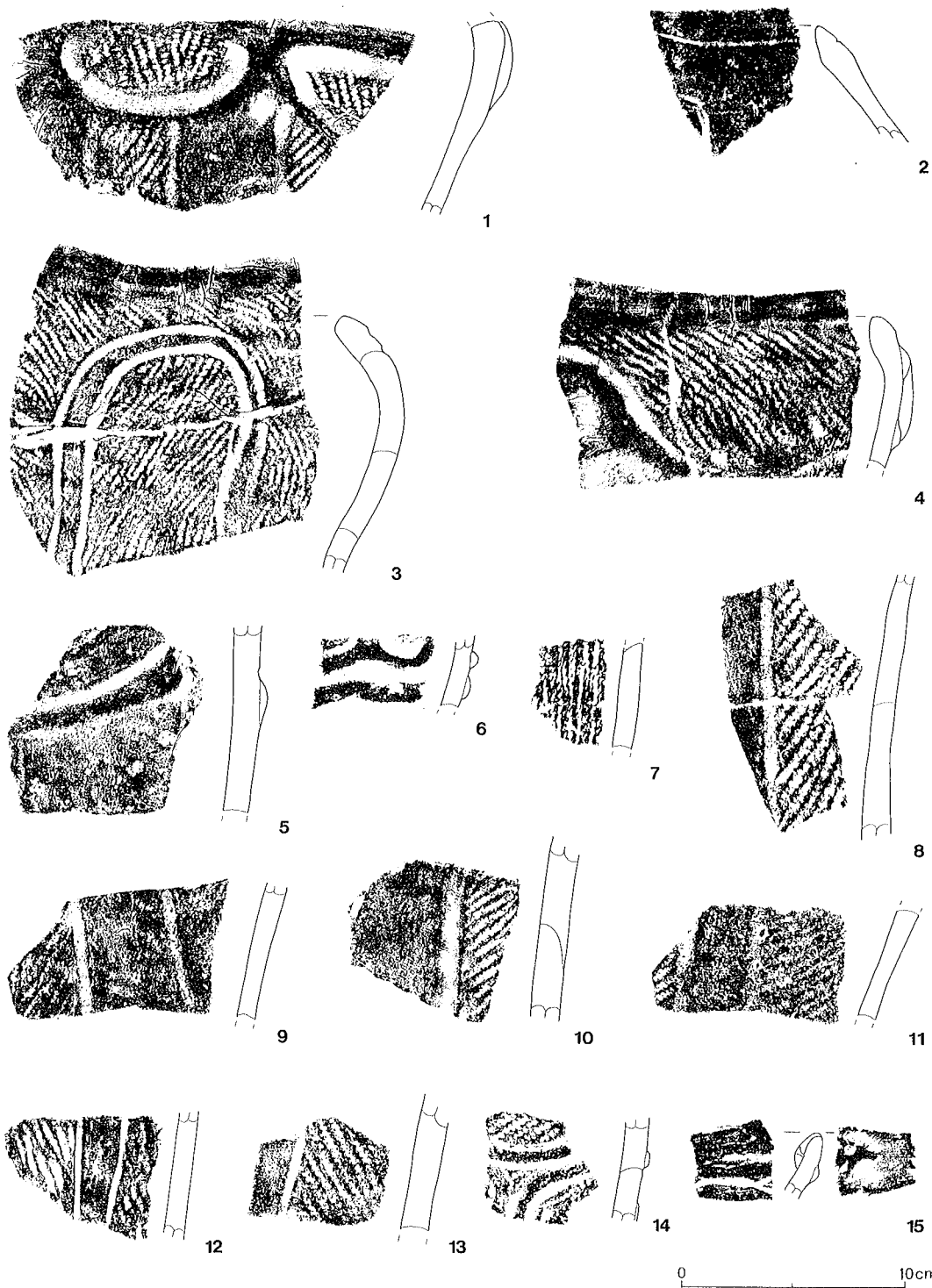
○第21号土壙出土遺物（第59図・第60図）

1～6、口縁部。1. 口唇部を欠損する。沈線で施文される。地文はLR縄文。2. 沈線で施文される。地文はRL縄文。4. 隆線と沈線で施文される。地文はRL縄文。5. 隆線で施文される。地文はLRらしき縄文。6. 隆線と沈線で施文される。7～14、胴部。7. 地文は捺糸文L。8～13、沈線で施文される。磨消しが伴う。地文は7～11がRL縄文、12・13がLR縄文。14. 隆線で施文される。地文はRL縄文。

15. 口縁部。外面に沈線、内面に刺突で施文される。

16・17、胴部。16. 隆線と刺突で施文される。地文は条線。17. 胴部。沈線で施文される。

18. 底部。底径5.4cm。



第59图 第21号土壤出土遺物(1) (1 / 3)



第60図 第21号土壙出土遺物(2) (1/3)

帰属はV群・VI群と推定される。

(2) 第22号土壙 (第61図)

C-3グリッド内、第3トレンチ東端部に位置する。長軸79cm、短軸65cm。平面プラン不整円形を呈する。深さ26cm。壁は外湾しつつ急角度で立ち上がる。内部ほぼ全面に被熱による赤化、焼土が確認されている。また、深鉢が正位で埋設されていた。

○第22号土壙出土遺物 (第61図・第62図)

第61図1. 深鉢である。口唇部及び底部を欠失する。胴部上半に、沈線で施文されている。

2・3、全て胴部。2. 押引文で施文される。3. 地文は条線。

帰属はII群・V群・VI群と推定される。

(23) 第23号土壙 (第63図)

C-3グリッド内、第22号土壙の東約3.3mに位置する。直径約150cm。平面プランほぼ円形を呈する。一部棚状となる。深さ87cm。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

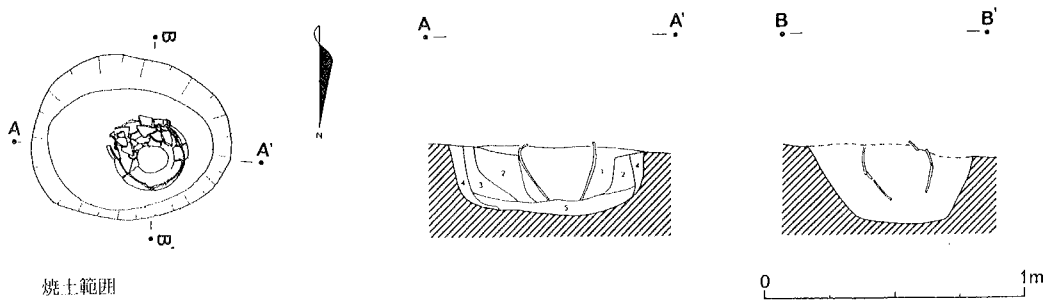
○第23号土壙出土遺物 (第64図・第65図)

1. 口縁部。隆線と沈線で施文される。地文はLRらしき縄文。2~4、胴部。2. 地文は条線。3. 沈線で施文される。地文はLR縄文。4. 沈線で施文される。

5・6. 胴部。5. 沈線で施文される。地文はLR縄文。6. 沈線で施文される。地文はLR縄文。

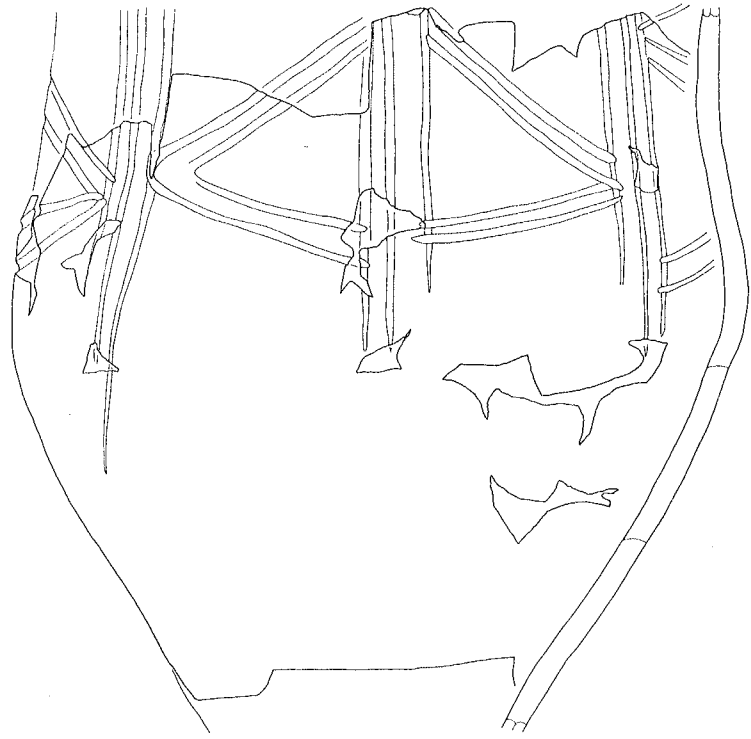
7~14、口縁部。7・8、沈線と刺突で施文される。9. 沈線で施文される。10. 沈線で施文される。11・12、沈線と刺突で施文される。15~19、胴部。沈線で施文される。15は刺突も施文される。20. 底部。推定底径約11cm。

21. 打製石斧。現長7.9cm、刃幅3.8cm、最大厚1.8cm、重さ41.8g。風化が著しい。石質はホルンフェルス。22. 磨製石斧。現長7.3cm、刃幅4.8cm、最大厚2.7cm、重さ150g。両側縁は敲打により調整されるが、頭部は打割面を残す。刃部と側縁部下半に面取り状の磨痕を残す。石質は凝灰岩であろう。

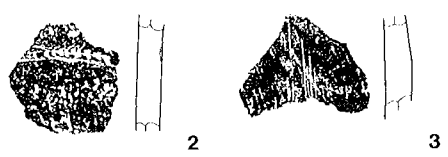


焼土範囲

- | | | | |
|-------------|---------------------|------|-----|
| 1. 暗黄褐色土 | 炭化粒子・白色粒子を微量含む | しまり弱 | 粘性弱 |
| 2. 明黄褐色土(1) | 炭化粒子を少量含む | しまり強 | 粘性弱 |
| 3. 明黄褐色土(2) | 焼土ブロック・炭化ブロックを多量に含む | しまり強 | 粘性弱 |
| 4. 焼土 | | | |
| 5. 炭化物 | 焼土粒子・ロームブロックを多量に含む | | |



1

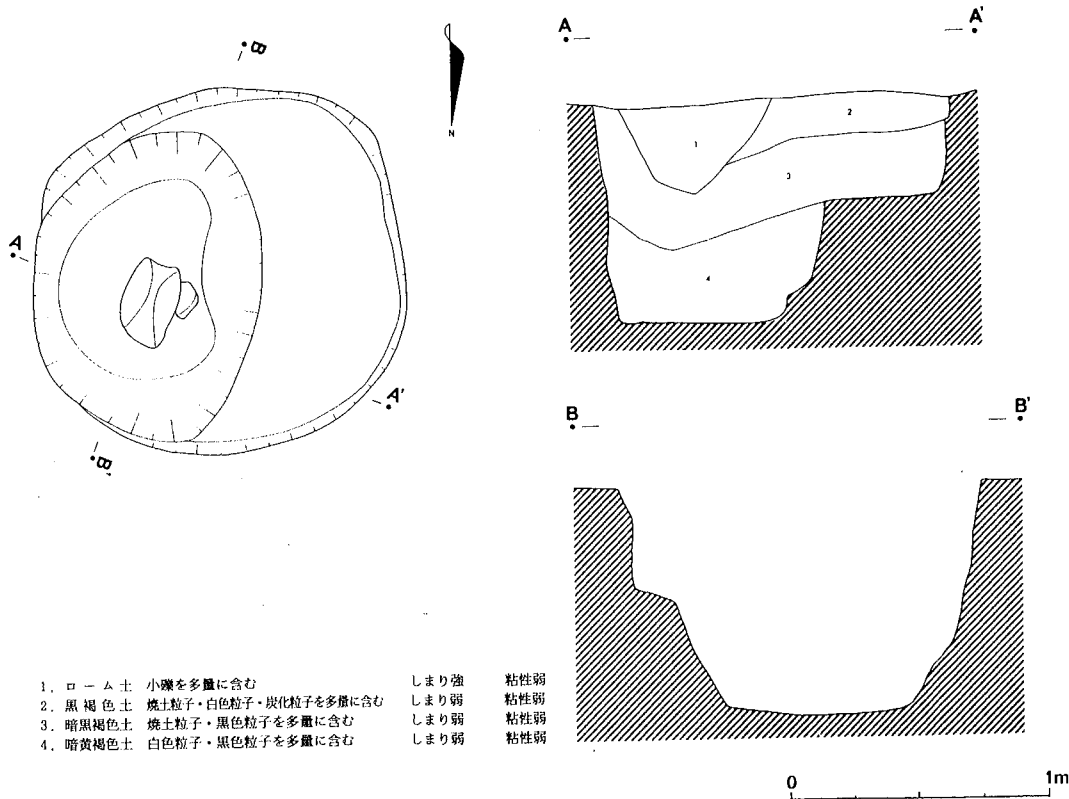


0 10cm

第61図 第22号土壌及び出土遺物 (1/30・1/3)



第62图 第22号土城出土遺物(2) (1/5)



第63図 第23号土壌 (1/30)

帰属はV群・VI群と推定される。

④ 第24号土壌 (第66図)

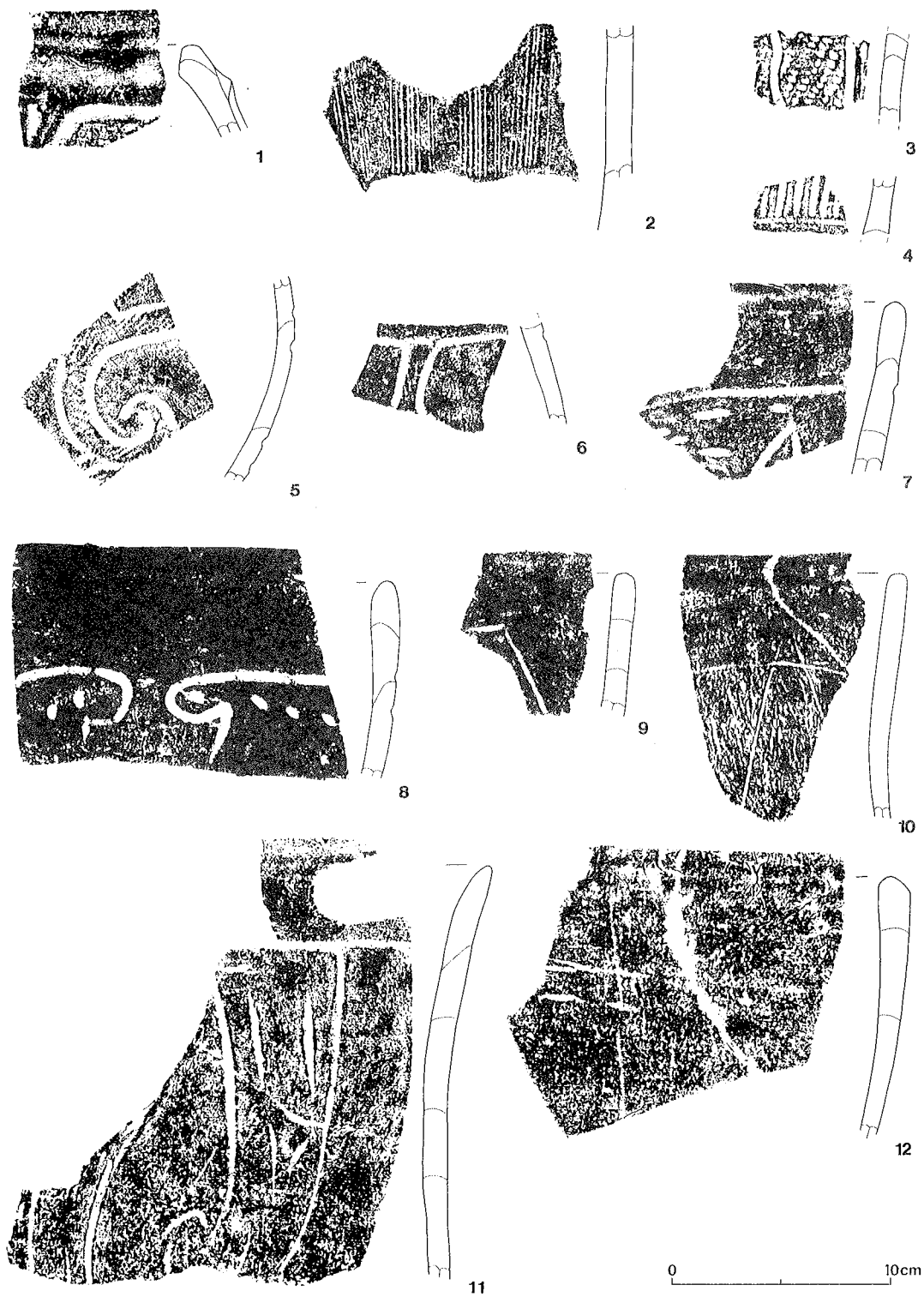
C-4グリッド内、第23号土壌に東接する。長軸150cm、短軸130cm。変面プラン楕円形を呈する。深さ118cm。断面がキンチャク型に類する形態を呈する。

○第24号土壌出土遺物 (第67図～第71図)

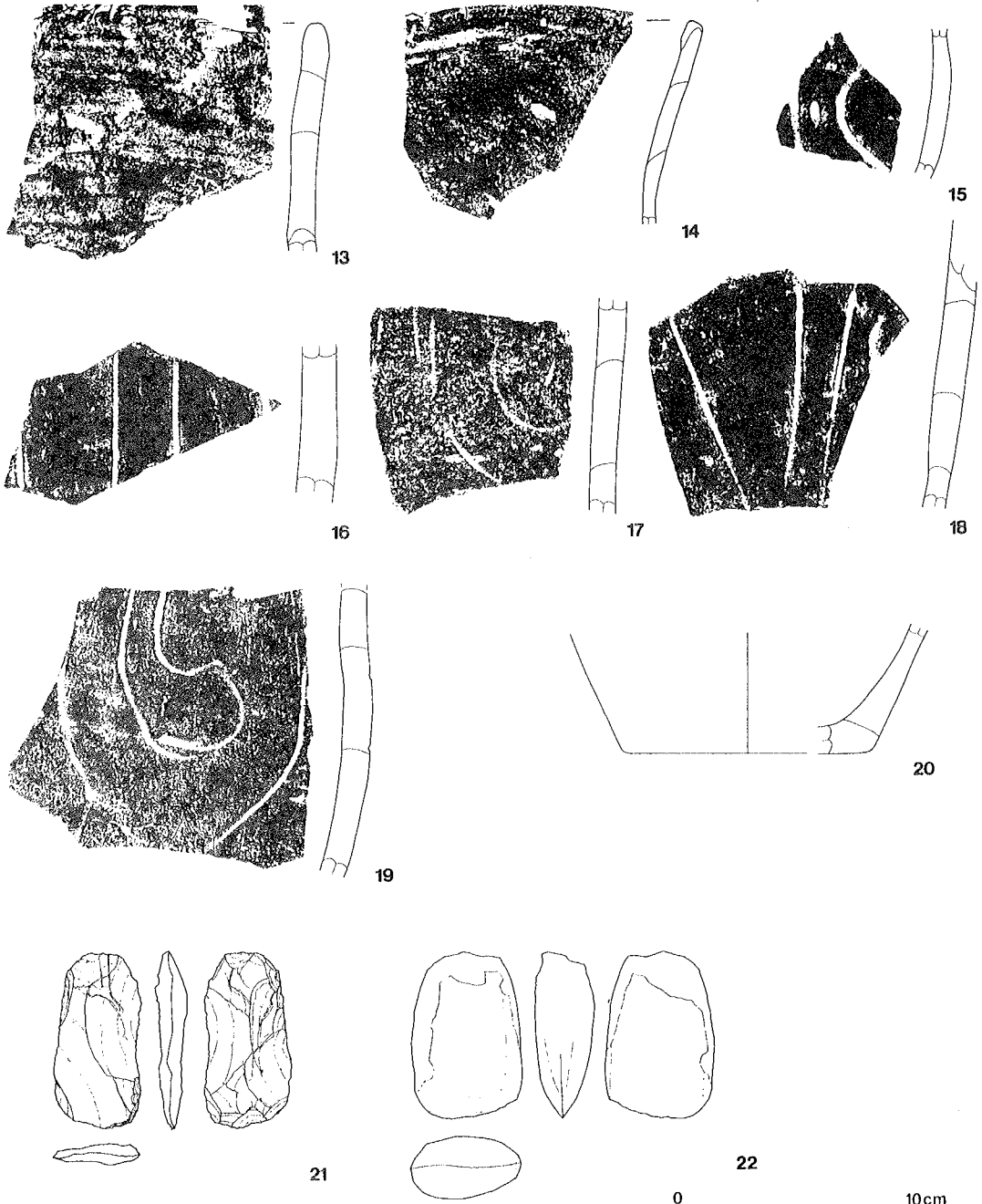
第67図1. 胴部。沈線で施文される。地文はRL縄文。

2～6、口縁部。2・3、隆線と沈線で施文される。2の地文はRL縄文。4～6、沈線で施文される。地文は4・5がRL縄文、6がLR縄文。7～23、胴部。7. 隆線と沈線で施文される。地文はRL縄文。8・9. 沈線で施文される。8の地文はRL縄文、9の地文はRLとLRの結節縄文と推定される。10～13、沈線で施文される。磨消しを伴う。地文は全てRL縄文。14～19、地文は条線。20. 沈線で連弧文が描出される。地文は撚糸文L。21. 地文は撚糸文L。22. 地文は条線。一部削りらしき痕跡が認められる。23. 地文は、LRR縄文と推定される。

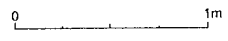
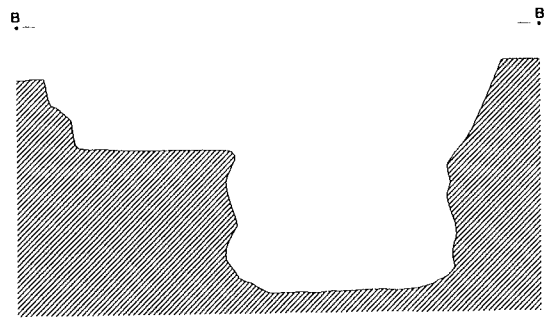
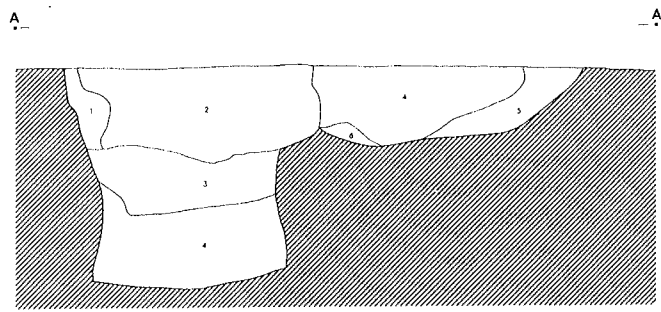
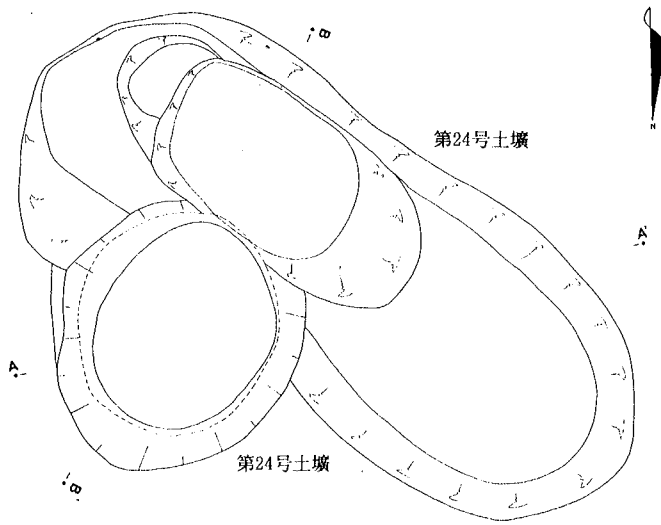
24～38、口縁部。24～27、沈線で施文される。28. 沈線と刺突で施文される。29～33、沈線と刺突で施文される。34. 沈線で施文される。地文は条線。35. 地文は条線。36. 沈線で施文される。



第64图 第23号土坑出土遗物(1) (1/3)

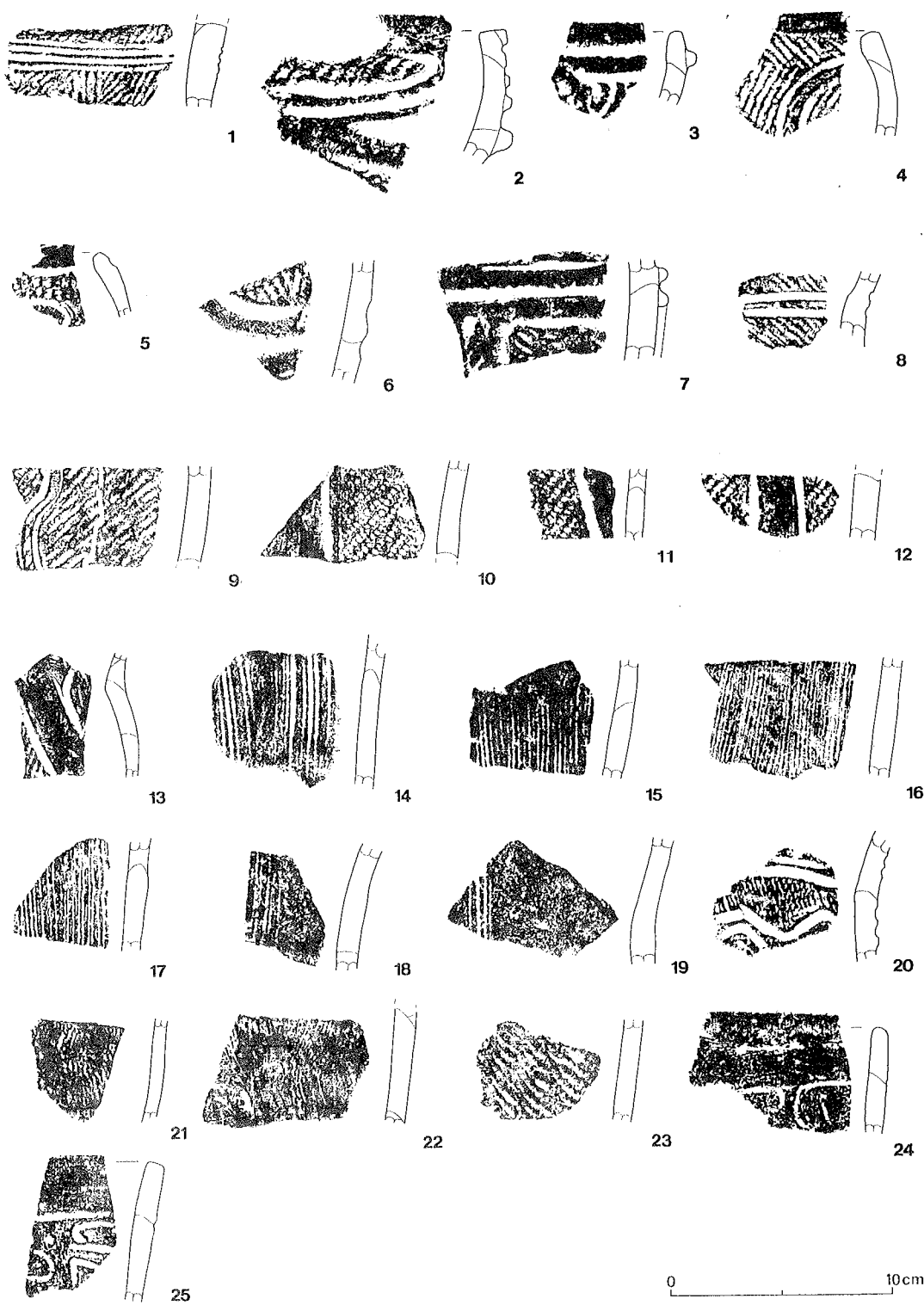


第65图 第23号土坑出土遺物(2) (1/3)

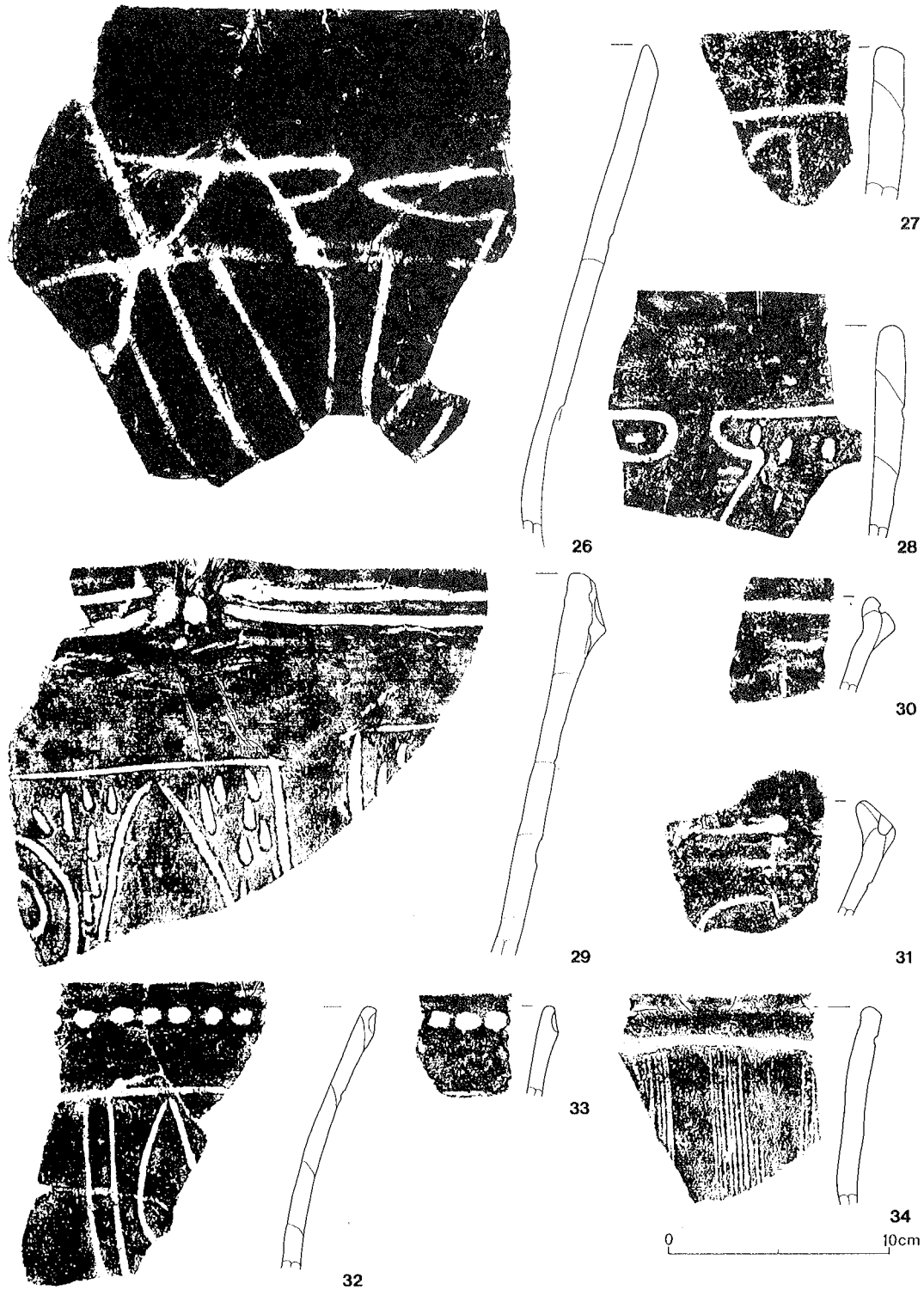


- | | | | |
|----------|------------------------|------|-------|
| 1. 黄褐色土 | 黒色粒子を微量含む | しまり強 | 粘性弱 |
| 2. 黒褐色土 | 焼土ブロック・白色粒子・炭化粒子を多量に含む | しまり弱 | 粘性弱 |
| 3. 暗黒褐色土 | 焼土粒子・黒色粒子を含む | しまり強 | 粘性弱 |
| 4. 暗黄褐色土 | 白色粒子・黒色粒子を多量に含む | しまり強 | 粘性弱 |
| 5. 明黄灰色土 | 黒色ブロックを含む | しまり弱 | 粘性やや強 |
| 6. 暗黄灰色土 | 焼土粒子・炭化粒子を少量含む | しまり弱 | 粘性強 |

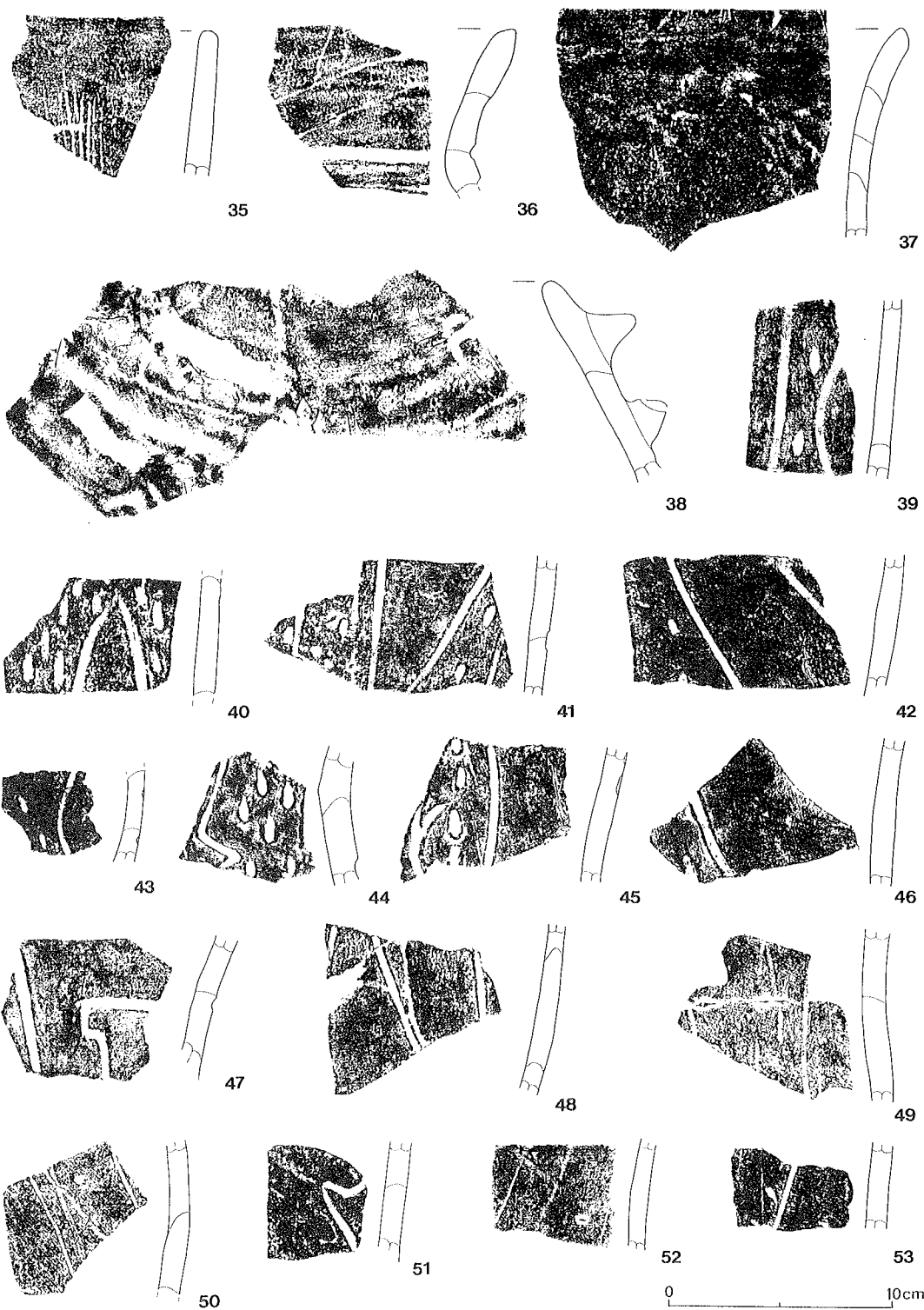
第66図 第24号・第25号土壤 (1/40)



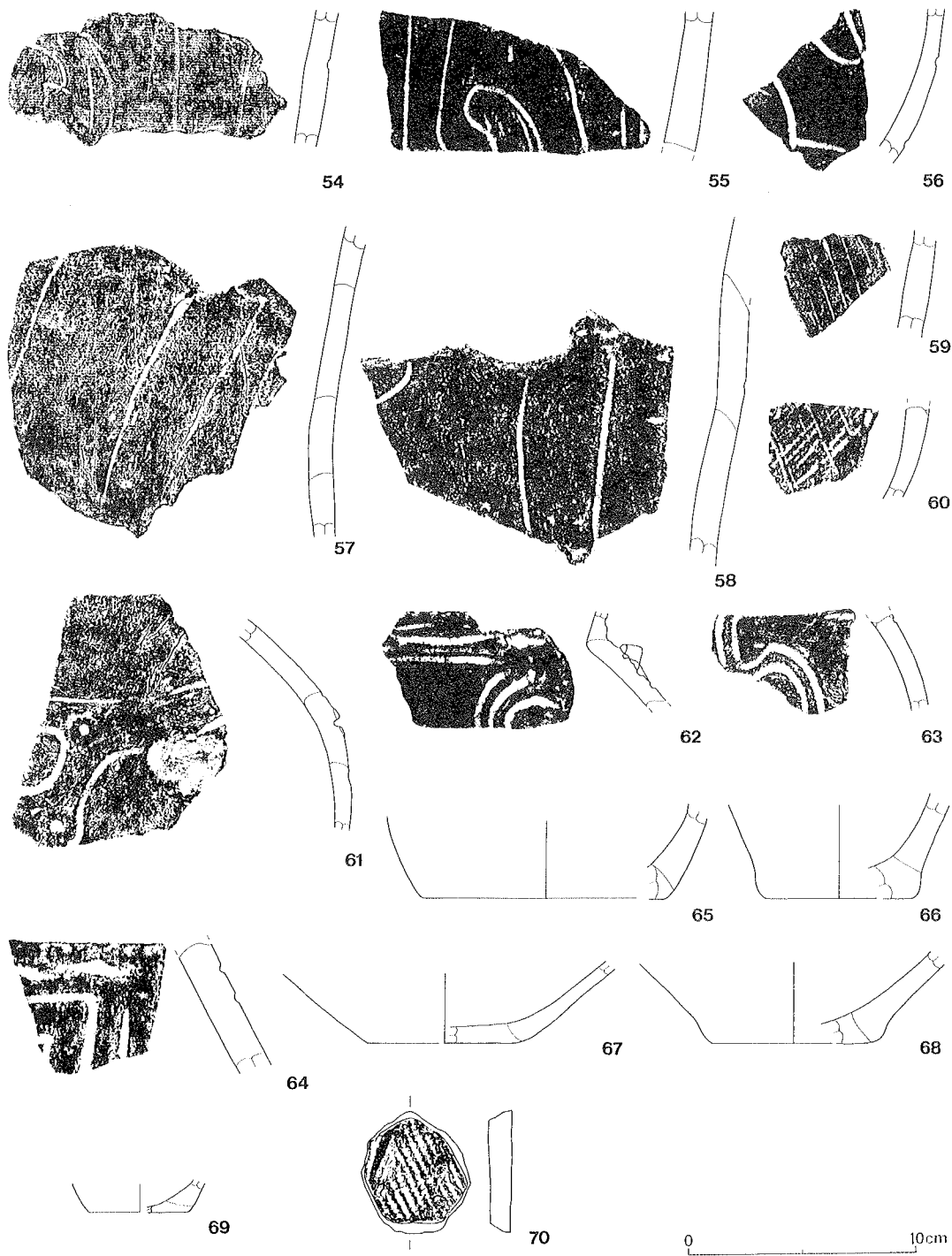
第67图 第24号土壙出土遺物(1) (1/3)



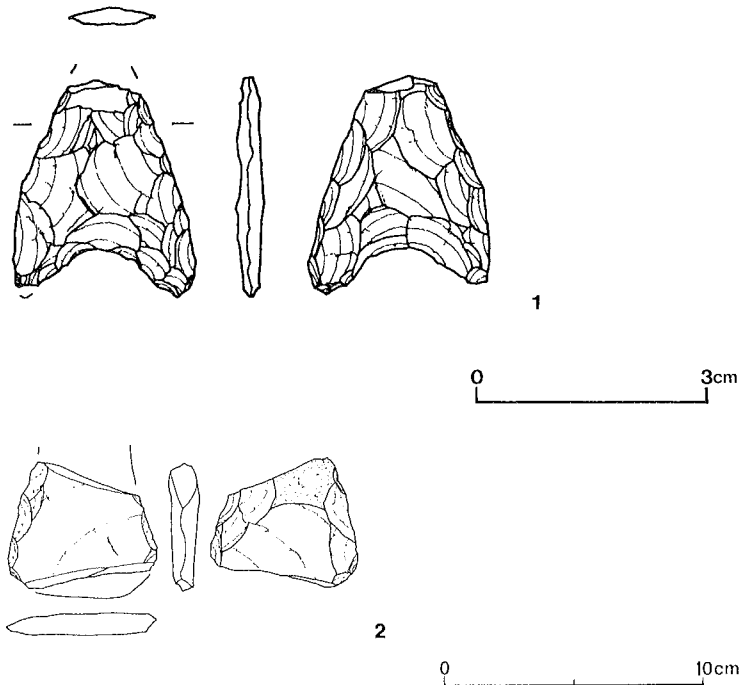
第68图 第24号土坑出土遗物(2) (1/3)



第69图 第24号土壤出土遗物(3) (1/3)



第70图 第24号土坑出土文物(4) (1/3)



第71図 第24号土壙出土遺物(5) (原寸・1/3)

38. 隆線と沈線で施文される。39～64、胴部。39～47、沈線と刺突で施文される。48～60、沈線で施文される。61. 刺突を伴う貼付文と沈線で施文される。64. 沈線で施文される。65～69、底部。65. 推定底径約11cm。66. 推定底径約6.5cm。67. 推定底径約7cm。68. 推定底径約7cm。69. 推定底径約4.5cm。70. 土製円盤。長径5.5cm、短径約4.8cm、厚さ1.1cm、現重31.1g。隆線を残す。地文はRL縄文。

第71図1. 石鏃。現長2.9cm、最大幅2.4cm、最大厚4.0cm、現重2.5g。先端部を欠損する。形態は凹基無茎。石質はホルンフェルス。2. 打製石斧。現長5.1cm、刃幅5.8cm、最大厚1.1cm現重41.1g。上半部と下半部を欠損する。原礫面の一部を残す。石質はホルンフェルス。

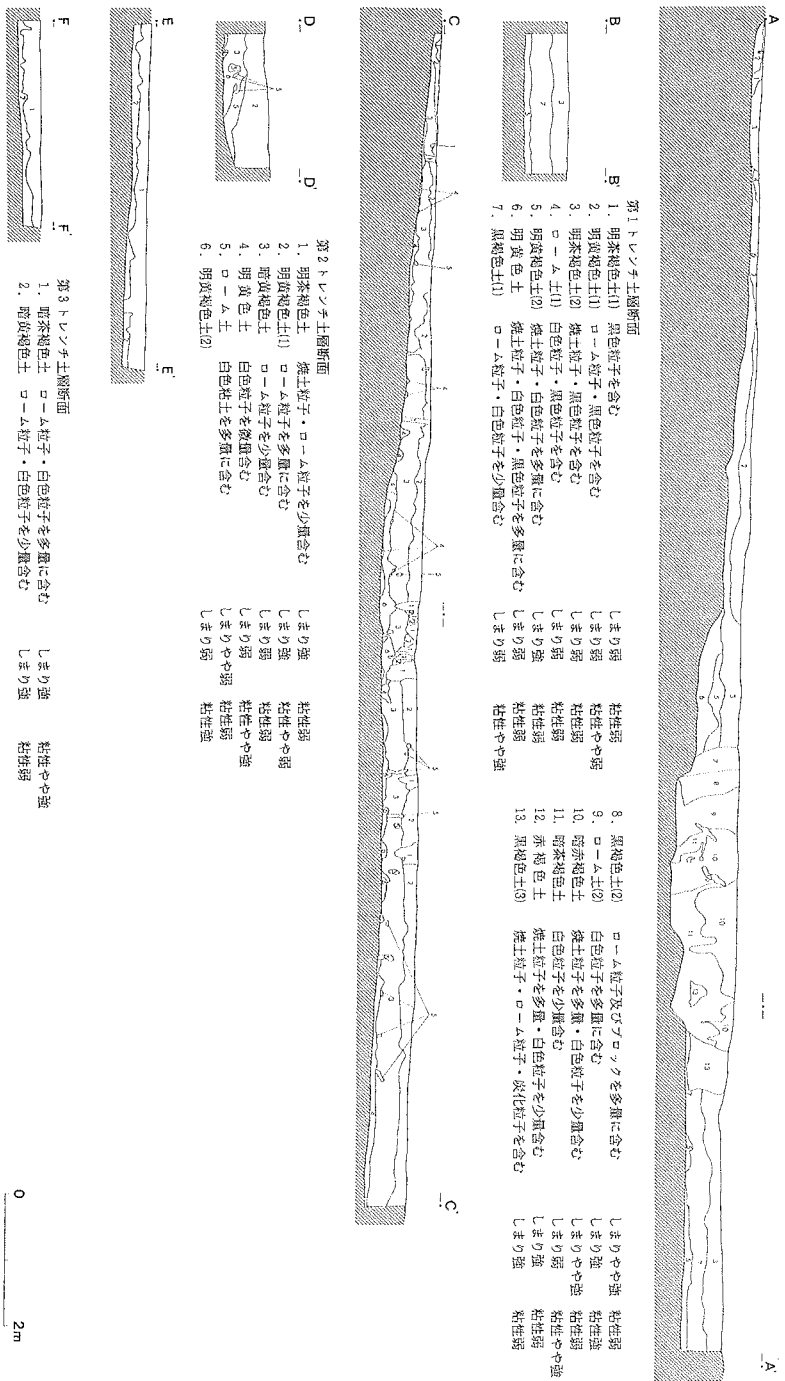
帰属はIV群～VI群と推定される。

(25) 第25号土壙 (第66図)

C-4グリッド内、第24号土壙に接する。長軸376cm、短軸150cm。平面プラン長楕円形を呈する。深さ43cm。底部は東部がやや落ち込み、壁は緩やかに外湾しつつ立ち上がる。出土遺物はない。

iv. トレンチ及びトレンチ内出土遺物 (第7図・第72図～第93図)

IV章で記述した様に、トレンチ調査によって、旧河川流路が確認され、覆土中より多量の遺物が出土した。本項では、各トレンチの概要と出土遺物を一括して記述する。なお、出土遺物の記述は基本的に前項に準じる。



第72図 第1～第3トレンチ土層断面図 (1/40)

(1) 第1トレンチ (第7図・第72図)

D-2、E-2、E-3、F-3の各グリッドの範囲内に、N-39°-Wを主軸として設定した。幅約2m、全長約23m。確認された地山は、起点より極めて緩やかに傾斜し、約10.5mの地点で段状にやや落ち込む。13mの地点より幅約5mの流路跡が確認された。土層的には明確な差異が認められるが、人為性を認め得る確証が無い。トレンチ両端部の比高差は約1.3mを測る。

(2) 第2トレンチ (第7図・第72図)

D-2、D-3、E-3の各グリッドの範囲内に、N-60°-Wを主軸として設定した。幅約2m、全長約20m。地山面は、起点より約7.2mの地点で幅約3mの極めて浅い落ち込みが確認されたが全般的に極めて緩やかに傾斜している。トレンチ両端部の比高差は約1.2mである。

(3) 第3トレンチ (第7図・第72図)

C-2・C-3グリッドの範囲内で、N-88°-Wを主軸として設定された。幅約2m、全長6~7m。起点より約3.6mに極めて僅かな段差が有るものの、全般にはほぼ平坦。トレンチ両端部の比高差は殆ど無い。

(4) 第4トレンチ (第7図)

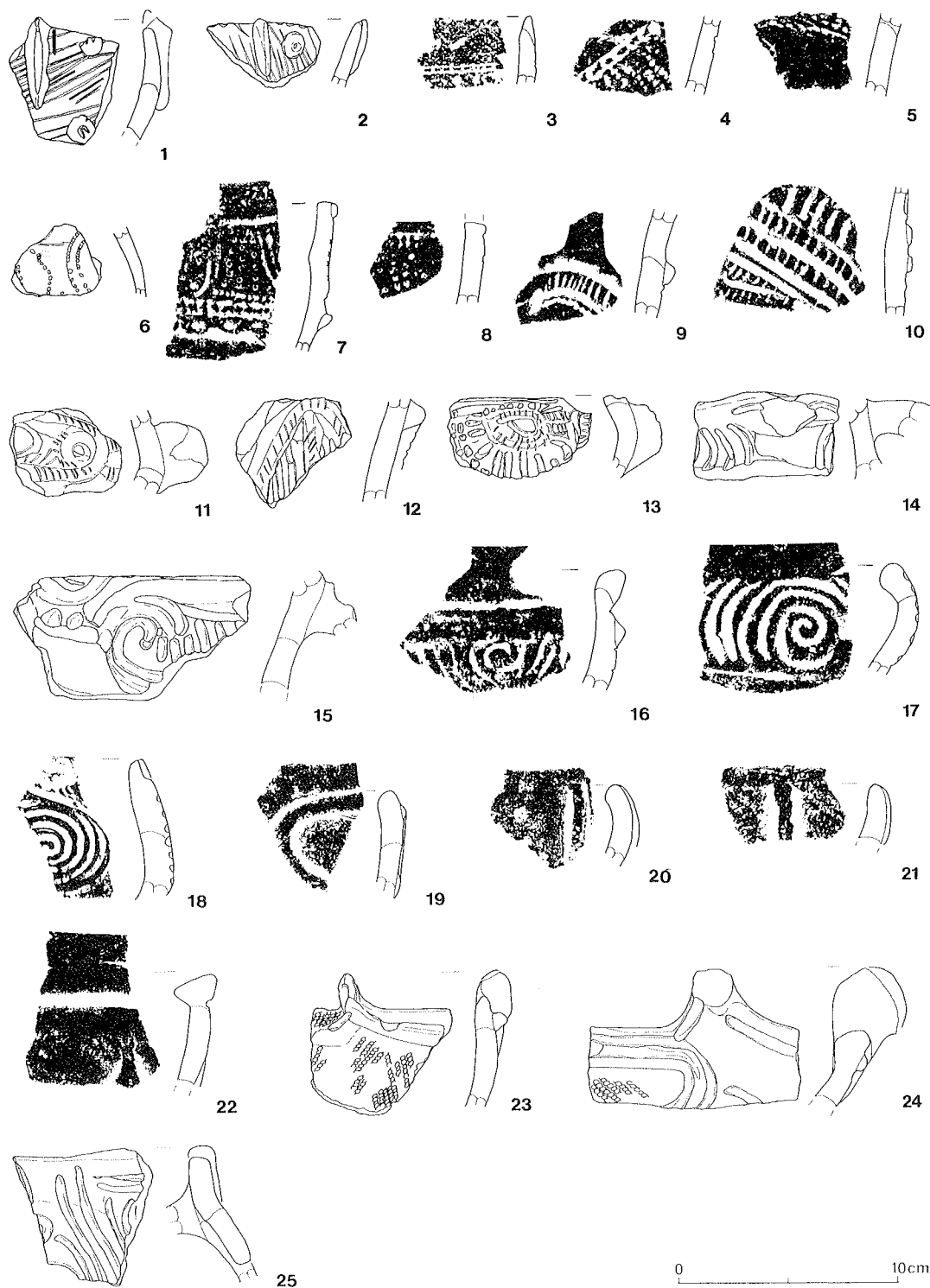
D-2グリッド内、第1・第2トレンチの合流部、遺物出土量の極めて多い範囲の追調査を目的として設定した。

○第1トレンチ出土土器 (第73図~第81図)

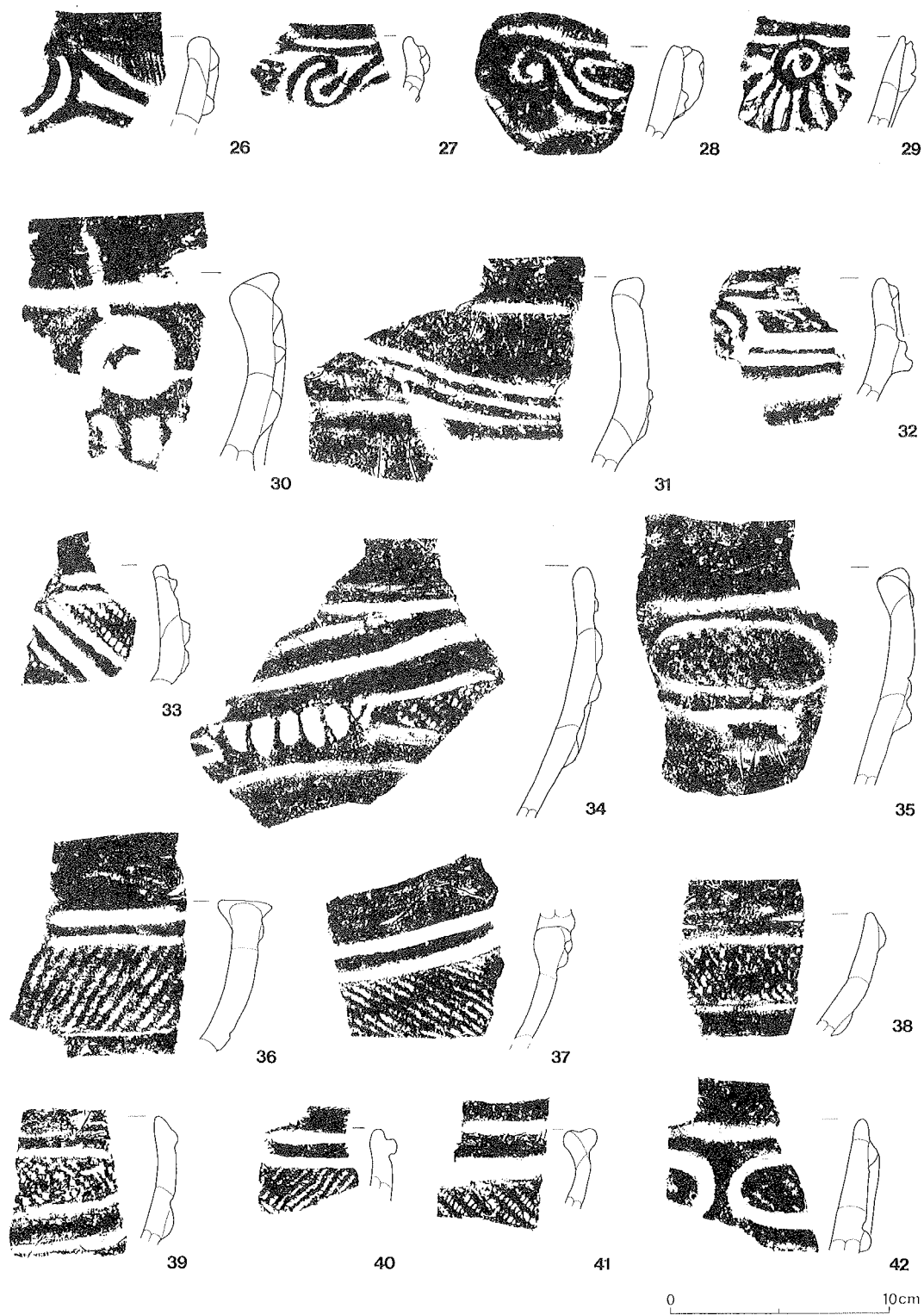
1~3、口縁部。1・2、貼付文で施文される。2は口唇部に刻文が施文される。地文は沈線文。3、竹管文で施文される。4~6、胴部。4・5、竹管文で施文される。4の地文はRL縄文。6、刺突で施文される。一部に赤色塗彩の痕跡を残す。

7・8、口縁部。隆線、竹管文、刺突で施文される。9~12、胴部。9、隆線、角押文、刺突で施文される。10~12、隆線、沈線、刺突で施文される。

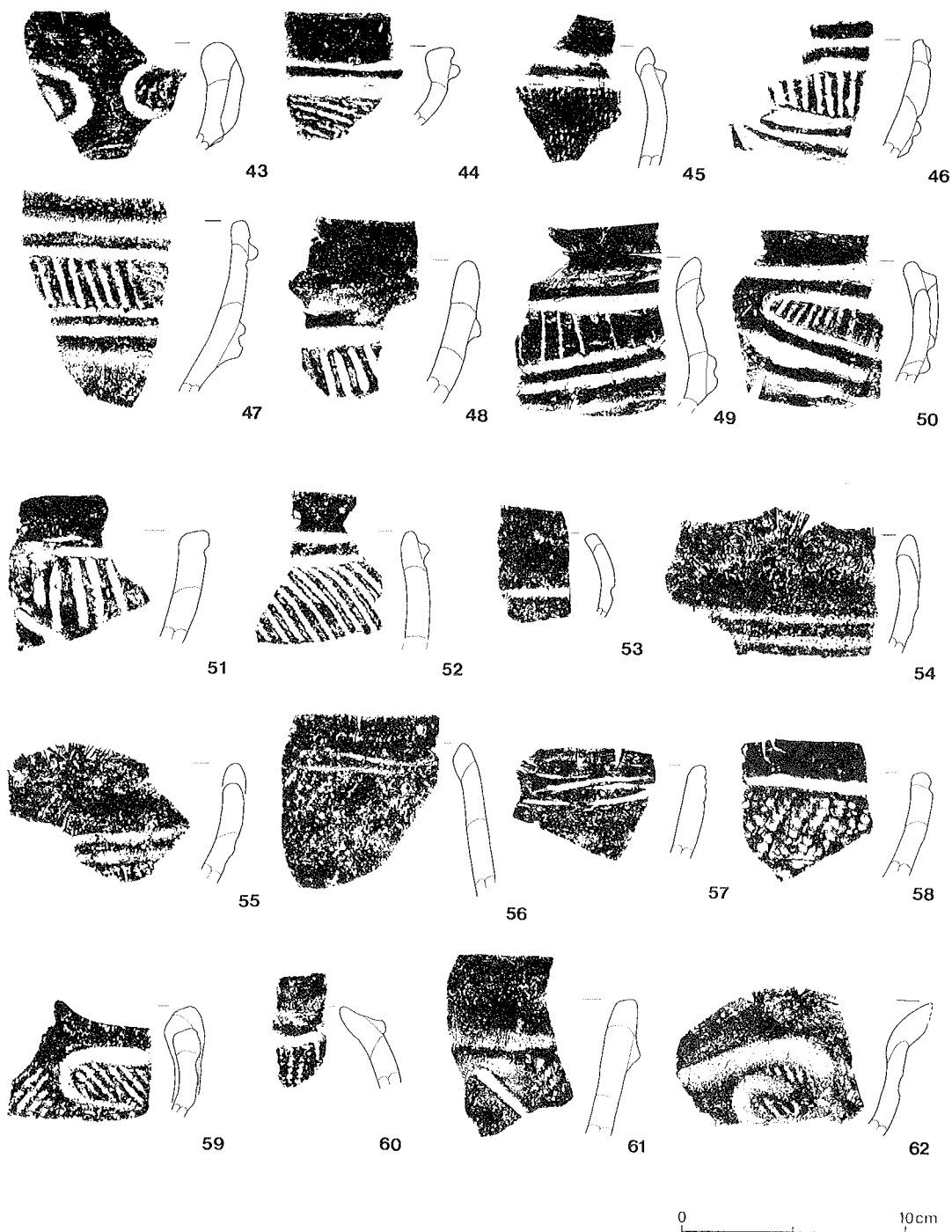
13~71、口縁部。13、貼付文、沈線、刺突で施文される。14・15、口唇部欠損。把手基部。沈線で施文される。16~18、隆線と沈線で施文される。19~21、隆線で施文される。21の地文はRL縄文。22・23、隆線と沈線で施文される。23の地文はRL縄文。24・25、把手部。24は一部、25は全部を欠損する。沈線で施文される。24の地文はRL縄文。26・27、隆線と沈線で施文される。26の地文は撚糸文L。28・29、貼付文、隆線、沈線で施文される。30~50、隆線と沈線で施文される。31~34、地文はRL縄文。31、32、34は無文帯を有する。35、隆線で施文される。波状口縁を呈する。地文はLR縄文。36~41、地文はRL縄文。37、波状口縁を呈する。42、地文はLR縄文。合撚の可能性有り。43、地文はRL縄文。44・45、地文は撚糸文L。46~51、沈線で施文される。52、隆線と沈線で施文される。53~58、沈線で施文される。53、地文はLRらしき縄文。54・55、波状口縁を呈する。55の地文は条線か。56、地文はRL縄文。57、沈線で施文される。



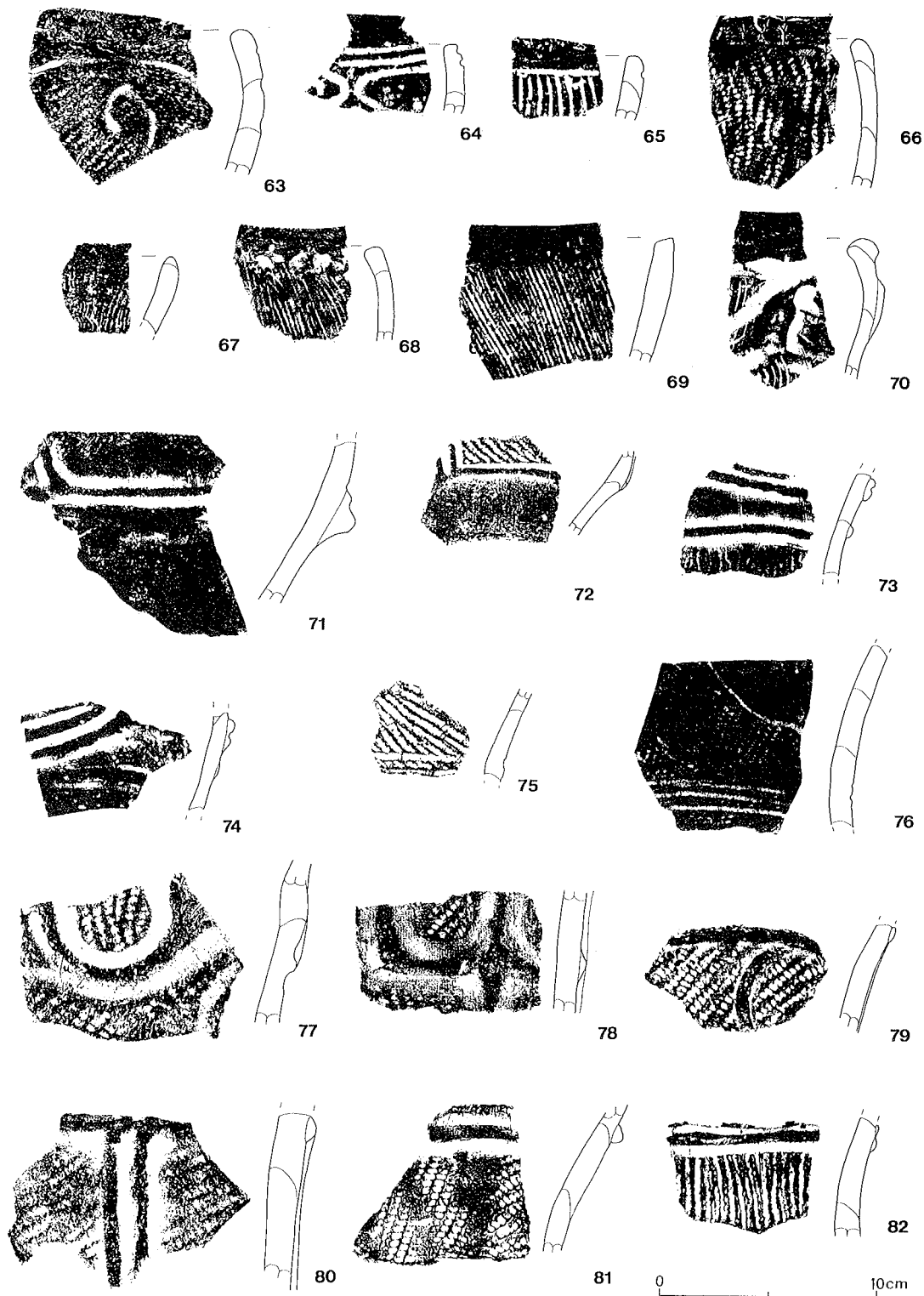
第73図 第1トレンチ出土土器(I) (1/3)



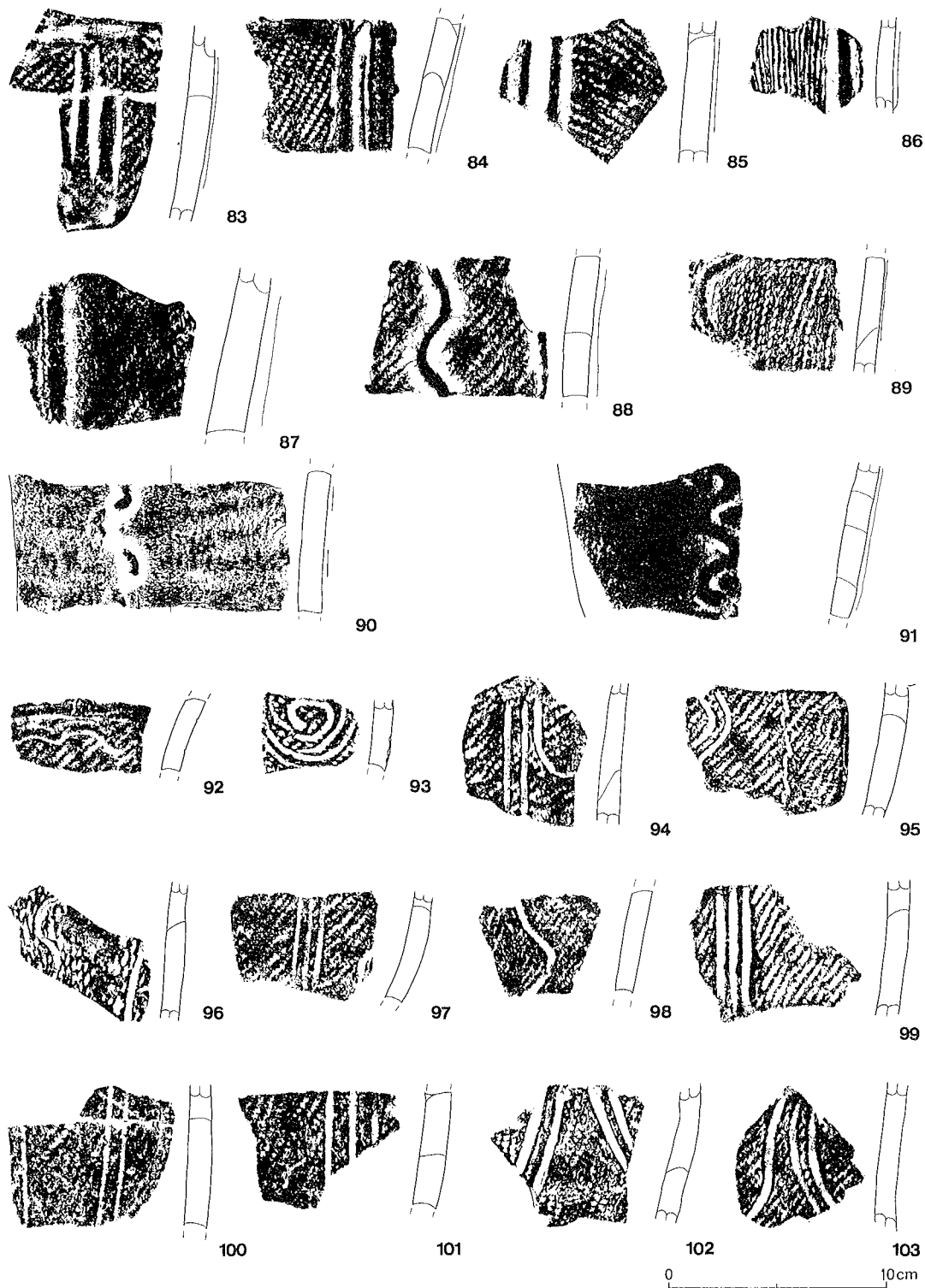
第74図 第1トレンチ出土土器(2) (1/3)



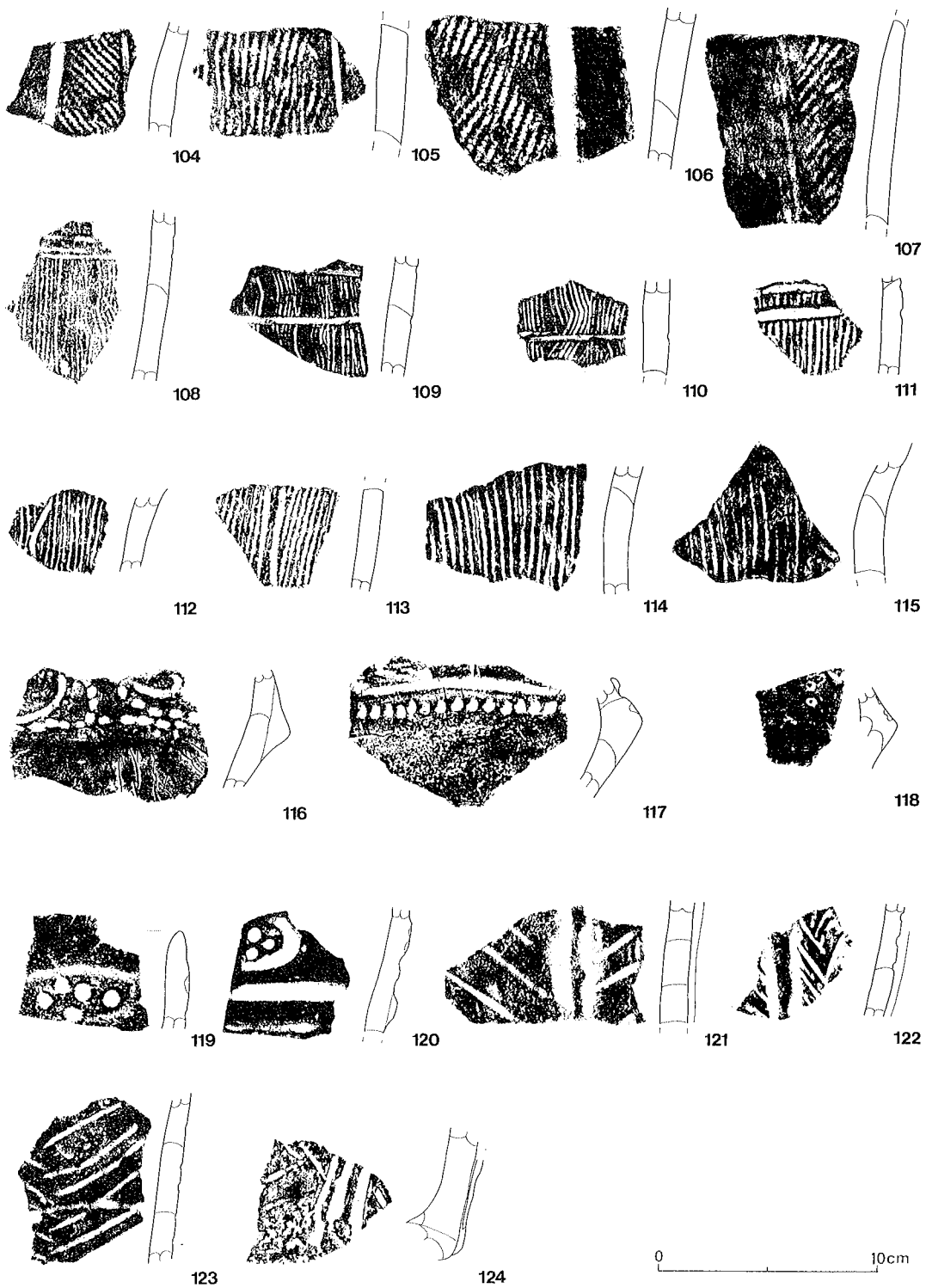
第75図 第1トレンチ出土土器(3) (1/3)



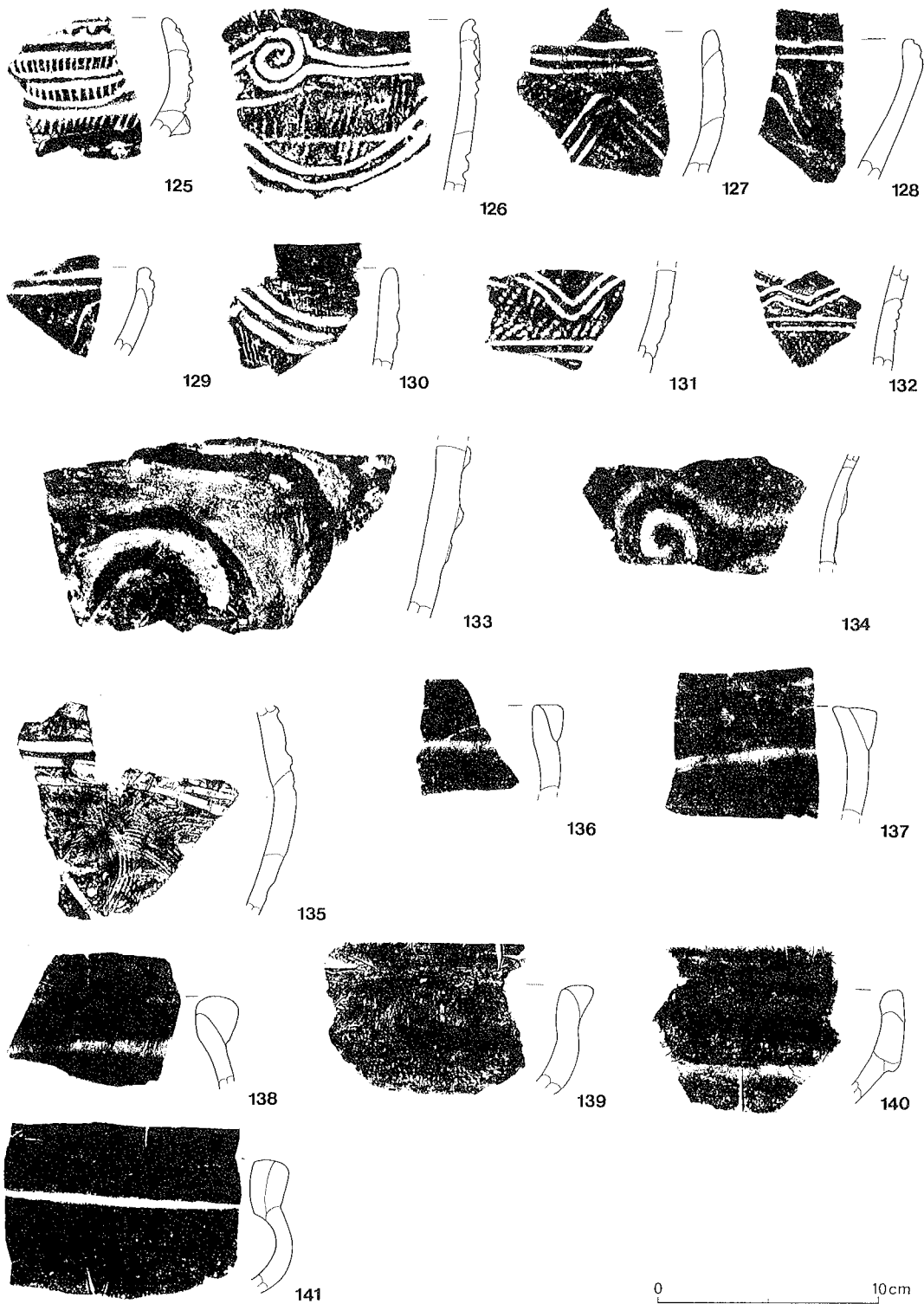
第76図 第1トレンチ出土土器(4) (1/3)



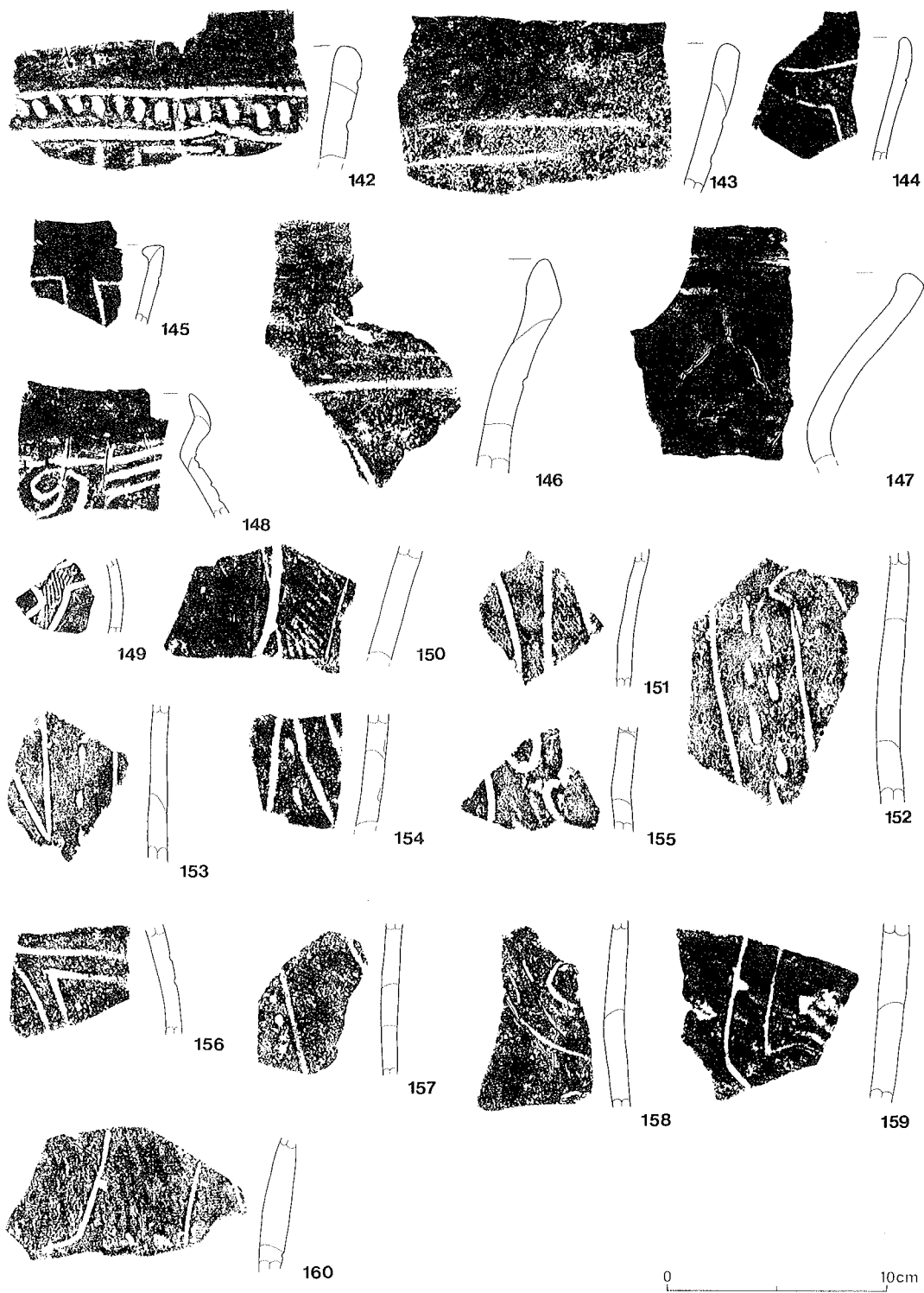
第77図 第1トレンチ出土土器(5) (1/3)



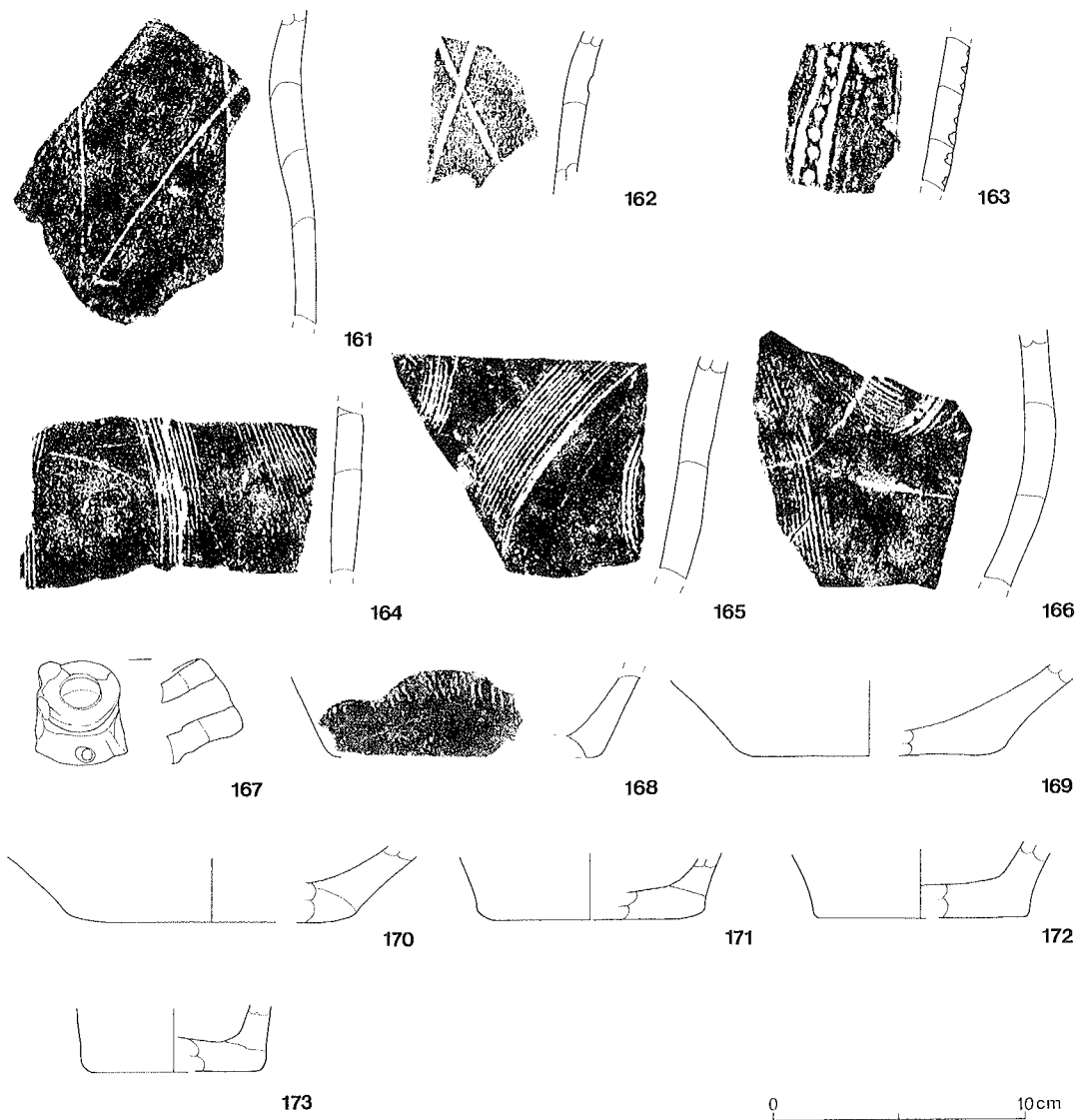
第78図 第1トレンチ出土土器(6) (1/3)



第79図 第1トレンチ出土土器(7) (1/3)



第80図 第1トレンチ出土土器(8) (1/3)



第81図 第1トレンチ出土土器(9) (1/3)

58. 地文はRL縄文。59. 波状口縁を呈する。60. 地文はRL縄文。61. 沈線で施文される。地文はLR縄文。62. 波状口縁を呈する。沈線で施文される。地文はLR縄文。63. 沈線で蕨手文が施文される。地文はRL縄文。64. 沈線で施文される。地文はRL縄文。65. 沈線で施文される。66. 地文はRL縄文。67~69、地文は条線。70. 隆線と沈線で施文される。地文は条線。71~115、頸部~胴部。71・72、無文帯を有する。地文はRL縄文。73・74、隆線で施文される。73. 地文は撚糸文L。74. 地文はRLらしき縄文。75・76、沈線で施文される。地文はRL縄文。77・78、隆線と沈線で施文される。地文はRL縄文。79~82、隆線で施文される。地文は79~81がRL縄文、82が撚糸文L。83・84、隆線と沈線で施文される。地文はRL縄文。86~91、隆線で施文される。地文は86・89が撚糸文L、87がLR縄文、88がRL縄文。92~115、胴部。92~103、沈線で施文さ

れる。地文は全てRL縄文。104～107、沈線で施文される。磨消しが伴う地文は全てRL縄文。108～110、沈線で施文される。地文は条線。111～113、沈線で施文される。地文は111・112・114・115が撚糸文L、113が撚糸文R。

116～118、浅鉢の屈曲部と推定される。116・117、沈線と刺突で施文される。118、刺突で施文される。

119・120、口縁部。119、沈線で施文される。120、隆線と沈線で施文される。121～124、胴部。123以外は隆線と沈線で施文される。地文は全て矢羽状沈線文。

125～132、口縁部。125、隆線、沈線、刺突で施文される。126～132、連弧文等が施文される。126、波状口縁を呈する。地文は撚糸文L。127～129、131・132がRL縄文、130、条線。

131・132は口唇部を欠損する。

133・134、胴部。隆線で施文される。

135、沈線で施文される。地文は条線。

136～141、浅鉢の口縁部であろう。

142～148、口縁部。142、沈線と刺突で施文される。143～146、沈線で施文される。145、口唇部内面に突帯が巡る。148、沈線で施文される。149～166、胴部。149～151、沈線で施文される。地文は全てRL縄文。152～154、沈線と刺突で施文される。155～162、沈線で施文される。163、沈線と刺突で施文される。164～166、条線が施文される。167、注口土器の注口部。168～173、底部。168、推定底径約10.5cm。地文は条線。169、推定口径約10cm。170、推定底径約11cm。171、推定底径約9cm。172、推定底径約8.5cm。173、推定底径約7cm。

帰属は概ねⅡ群～Ⅵ群と推定される。

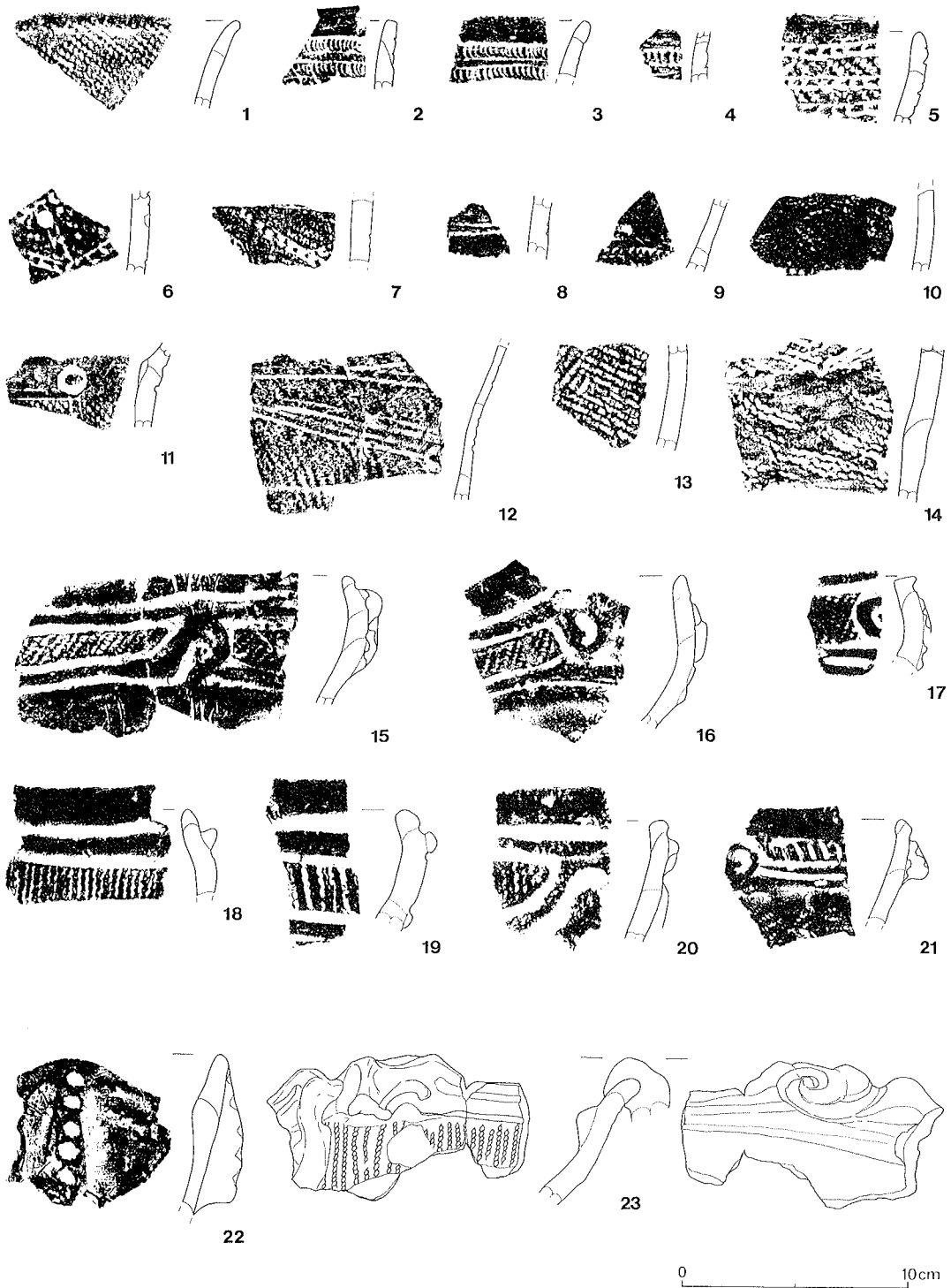
○第2トレンチ出土土器（第82図～第84図）

1、口縁部。地文はRL縄文。

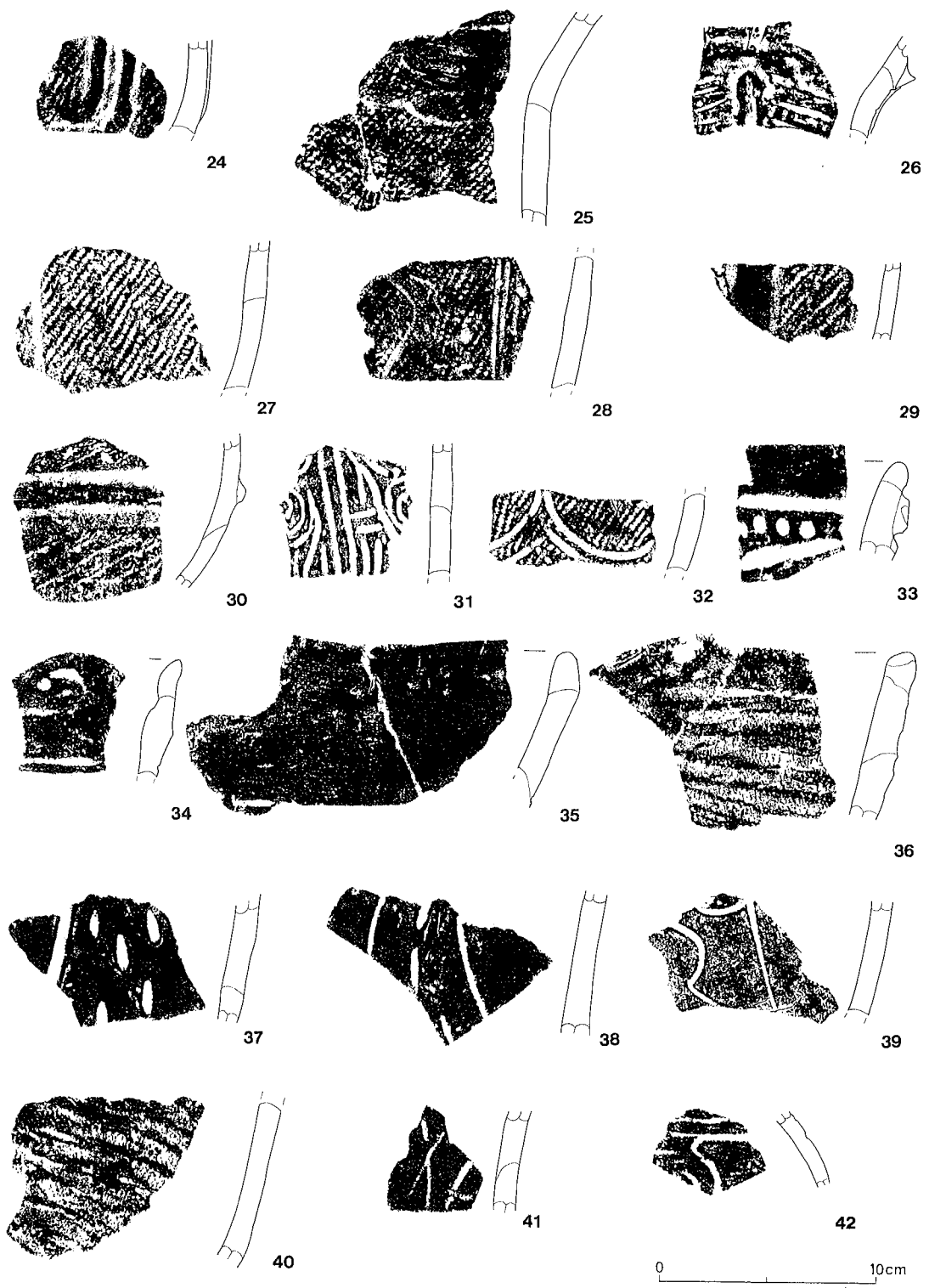
2～5、口縁部。全て竹管文が描出される。5、地文はRL縄文。6～12、胴部。6、竹管文と刺突で施文される。地文はRL縄文。7、竹管文が描出される。地文はRL縄文。9、竹管文と沈線で施文される。10、竹管文と爪形文で施文される。地文はRL縄文。11・12、沈線と刺突で施文される。地文はRL縄文。13、地文はRLの羽状縄文。14、地文は撚糸文L。

15～23、口縁部。15～21、隆線と沈線で施文される。地文は15～17がRL縄文、18・20が撚糸文L、19が撚糸文R。21、沈線で施文される。地文はRL縄文。22、波状口縁を呈する。隆線で施文される。23、把手基部。隆線と沈線で施文される。地文は撚糸文L。24～34、胴部。24、隆線で施文される。地文はLR縄文。25、無文帯を有する。地文はRL縄文。26、隆線と沈線で施文される。27・28、沈線で施文される。地文はRL縄文。29、沈線で施文される。磨消しを伴う。地文はLR縄文。30、隆線で施文される。地文は原体Rを用いた網目状撚糸文と推定される。31、沈線で施文される。32、連弧文が描出される。地文はRL縄文。

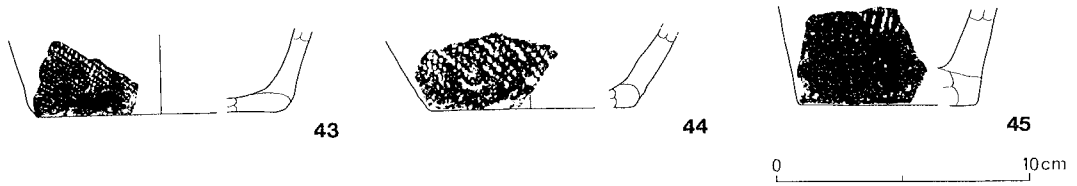
33～36、口縁部。33、沈線と刺突で施文される。34、波状口縁を呈する。沈線と刺突で施文される。35、沈線で施文される。36、波状口縁を呈する。刺突で施文される。37～42、胴部。37・



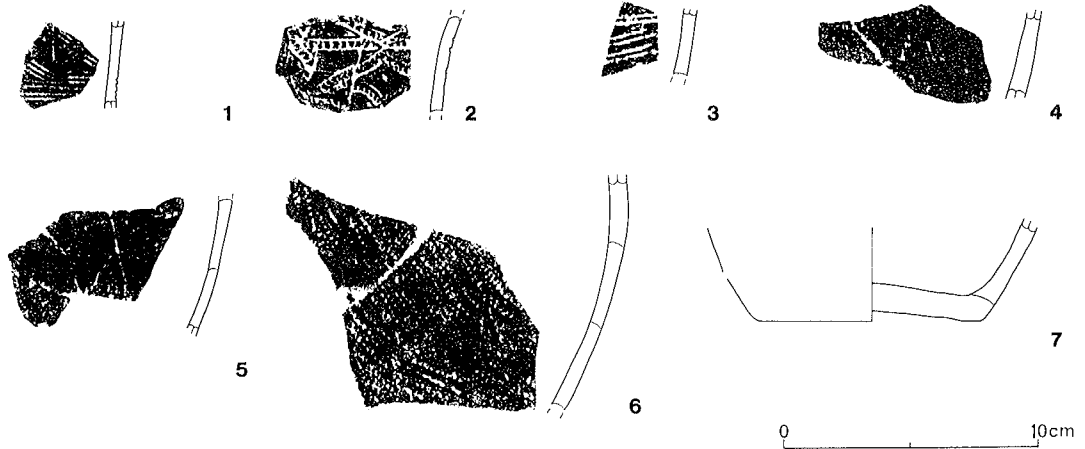
第82図 第2トレンチ出土土器(1) (1/3)



第83図 第2トレンチ出土土器(2) (1/3)



第84図 第2トレンチ出土土器(3) (1/3)



第85図 第3トレンチ出土土器 (1/3)

38、沈線と刺突で施文される。39、沈線で施文される。41、斜格子目文が描出される。42、沈線で施文される。43～45、底部。43、推定底径約9.5cm。地文はRL縄文。44、推定底径約8cm。地文はRL縄文。45、推定底径約7cm。地文は捺糸文L。

帰属はI群～VI群と推定される。

○第3トレンチ出土土器 (第85図)

1～6、胴部。1、幾何学文が描出される。2、押引文で施文される。3、沈線で施文される。6、地文はRL縄文。7、底部。底径8.9cm。

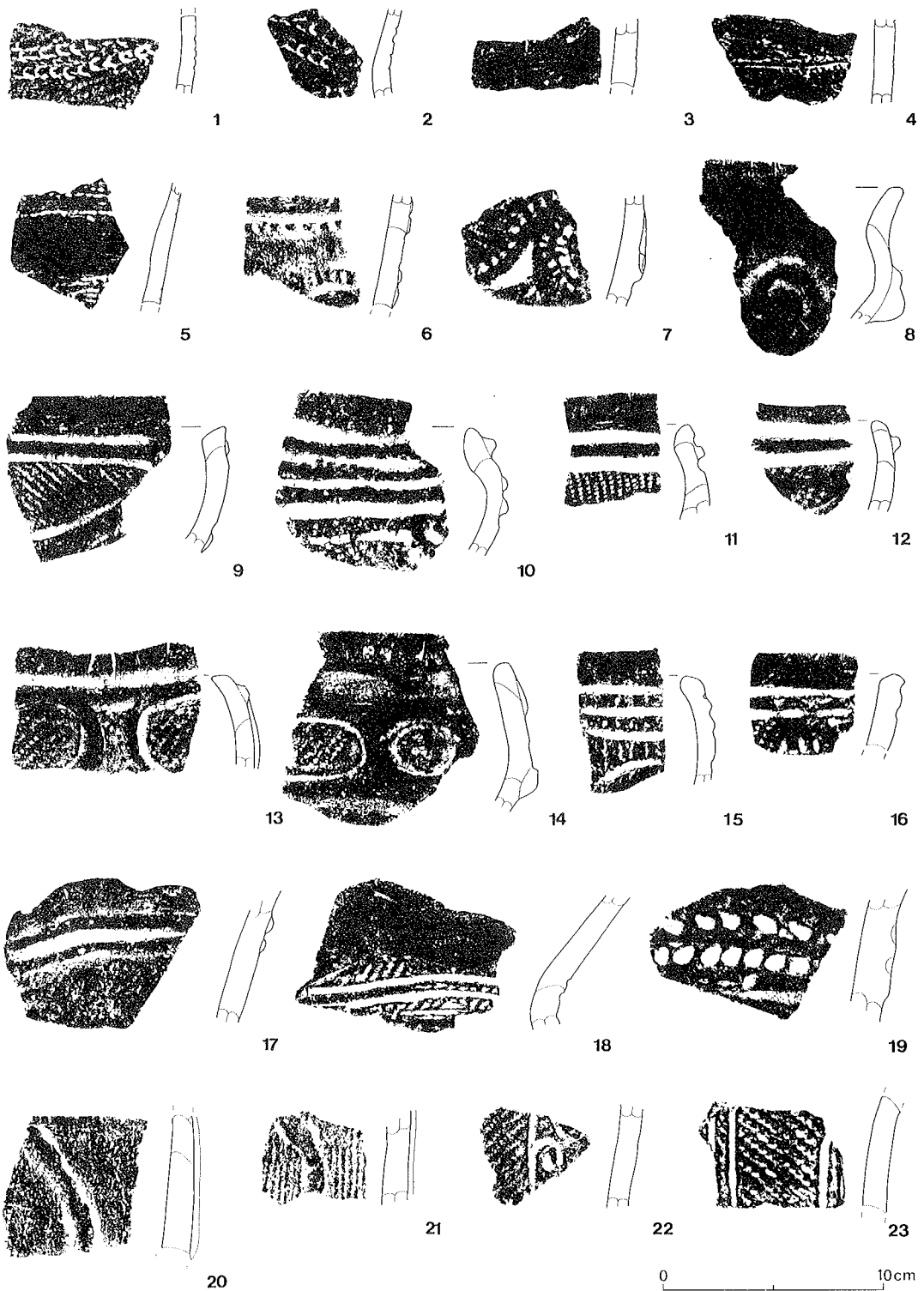
帰属は一部を除きI群・II群と推定される。

○第4トレンチ出土遺物 (第86図・第87図)

1～5、胴部。1・2、押引文が描出される。1の地文はLR縄文。3、沈線と刻目により押引文状の効果を描出している。4・5、沈線と刺突で施文される。

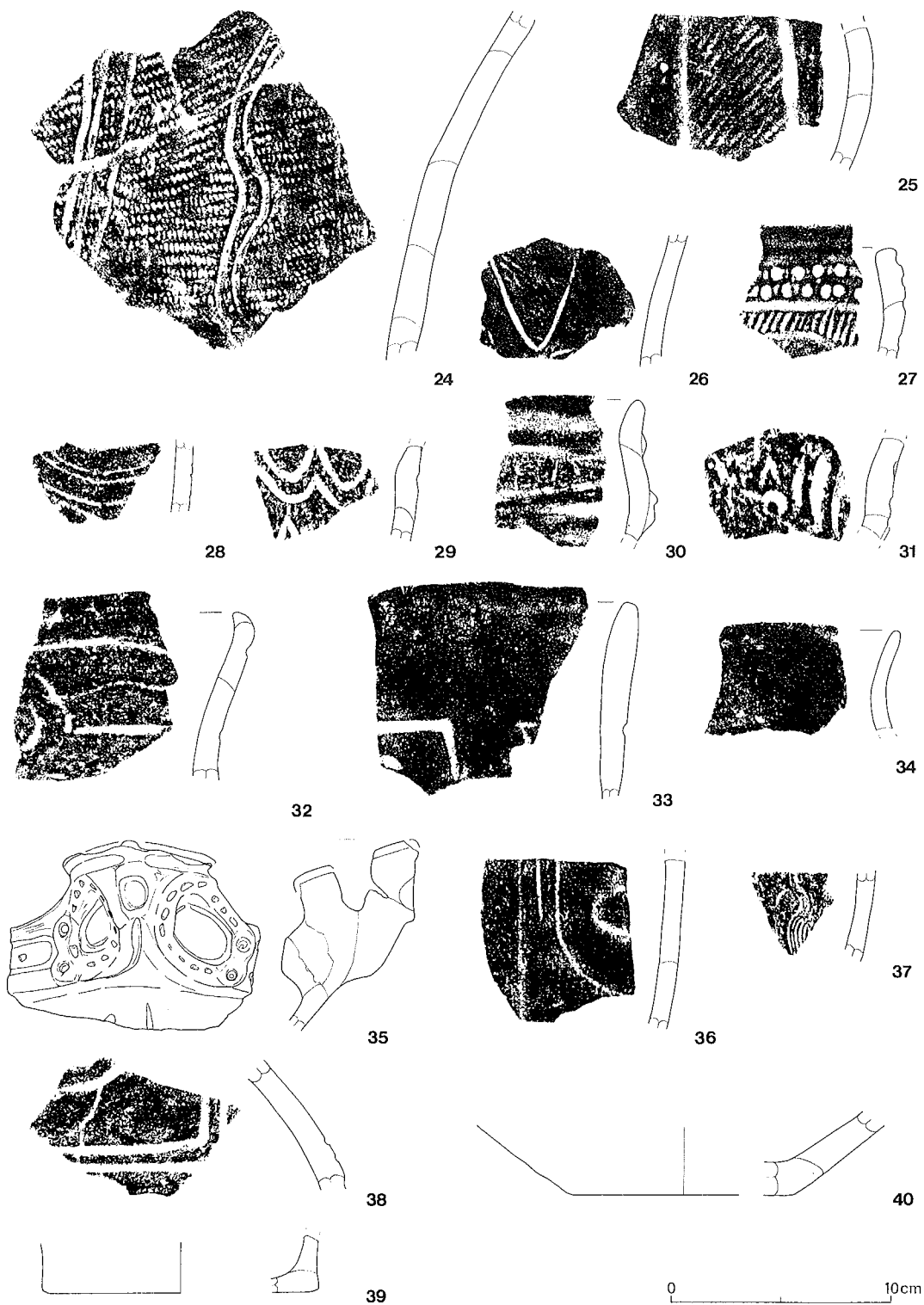
6・7、胴部。6は隆線と角押文で、7は隆線と押引文で施文される。地文はRL縄文。

8～16、口縁部。8、貼付文と沈線で施文される。9～13、隆線と沈線で施文される。地文は全てRL縄文。14、貼付文と沈線で施文される。地文はRL縄文。15・16、沈線で施文される。地



第86図 第4トレンチ出土土器(1) (1/3)

文は15が撚糸文L、16がRL縄文。17~19、頸部。17. 隆線で施文される。無文帯を有する。地



第87図 第4トレンチ出土土器(2) (1/3)

文はLR縄文。18. 沈線で施文される。無文帯を有する。地文はRL縄文。19. 刺突で施文される。

20～26、胴部。20・21、隆線で施文される。21の地文は撚糸文L。22～24、沈線で施文される。地文は22・24がRL縄文、23がLR縄文。25・26、沈線で施文される。磨消しが伴う。地文はRL縄文。

27. 口縁部。沈線と刺突で施文される。磨消しが伴う。地文はRL縄文。28・29、胴部。弧線文が描出される。

30. 口縁部。隆線と沈線で施文される。31. 胴部。沈線と刺突で施文される。

32～35、口縁部。32. 沈線で施文される。地文はRLらしき縄文。35. 把手部。沈線と刺突で施文される。36～38、胴部。36. 沈線で施文される。37. 条線で施文される。38. 弧線文が描出される。

39・40、底部。39. 推定底径約10.5cm。40. 推定底径約13cm。

帰属はⅡ群～Ⅵ群と推定される。

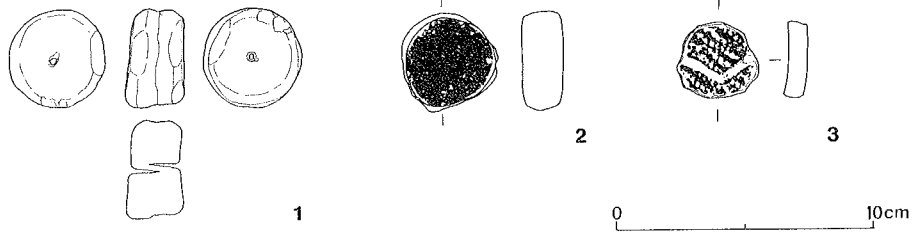
○トレンチ内出土土製品（第88図）

1. 耳飾。直径3.8 cm、最大厚2.3cm。重さ39.6 g。両面の中心部に串状工具による刺突を有する。貫通はしていない。図中左側に僅かに赤彩の痕跡が有る。第2トレンチ出土。2・3、土製円盤。2. 直径約3.8cm、厚さ約1.6cm、現重21.0 g。地文はRL縄文。3. 直径約3 cm、厚さ0.8cm、現重8.8 g。沈線を残す。地文はRL縄文。2は第2トレンチ、3は第4トレンチ出土。

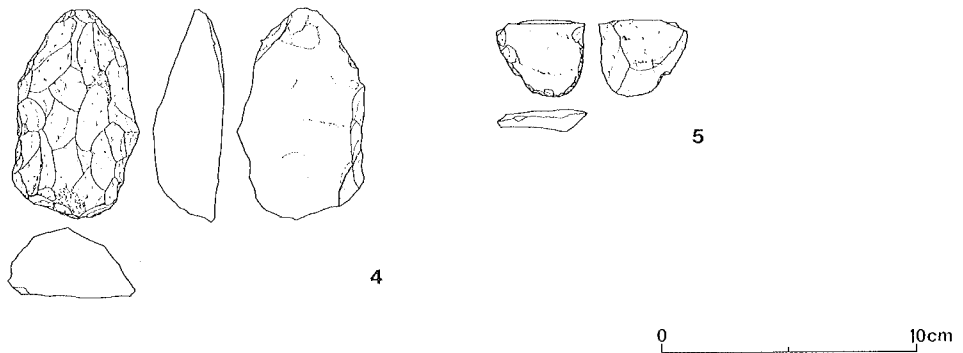
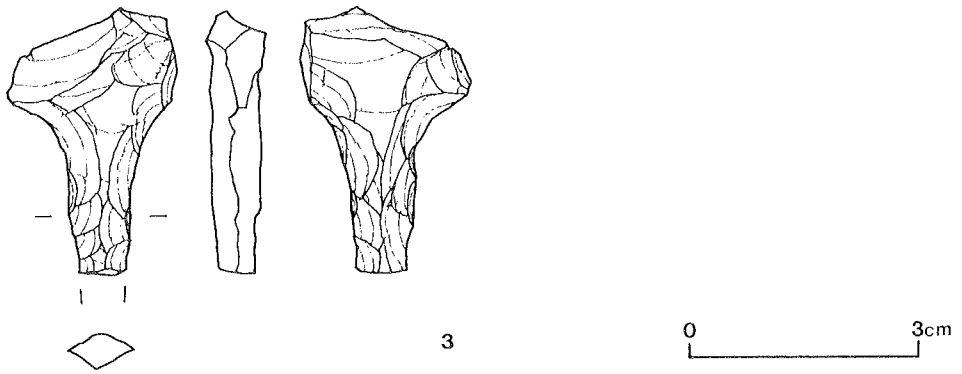
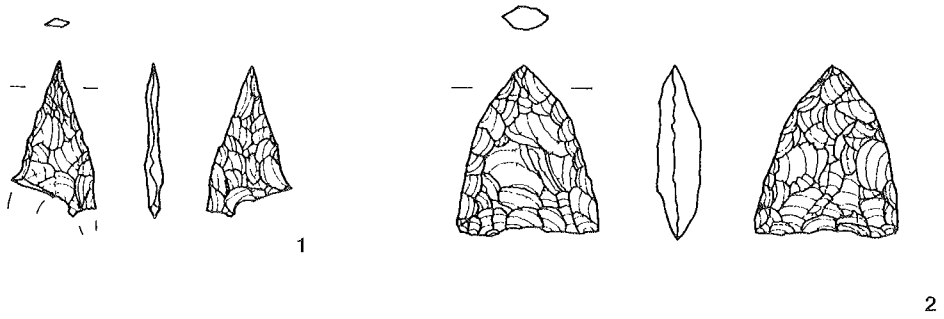
○トレンチ内出土石器（第89図～第93図）

第89図1・2、石鏃。1. 現長2.0cm、最大幅1.0cm、最大厚0.25cm、現重0.7 g。両脚部を欠損する。形態は凹基無茎。調整は丁寧。石質はチャート。第1トレンチ出土。2. 現長2.3cm、最大幅1.9cm、最大厚0.5cm、現重2.9 g。完形。形態は平基無茎。縁辺の調整は丁寧。石質はチャート。第2トレンチ出土。3. 石錐。現長3 cm、摘み部最大幅2.2cm、軸部最大幅0.9cm、現重4.7 g。先端部を欠損。軸部の調整は丁寧。石質はホルンフェルス。第1トレンチ出土。4. 石筥に類すると思われる。全長8.4cm、最大幅4.9cm、最大厚2.8cm、重さ125 g。原礫面をほぼ残す。風化が著しい。石質はホルンフェルス。第2トレンチ出土。5. 二次調整された剥片である。現長3.1 cm、最大幅3.5cm、最大厚0.9cm、現重10.1 g。図中下端が比較的細かく調整されている。石質はホルンフェルス。第1トレンチ出土。

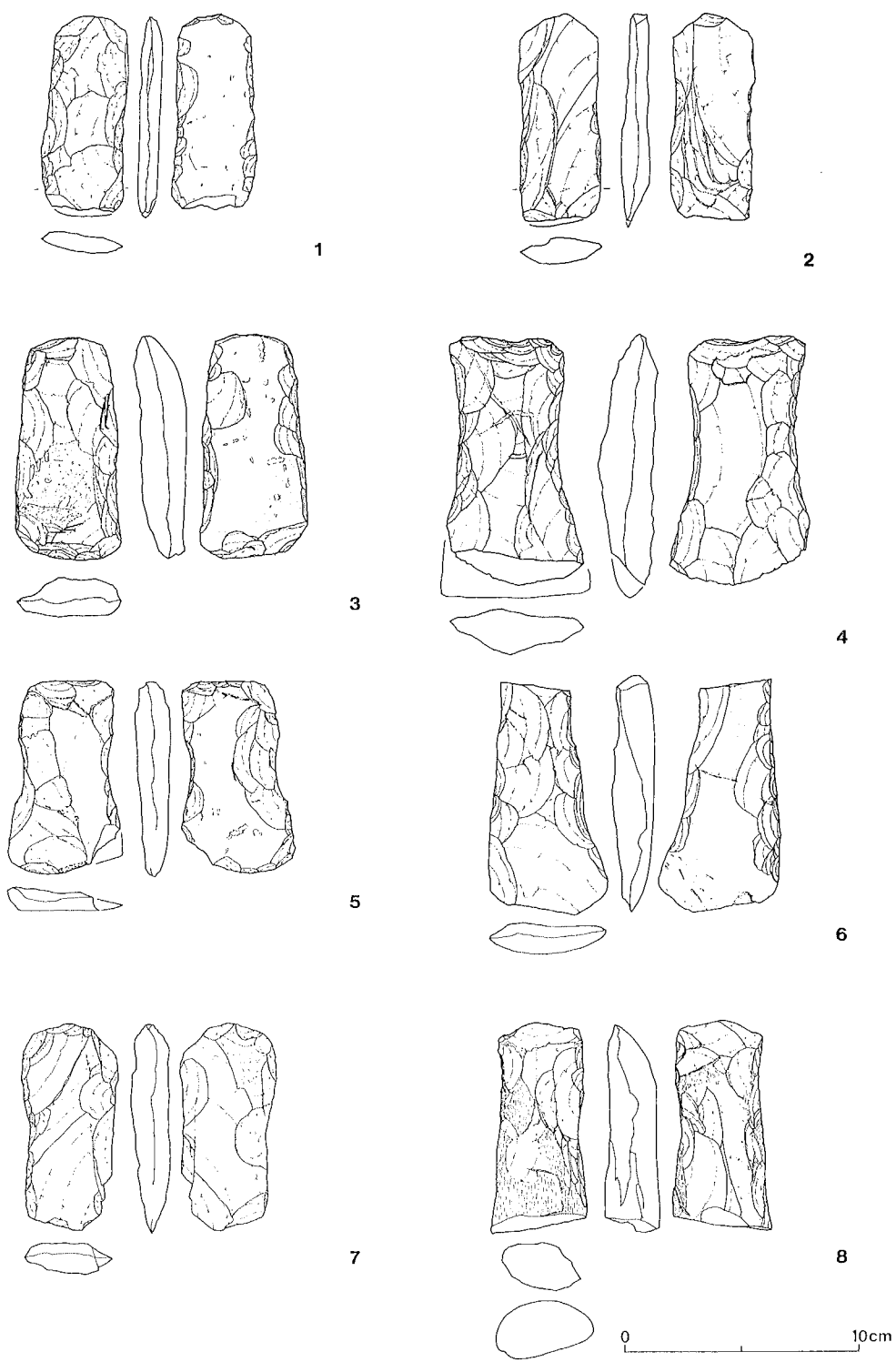
第90図・第91図、石斧類。第90図1～4、第1トレンチ出土の打製石斧。1. 現長8.6cm、最大幅3.6cm、最大厚0.9cm、現重45.7 g。刃部欠損。原礫面を残す。石質は凝灰岩。2. 現長9.2cm、最大幅3.5cm、最大厚1.2cm、現重49.7 g。刃部欠損。風化が著しい。石質はホルンフェルス。3. 現長9.5cm、最大幅4.6cm、最大厚2.1cm、現重140 g。敲打による調整が施されている。刃部は再生使用されていると推定される。石質は砂岩。4. 現長11cm、最大幅5.9cm、最大厚2.4cm、現重170 g。刃部を欠損する。石質は砂岩。5～8、第2トレンチ出土の打製石斧及び磨製石斧。5. 全長8.6cm、最大幅4.8cm、最大厚1.5cm、現重71.6 g。刃部を一部欠損する。石質は砂岩。6. 現長10.3cm、刃幅5.2cm、最大厚1.8cm、現重110 g。刃部は剥離面をそのまま使用している。石質は砂岩。



第88図 トレンチ出土土製品 (1/3)



第89図 トレンチ出土石器(1) (原寸・1/3)



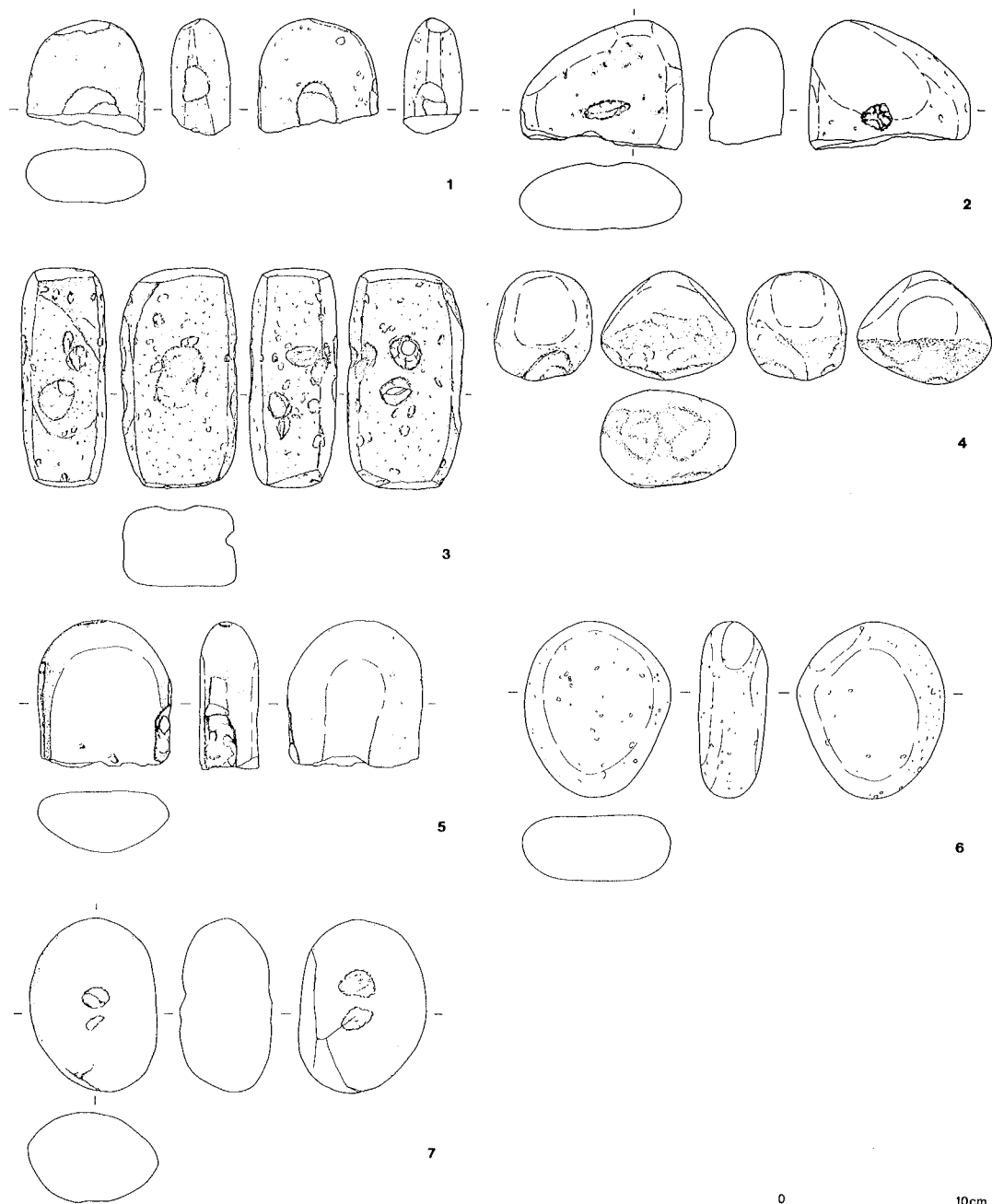
第90図 トレンチ出土石器(2) (1/3)



第91図 トレンチ出土石器(3) (1/3)

7. 現長9.2cm、刃幅3.9cm、最大厚1.7cm、現重77.1g。刃部は節理面より一部断裂している。調整は粗雑。石質はホルンフェルス。8. 現長9.1cm、最大幅4.2cm、最大厚2.4cm、現重140g。下半部欠損。敲打による調整が施されている。石質は凝灰岩。

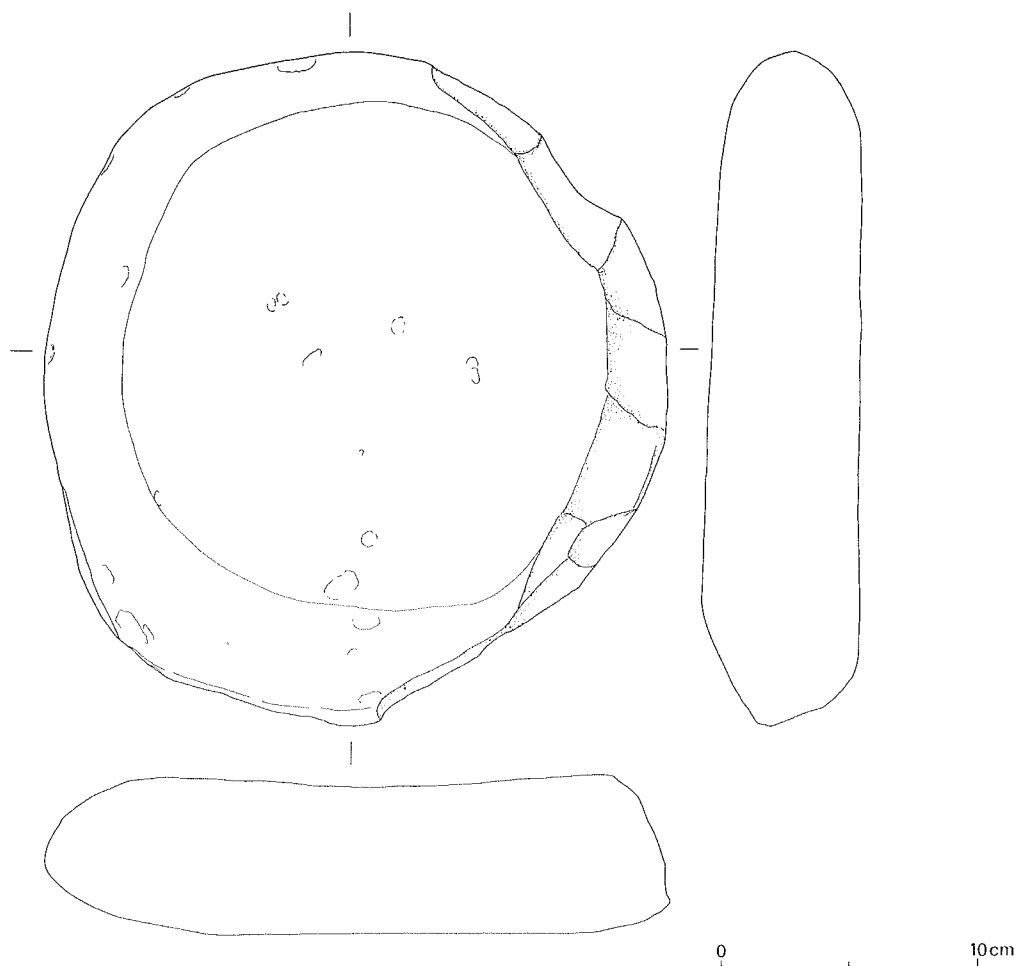
第91図1・2、第3トレンチ出土の打製石斧。1. 全長11.7cm、最大幅6.6cm、最大厚2.6cm、現重190g。刃部を一部欠損する。一部に敲打調整らしき痕跡が認められる。全体に風化が著しい。石質はホルンフェルス。2. 全長9cm、刃幅3.7cm、最大厚0.8cm、現重48.6g。原礫面の大半を残す。石質は頁岩。3～6、第4トレンチ出土の打製石斧及び磨製石斧。3. 現長9.5cm、



0 10cm

第92図 トレンチ出土石器(4) (1/4)

最大幅5.5cm、最大厚1.5cm、現重83.4g。刃部を欠損する。全体的に風化が著しい。石質はホルンフェルス。4. 全長9cm、刃幅4.4cm、最大厚1.2cm、現重150g。刃部のごく一部を欠損する。一部に研磨による調整痕が認められる。5. 現長7.3cm、最大幅4.1cm、最大厚1.8cm、現重77.3g。刃部を欠損する。一部に原礫面を残す。石質はホルンフェルス。6. 現長10.2cm、最大幅4.6cm、最大厚1.9cm、現重68.4g。研磨による調整がほぼ全面に認められる。石質はホルンフェルス。



第93図 トレンチ出土石器 (1/3)

第92図、磨石・凹石類。1～4、第1トレンチ出土。1. 現存長径6.7cm、短径6.7cm、最大厚3.0cm、現重195g。一部欠損するが、本来は断面長楕円形を呈する偏平な楕円礫であったと推定される。正背面に磨痕及び凹みを有する。石質は角閃石質安山岩。2. 現存長径6.6cm、短径9.2cm、最大厚3.5cm、現重430g。一部欠損するが、本来は、断面長楕円形を呈する偏平な楕円礫であったと推定される。正背面に磨痕、中央部に凹みを有する。石質は角閃石質安山岩。3. 長径12.5cm、短径6.5cm、最大厚4.8cm、現重550g。断面長方形を呈する直方体型の礫である。各面は敲打及び研磨による面取りによるものであり、この内四面に、人為的な凹みが認められる。石質は輝石安山岩。5・6、第2トレンチ出土。5. 現存長径8.4cm、短径7.6cm、最大厚3.4cm、現重370g。断面隅丸三角形を呈し、本来はやや偏平気味の長楕円礫であったと推定される。正背面に磨痕が認められる。石質は角閃石質安山岩。6. 長径10.2cm、短径8.2cm、最大厚3.7cm、現重465g。断面長楕円形を呈する平滑な楕円礫である。正背面及び上端に磨痕が認められる。石質は角閃石質安山岩。7. 第3トレンチ出土。長径9.9cm、短径7.1cm、最大厚5.2cm、現重485g。断面不整楕円形を呈する楕円礫である。正背面に凹みが認められる。石質は輝石安山岩。

第93図、石皿。長径26.8cm、短径24.5cm、厚さ5.8cm、現重約6kg。図中右側縁が調整されている

るが、断面長楕円形を呈する偏平な円礫である。中央部に直径約20cmの磨痕を残す。石質は安山岩。第3トレンチ出土。

v. 表採遺物（第94図～第100 図）

○土器類（第94図～第98図）

1～4、胴部。1・2、地文はRL縄文。3. 貼付文が描出される。地文は条線。4. 押引文と刺突で施文される。

5～23、口縁部。5. 隆線で施文される。6～14、隆線と沈線で施文される。地文は6～12がRL縄文、13・14が撚糸文L。15～17、沈線で施文される。地文はRL縄文。18. 地文はRL縄文。19. 波状文が描出される。地文はRL縄文。20. 沈線で施文される。地文はRL縄文。21・22、沈線で施文される。地文は21がLRの縄巻縄文、22が条線。23. 沈線と刺突で施文される。24～27、頸部。24～26. 隆線と沈線で施文される。地文は24がRL縄文、26が撚糸文L。27. 沈線で施文される。地文はLR縄文。28～42、胴部。28. 隆線で施文される。地文は撚糸文L。29～32. 沈線で施文される。地文は30がLR縄文、他はRL縄文。33～37、沈線で施文される。磨消しが伴う。地文は34・35・37がLR縄文、他はRL縄文。38. 地文はRL縄文。39. 波状文が描出される。40～42、地文は条線。42は沈線で施文される。43. 浅鉢の屈曲部。沈線で施文される。

44・45、口縁部。隆線と沈線で施文される。46・47、頸部。沈線で施文される。46の地文は条線。48. 隆線と沈線で施文される。地文は矢羽状沈線文。49・50、胴部。49. 沈線で施文される。地文は撚糸文L。50. 沈線と刺突で施文される。

51～63、口縁部。51. 沈線で施文される。地文はLR縄文。52・53、沈線と刺突で施文される。54沈線で施文される。55. 沈線で施文される。地文は条線。56～59、沈線で施文される。60、隆線で施文される。61. 補修孔が認められる。62・63、口唇部が内屈する。64～80、胴部。64. 沈線で施文される。地文はRL縄文。65～68、沈線と刺突で施文される。69～74、沈線で施文される。75. 斜格子目文が描出される。76. 条線文が描出される。77・78、同一個体の可能性が高い。80. 沈線で施文される。磨消しが伴う。地文は条線。

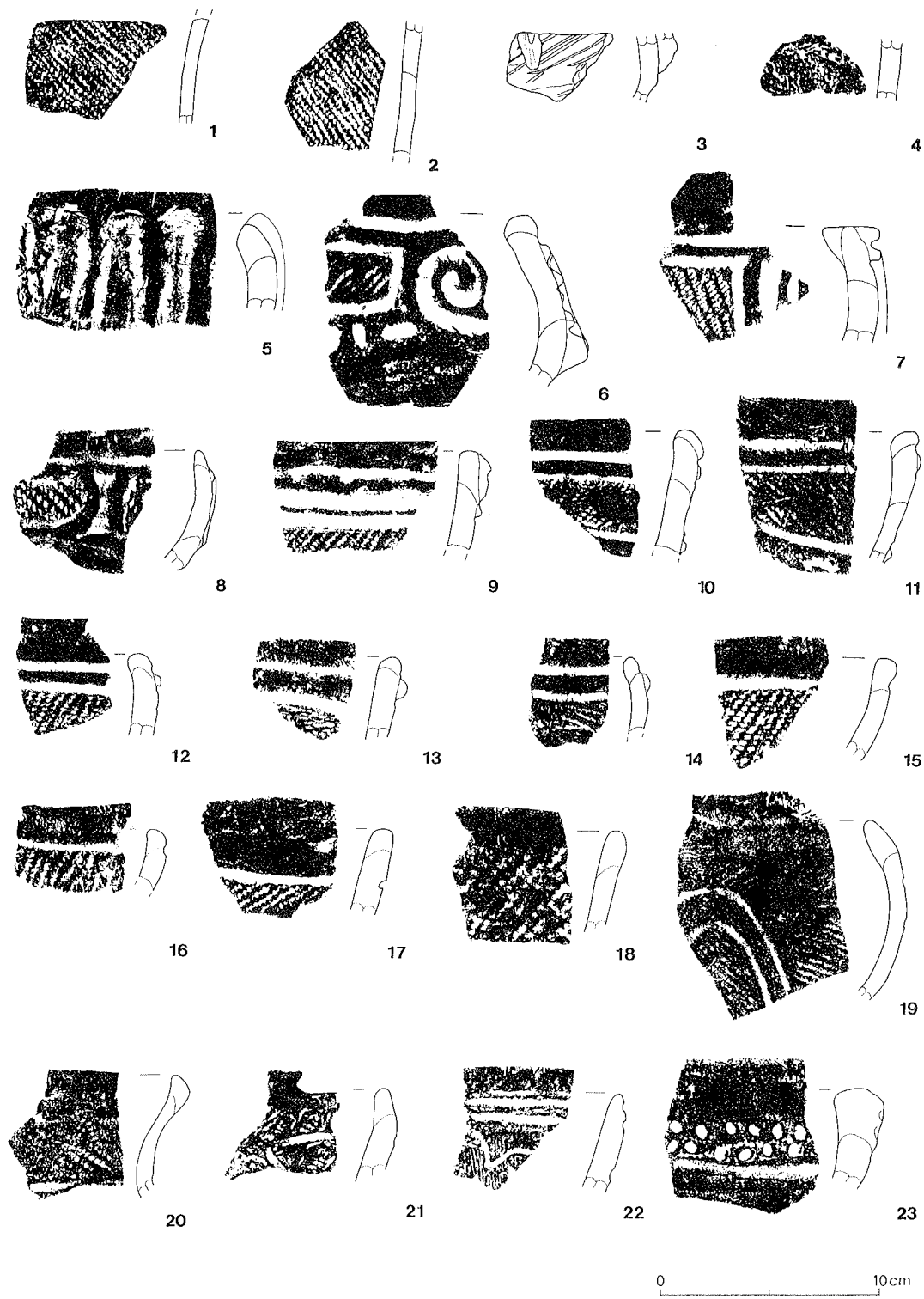
81. 器台。円孔を有する。

82～87、底部。82. 推定底径11.5cm。地文は条線。83～85、隆線と沈線で施文される。83. 推定底径約11cm。地文はRL縄文。84. 推定底径約10cm。85. 推定底径約7.5cm。86. 推定底径約8.5cm。87. 推定底径約8cm。

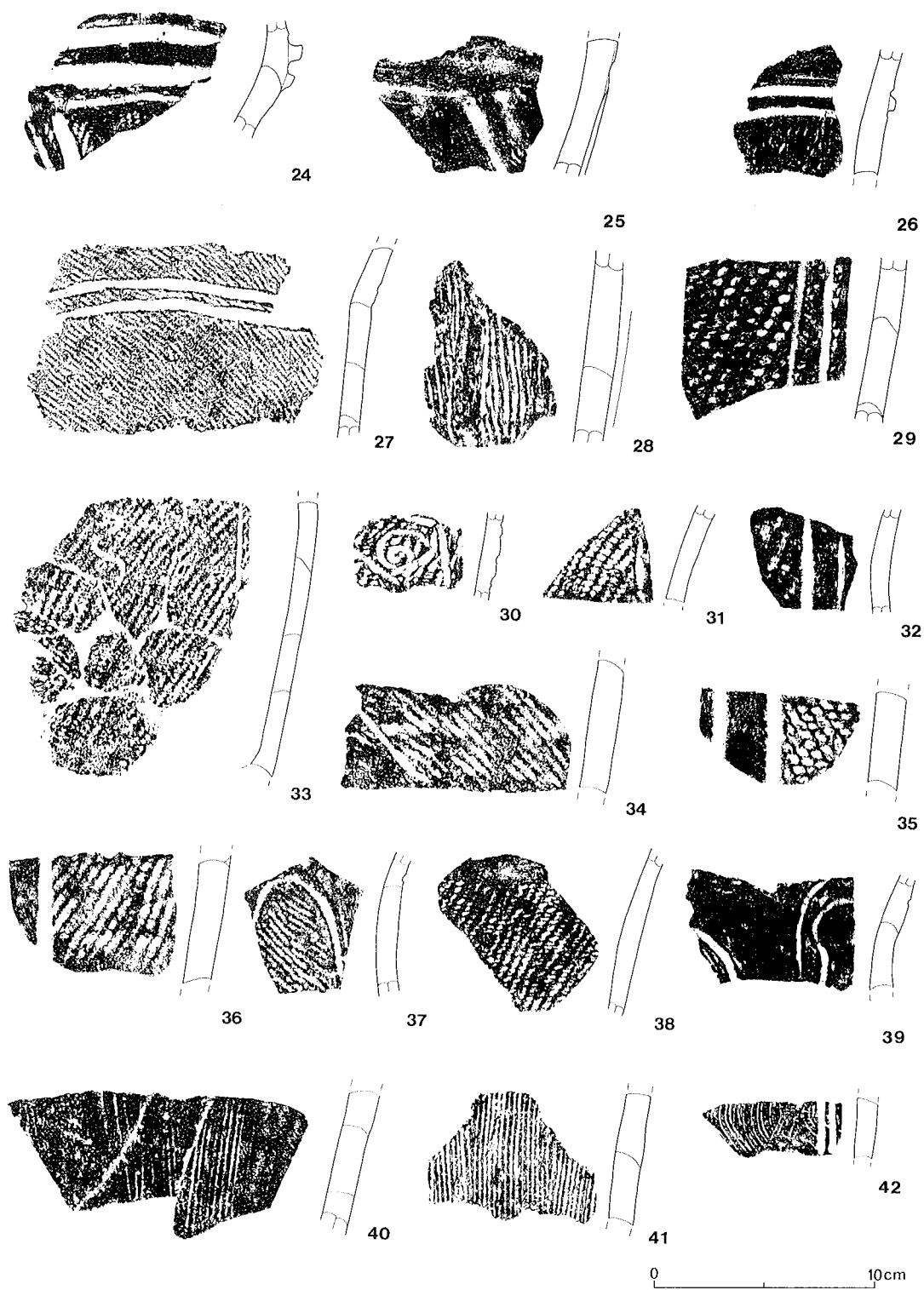
帰属は概ねI群～VI群と推定される。

○表採石器（第99図・第100図）

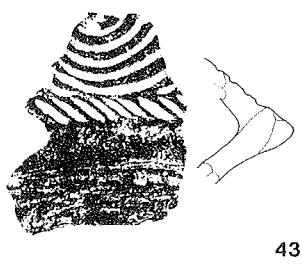
第99図、石斧類。1. 現長8.9cm、最大幅3.4cm、最大厚1.4cm、現重50g。全体の約1/3を欠損する。石質はホルンフェルス。2. 現長9.2cm、最大幅4.6cm、最大厚1.8cm、現重105g。刃部を欠損する。原礫面の過半を残す。石質はホルンフェルス。3. 全長8.4cm、刃幅4.8cm、最大厚1.4cm、現重60.6g。原礫面を一部残す。石質はホルンフェルス。4. 全長7.9cm、刃幅4.5cm、最



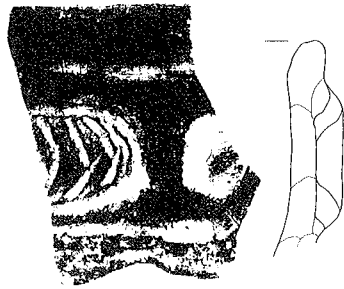
第94图 表採土器(1) (1/3)



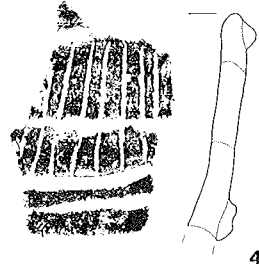
第95图 表採土器(2) (1/3)



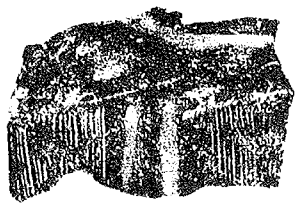
43



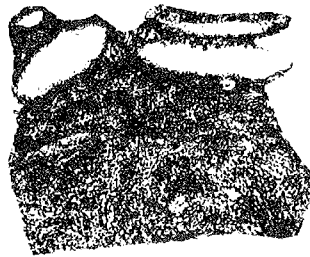
44



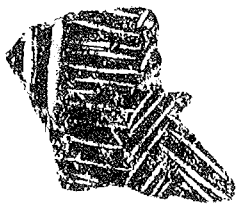
45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



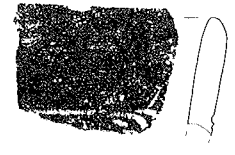
56



57



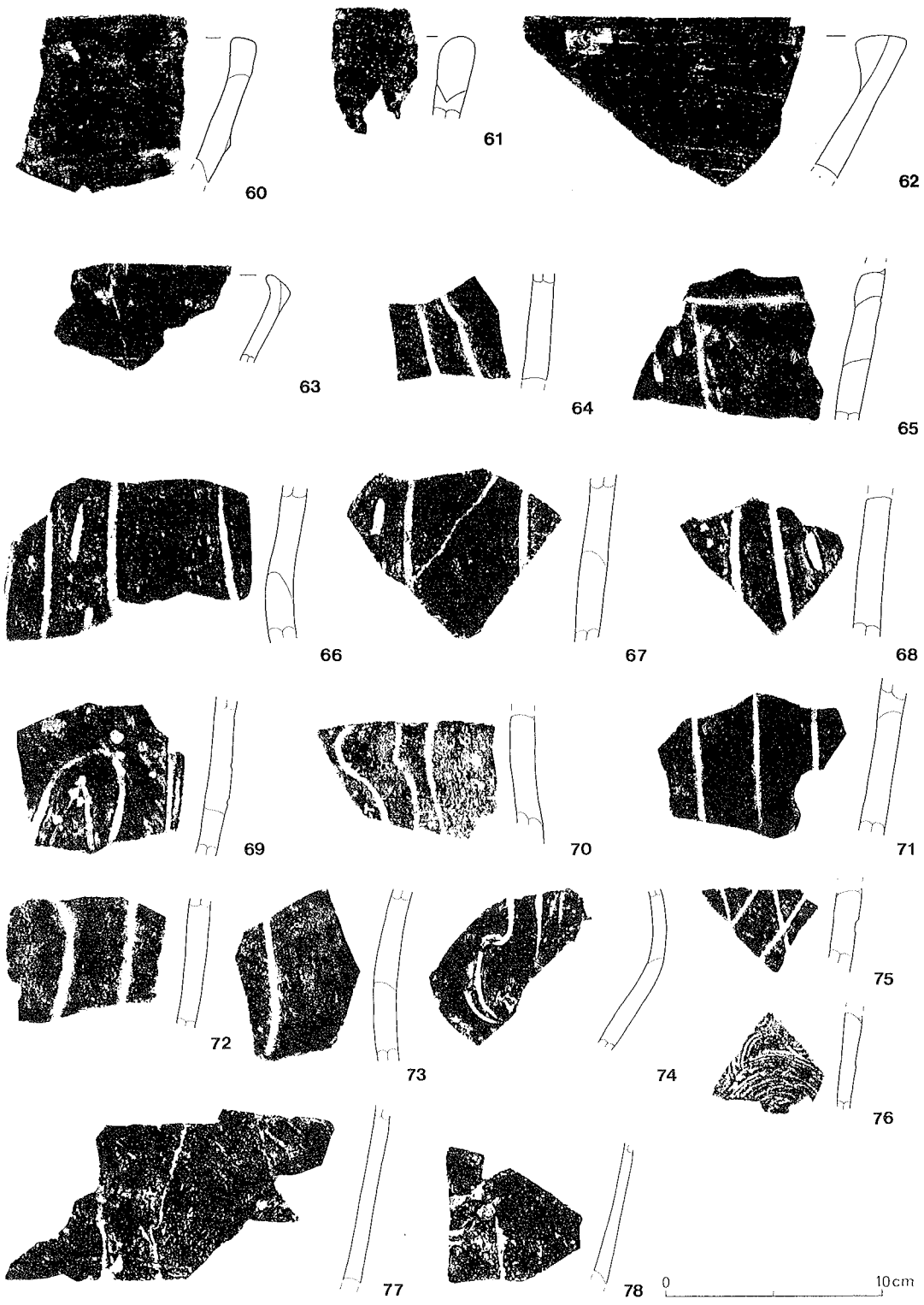
58



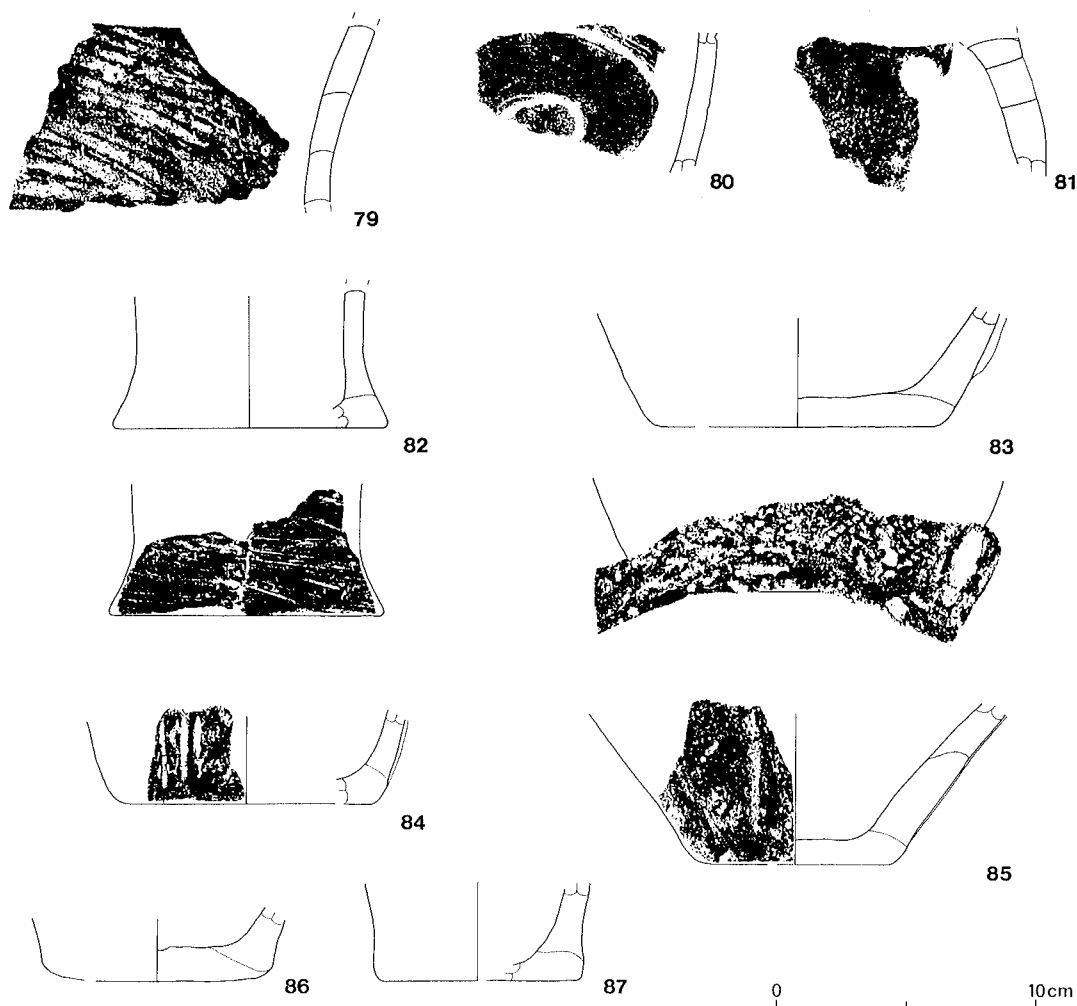
59

0 10cm

第96图 表採土器(3) (1/3)



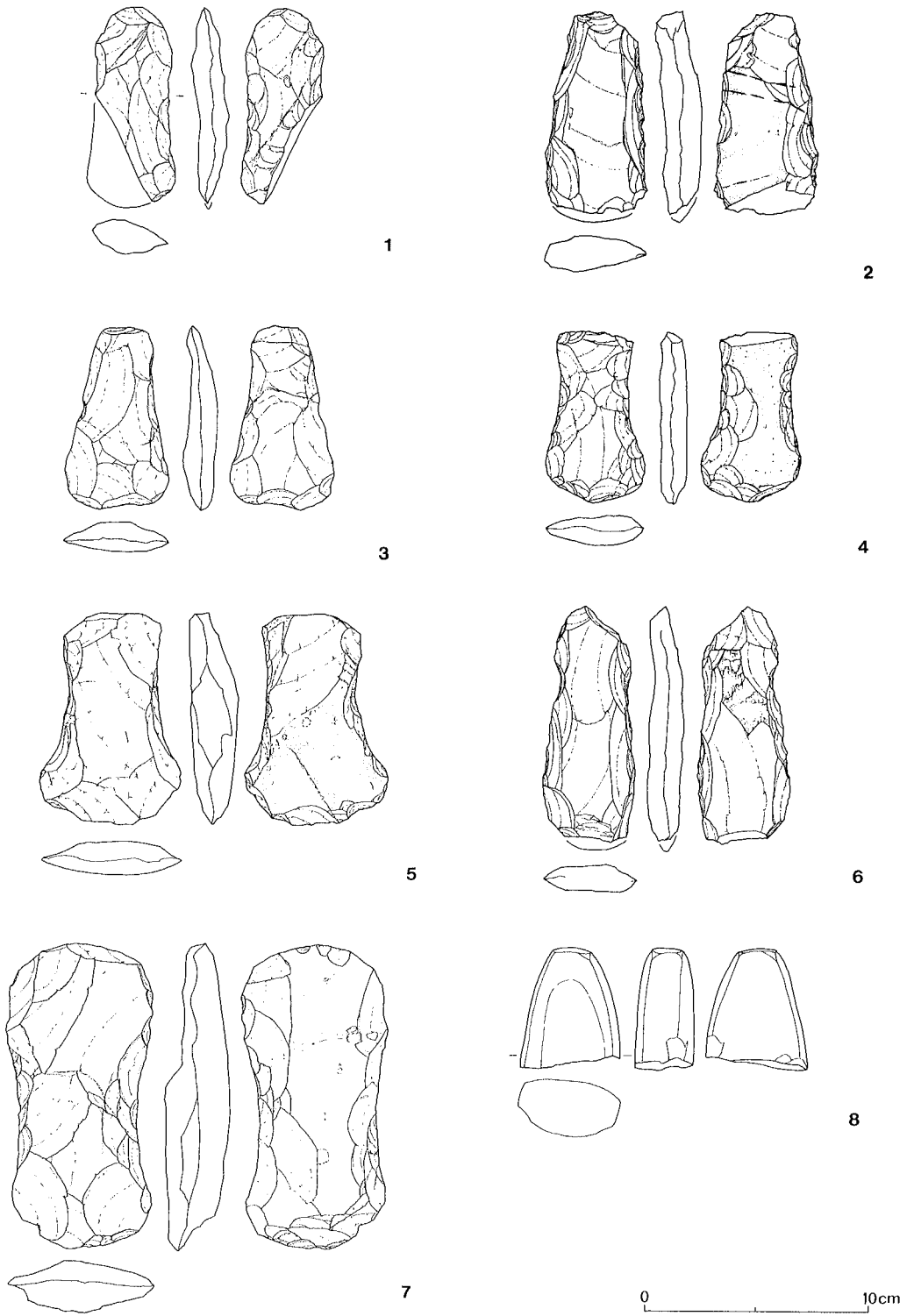
第97图 表採土器(4) (1/3)



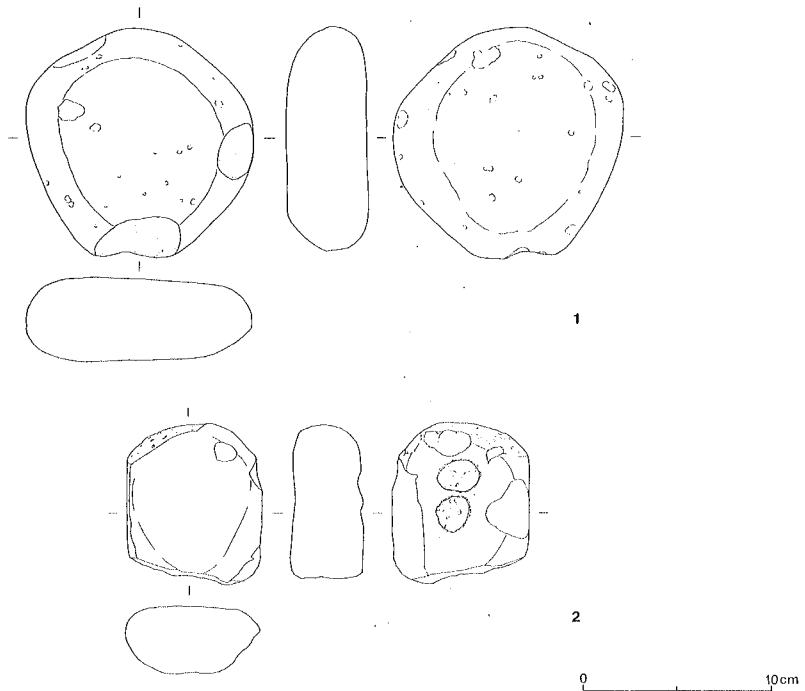
第98図 表採土器(5) (1/3)

大厚1.2cm、現重61.3g。原礫面の過半を残す。石質は砂岩。5. 全長9.7cm、刃幅6.4cm、最大厚2.1cm、現重145g。原礫面の過半を残す。石質はホルンフェルス。6. 現長10.7cm、最大幅4.2cm、最大厚1.6cm、現重94.3g。刃部欠損。原礫面の一部を残す。石質はホルンフェルス。7. 全長13.9cm、刃幅6.6cm、最大厚2.9cm、現重305g。原礫面の過半を残す。石質は砂岩。8. 磨製石斧の頭部。現長5.6cm、最大幅4.5cm、最大厚2.6cm、現重105g。面取りは丁寧。石質は凝灰岩。

第103図、磨石及び凹石。1. 直径12.1cm、厚さ4.3cm、重さ990g。断面長楕円形を呈する平滑な円礫である。正背面に磨痕を有する。石質は安山岩。2. 現存長径8.1cm、短径7.2cm、厚さ3.6cm、現重395g。断面楕円形を呈し、図中下端を欠損するが、本来は扁平な楕円礫であったと



第99図 表採石器(1) (1/3)



第100図 表採石器(2) (1/4)

推定される。石質は安山岩。

vi. 倒木痕出土遺物 (第101図～第105図)

今回の発掘調査区よりは3カ所の倒木痕が検出され、これらからも遺物が出土している。本項では、これらの遺物について記述する事とする。(倒木痕の位置については第7図を参照。)

○第1 倒木痕出土土器 (第101図)

1～4、口縁部。1. 隆線と沈線で施文される。2・3、沈線で施文される。地文はRL縄文。4 沈線の上にLR縄文、下にRL縄文が施文される。5～12、胴部。5・6、隆線と沈線で施文される。地文はRL縄文。7. 沈線で施文される。地文はLR縄文。8・9、隆線で施文される。地文はRL縄文。10. 地文はRL縄文。11. 地文はLR縄文。12. 沈線で施文される。地文はRL縄文。13. 胴部。沈線で施文される。

14・15、胴部。沈線と刺突で施文される。

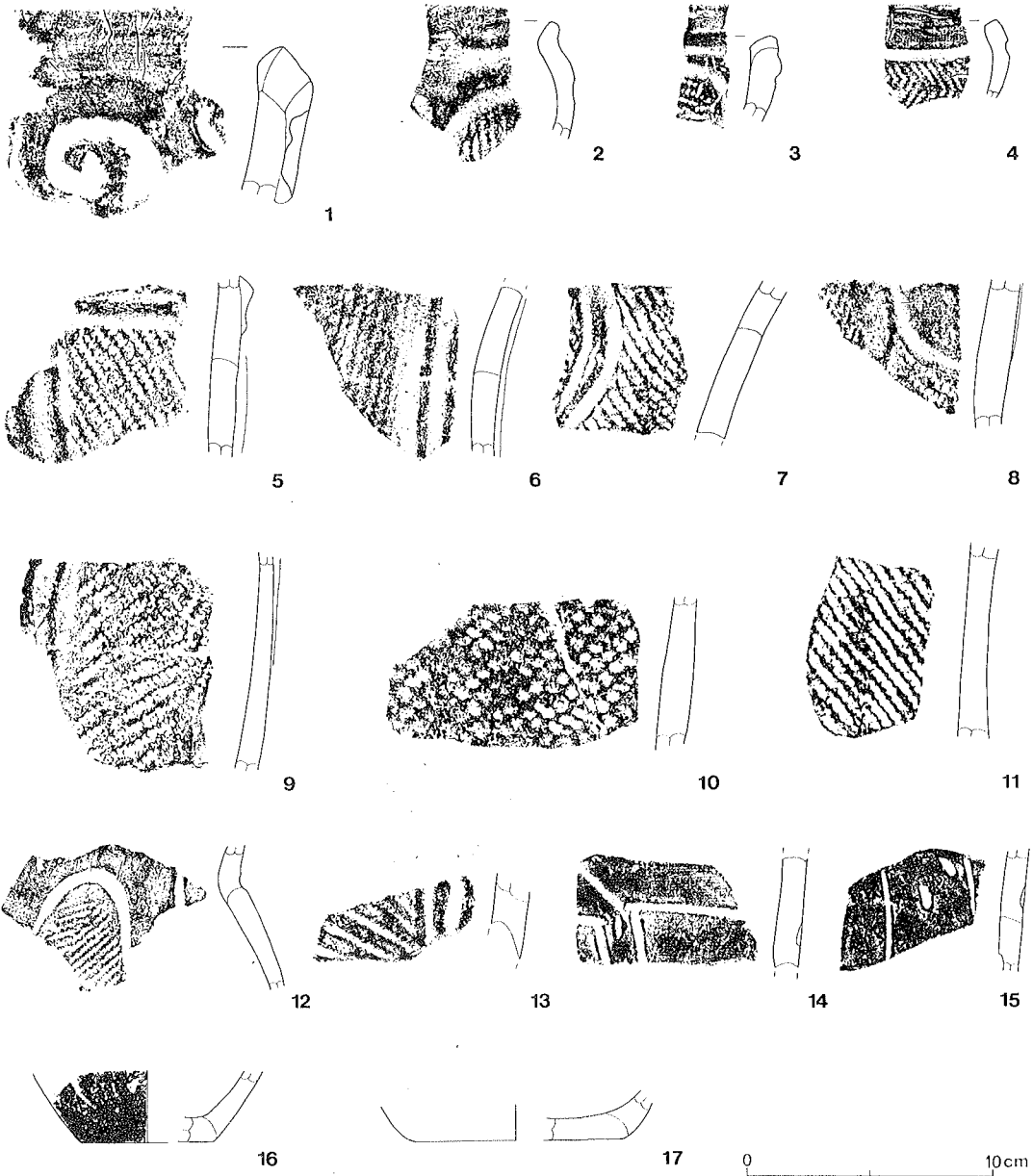
16・17、底部。16. 沈線で施文される。推定底径約5.5cm。17. 推定底径約9cm。

帰属はV群・VI群と推定される。

○第2 倒木痕出土土器 (第102図)

胴部。沈線と刺突で施文される。

帰属はVI群と推定される。

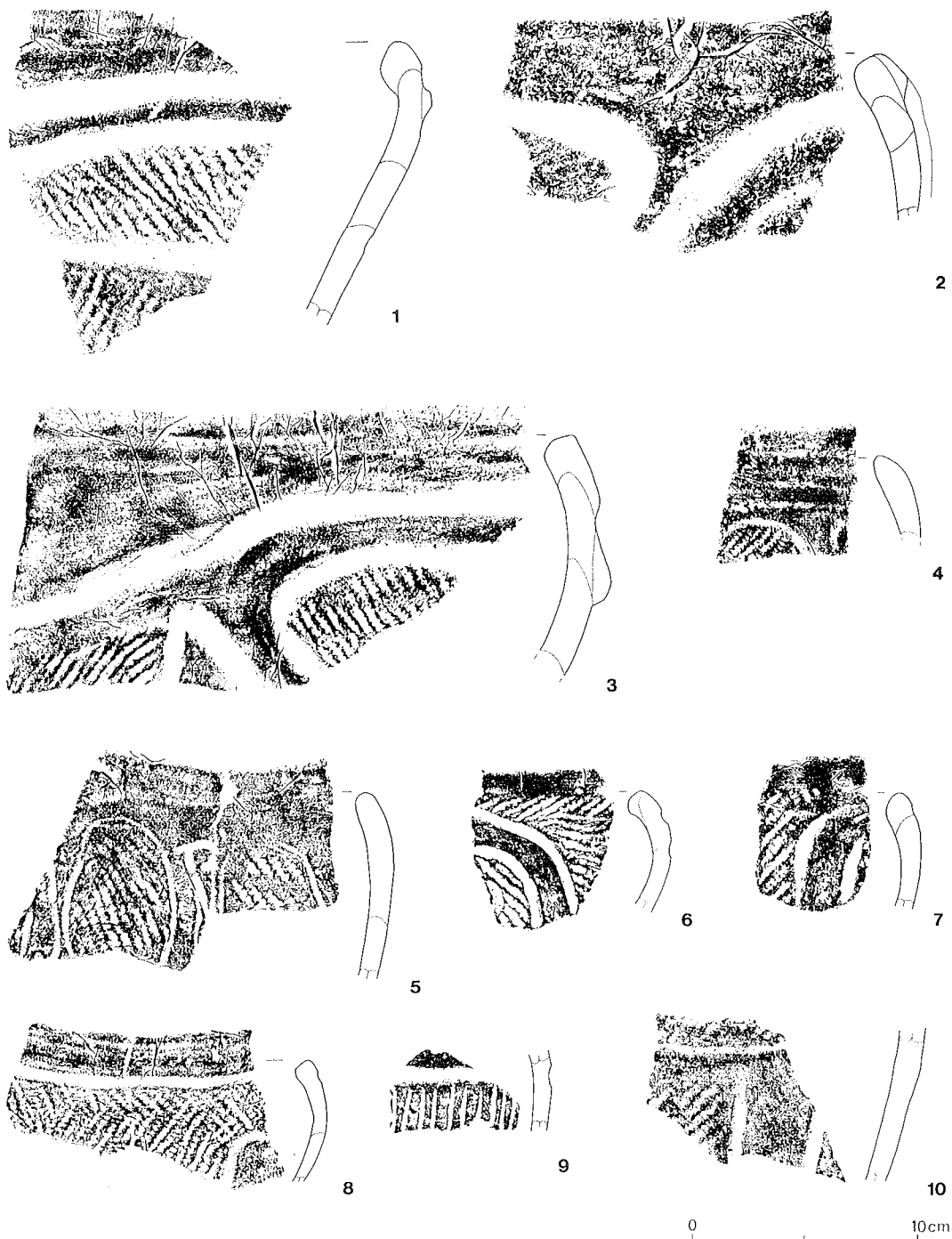


第101图 第1倒木痕出土土器 (1/3)



0 10cm

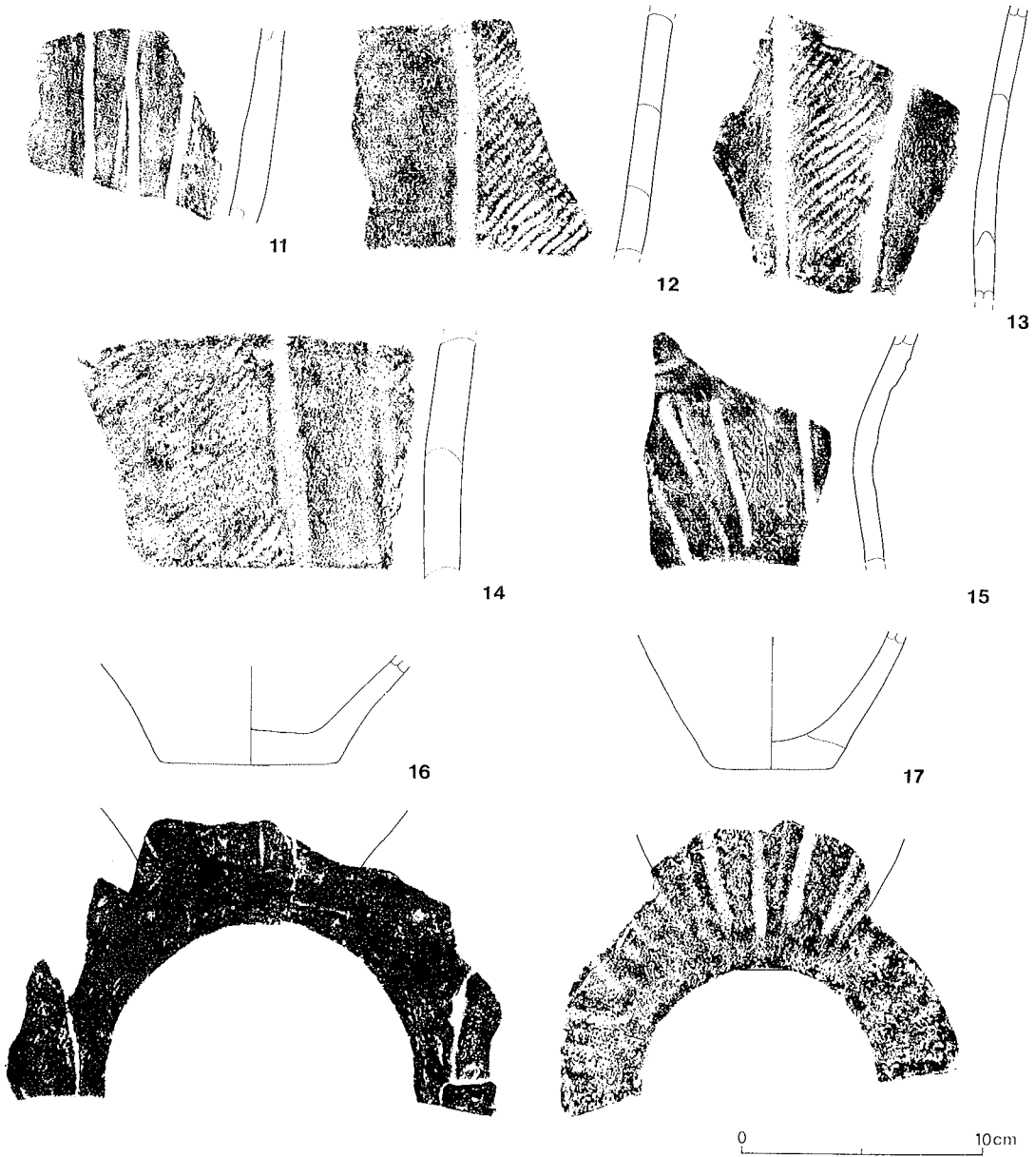
第102图 第2倒木痕出土土器 (1/3)



第103図 第3倒木痕出土土器(1) (1/3)

○第3倒木痕出土土器 (第103図・第104図)

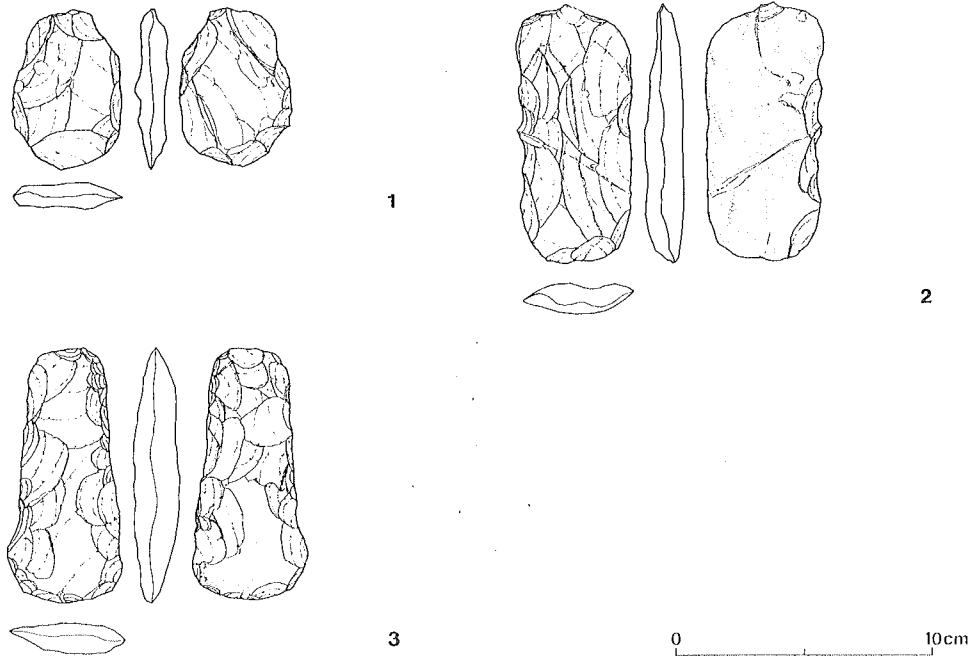
1～9、口縁部。1～3、隆線と沈線で施文される。地文は1・3がLR縄文、2がRL縄文。
4・5、沈線で蕨手状文等が描出される。地文はRL縄文。6～8、波状文が描出される。地文



第104図 第3倒木痕出土土器(2) (1/3)

は6・8がLR縄文、7がLR縄文の合撚。9. 沈線で施文される。地文は条線。10～15、胴部。10. 沈線で施文される。磨消しが伴う。地文はRL縄文。11. 沈線で施文される。地文はRL縄文。12～14、沈線で施文される。磨消しが伴う。地文は12・13がRL縄文、14がLR縄文。15. 沈線で蕨手状文等が描出される。地文はLR縄文。16・17、底部。16・17、沈線で施文される。16. 底径7.5cm。17. 底径5.1cm。

帰属はV群と推定される。



第105図 倒木痕出土石器 (1/3)

○倒木痕内出土石器 (第105図)

1. 第1倒木痕出土。全長6.4cm、最大幅4.3cm、厚さ1.1cm、現重44.1g。全体に風化している。石質はホルンフェルス。本資料の用途は不明だが、打製石斧に類する製品の可能性が有る。

2・3、第3倒木痕出土。打製石斧。2. 全長10.4cm、刃幅4.4cm、最大厚1.5cm、現重96.1g。原礫面をほぼ残す。やや風化している。石質は砂岩。3. 全長10.2cm、刃幅4.6cm、最大厚1.8cm、現重94.6g。石質は砂岩。

VI. 結 語

今回の発掘調査において確認された遺跡の概況に関して、若干のまとめと考察を記述する。

○検出遺構について

住居跡は、2軒とも床面以上が削平されており、その全体が明確ではないが、第1号住居跡の場合、屋内炉跡に転用された連弧文土器のモチーフと施文状態から、加曾利EⅡ式期後半～加曾利EⅢ式期初頭頃の構築の可能性を有している。第2号住居跡は、時期を確定し得る遺物が出土していないが、柱穴跡より加曾利EⅡ式期の土器が出土した事、本住居跡確認面の上層に堆積する包含層が、加曾利EⅡ式以降の遺物を主体としていた事から、現状では加曾利EⅡ式期の構築の可能性が高いと推定される。この2軒は、上記の様な状況から、ほぼ同時期の構築となるが、依然不明確な点も残るため、両者に時間差が存在する可能性は念頭に置かねばならない。土壌群は、切合等により詳細不明なものも含めて、総数36基を検出した。番号を付して記述した土壌は

そのうちの34基だが、ほぼ中期後半～後期前半に構築されている。具体的な時期区分は下記のように想定される（A1, 3, 5, 9, 10, 14, 17, 25の8基は出土遺物が無い、或いは極めて少ないために、遺物の帰属区分は可能であったが具体的な時期判定に至らず、除外している。）。

小台遺跡等4次発掘調査検出遺構 変遷一覧表

遺構 時期	住居跡	土 壙
加曾利EⅠ式期		1(旧) 13 A 3 16
加曾利EⅡ式期	1住 2住	A 2 B 1 2(旧) 4 6 8 12 18 19(旧)
加曾利EⅢ式期		21
加曾利EⅣ式期		7(旧)
称名寺Ⅰ式期		23 A 8
称名寺Ⅱ式期		B 2 1(新) 2(新) 7(新) 11 15 19(新) 21 24
堀ノ内Ⅰ式期		22

検出土壙の上限は中期後半、加曾利EⅠ式期で、第1号、第13号の2基の土壙が該期の構築と推定される。出土土器は北関東系加曾利E式の系統に含まれるもので、大木8a式(第13号)、同8b式(第1号)に比定し得る資料が認められる。この時期、当地域が北関東系大木式の影響下に在った状況をよく示している。EⅡ式期には9基構築されている。EⅢ式期は激減する。第23号土壙のみ該期の土器を出土しているが、EⅣ式土器を共伴しており、EⅢ式からEⅣ式への移行期の構築の可能性が有る。EⅣ式期は、第7号土壙(旧)1基である。後期初頭、称名寺Ⅰ式期の遺構は全く検出されていない。A8号と第23号土壙の2基が該期の土器を少量出土したが、遺物の主体が称名寺Ⅱ式である事から、ともに称名寺Ⅱ式期、遡ってもⅠ式からⅡ式への移行期の構築と推定される。Ⅱ式期には9基構築され、遺構数は加曾利EⅡ式期と並ぶ。堀ノ内Ⅰ式期は第22号土壙のみであった。

○埋没谷について

東岸の緩斜面から谷筋へ落ち込む部分を検出したが、その深さ、幅等は確認出来なかった。しかし形成された遺物包含層中より、前期黒浜式～後期堀ノ内式に至る土器が出土したことから、その期間、連続或いは断続的に流水が作用していたと思われる。この流路の存在が小台遺跡の集落の消長に密接に関連していた事は確かであろう。

○集落の概要と、その時期的変遷

集落は、埋没谷を西限として、東側の微高地状の平坦地に所在していたものと思われる。昭和54年(1979)、今回の調査区の南方、現在の南大通り線部分で第2次発掘調査が実施された際、

加曾利EⅡ式期～称名寺Ⅱ式期にわたる住居跡が14軒検出されている。この周辺に集落の中心が存在していた可能性がかなり高い。今回検出された土壌群の時期は、住居の存続時期とほぼ対応しており、この集落の一部と考えて良いだろう。住居域と施設域が区別されていたことが推定できる。また、第5次発掘調査で住居域と施設域の間になる地域に小支流が確認されていることから、自然地形を境界とした可能性も有る。

集落の上限は現状では未確認だが、今回の遺構上限である加曾利EⅠ式期には、既に集落が形成されていたであろう。加曾利EⅡ式期には土壌の数は増加し、これに近接して住居も構築されている。第2次調査で同期の住居跡が確認された事を考えると、当時の住居域の一部はこの地域まで及ぶ事が分かる。遺物にも曾利式、大木式等、北関東、南関東～信州等の影響が多く認められ、集落基盤が安定していたと思われる。しかし、続くEⅢ式期～EⅣ式期の土壌は2基に減少し、住居は（現時点では）第2次発掘調査時検出の柄鏡形住居跡が北限である。称名寺Ⅰ式期に至っては、今回の調査では遺構は全く検出されず、土壌群も第2次発掘調査地点付近の確認に留まる。これに対し、Ⅱ式期には、加曾利EⅡ式期の遺構確認範囲をほぼ回復し、第7号土壌（新）の様に、加曾利EⅡ式期の土壌跡を利用した土壌の再構築も見られる。但し、その分布状態は全体的にやや西側（埋没谷に近接した位置）に移動しており、B2号土壌や、今回唯一の堀ノ内Ⅰ式期の遺構である第22号土壌の様に、埋没谷に堆積した遺物包含層上に構築された状況も確認されている。また、近接する該期の住居は確認されず、加曾利EⅡ式期の状況とは、やや異なっている。遺構の減少した加曾利EⅢ式期～称名寺Ⅰ式期に、それまでの流路が洪水時の土砂の流入等によって埋没し、これを避けて、土壌群の位置を移動、再構築したと推定できる。そして称名寺Ⅱ式期末には、流路が西側へ変化したことによって、該期の遺構が再びこの地域に構築されたとも仮定できるだろう。住居跡の位置は殆ど変化していないため、居住域は、流水等の外部からの影響の比較的少ない地域に定め、土壌群等の比較的構築の容易な施設域は、環境の変化に応じて移動・構築したと考えられる。

○今後の課題

集落中心部の確認が重要だが、近年の区画整理事業により周辺地域が削平されてしまっている。南大通り線以南の確認はかなり困難となったが、今回の調査区以東、南大通り線以北の地域には、余り削平されていない箇所も多く、遺跡の確認される可能性が高い。調査の継続による遺跡の様相の把握は今後の課題である。また、埋没谷に形成された遺物包含層より出土した前期黒浜式～後期堀ノ内式の土器は、流路の上流或いは沿岸に各時期の集落が存在する可能性を示している。これまでも加曾利E式期以前の集落は未確認であり、その確認は、深谷市の縄文時代遺跡の動態を知る上でも重要である。周辺遺跡の調査でも留意すべき課題である。

筆者の浅学の故、多々問題点を残しながらの報告書刊行となってしまった。報文中の至らぬ点について末筆ながらご容赦を乞い、合わせて今後の御指導・御鞭撻をお願いする次第である。



調査区全景（調査前）（北東より）



調査区全景（調査終了後）（同上、南半部）



調査区全景（同上）（同上・北半部）

写真図版 2



A区全景（西より）



第1号住居炉跡（及びA1号土壙）



B区全景（北西より）



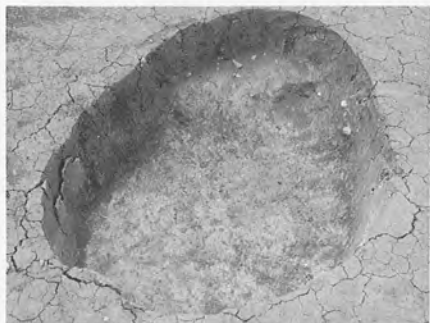
第2号住居炉跡



B1号土壙



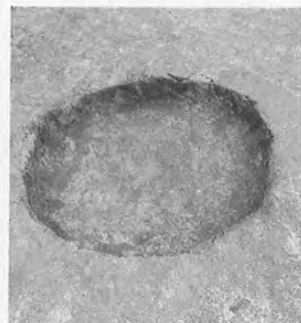
B2号土壙



第1号土坑



第2号土坑



第3号土坑



第4号土坑



第5号土坑



第6号土坑



第7号土坑



第8号土坑



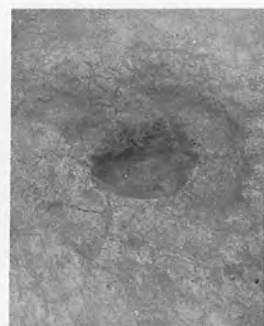
第9号土坑



第10号土坑



第11号土坑



第12号土坑

写真図版 4



第13号土坑



第14号土坑 (手前)



第15号土坑



第16号土坑



第17号土坑



第18号土坑



第19号土坑 (左上)

第20号・第21号土坑 (上)

第22号土坑 (左下)



第23号土坑



第24号・第25号土坑



第1トレンチ (奥に第4トレンチ)



第2トレンチ



第3トレンチ

写真図版 6



第6号土壌 遺物出土状態



第12号土壌 遺物出土状態



第13号土壌 遺物出土状態



第20号土壌 礫群出土状態（断面）



第1号住居炉跡 石鍬出土状態（左上）

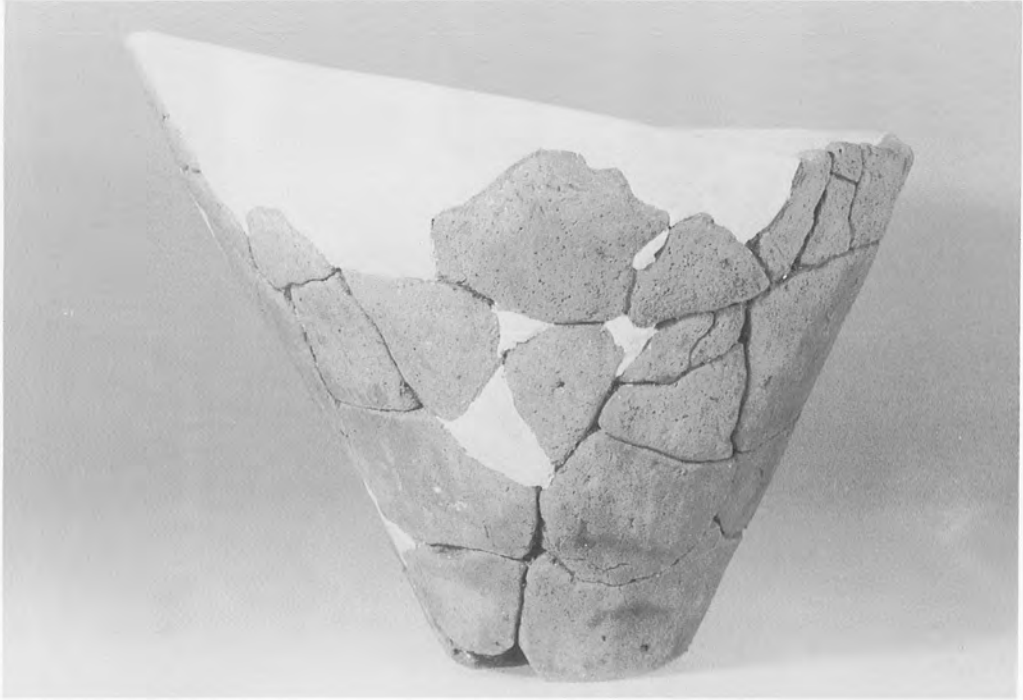
第2トレンチ 土製石飾出土状態（中上）

" 石鍬出土状態（左下）

" 石錐出土状態（中下）

第3トレンチ 石皿出土状態（上）





確認調査時出土土器

写真図版 8





第1号住居炉跡出土土器

写真図版10



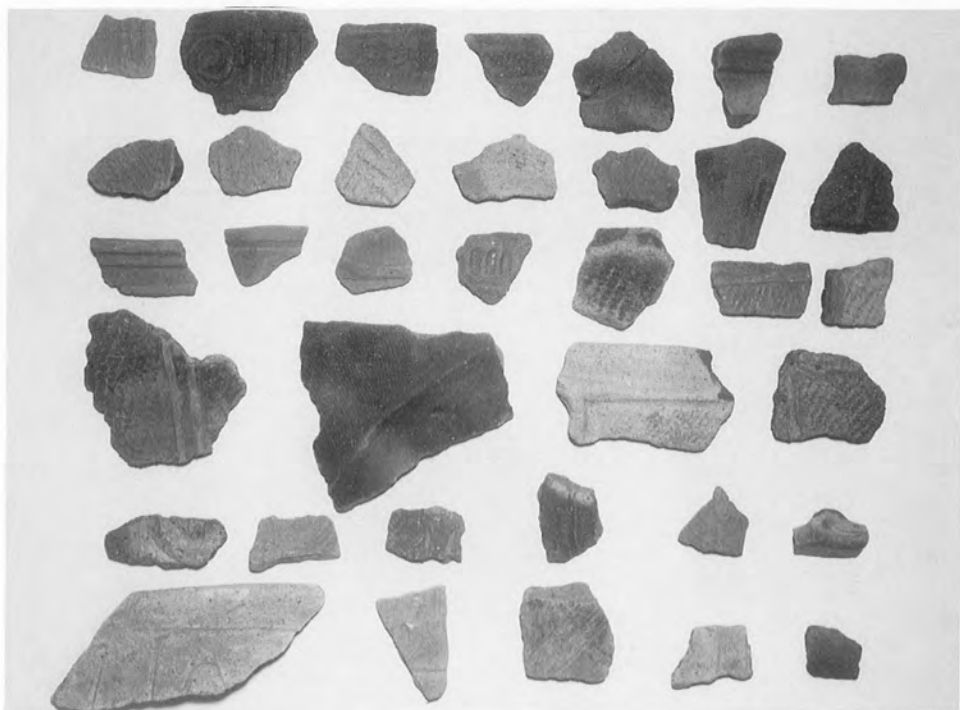
B 1 号土壙出土土器



B 2 号土壙出土土器 (内)



同上 (外)



A区出土土器

写真图版12

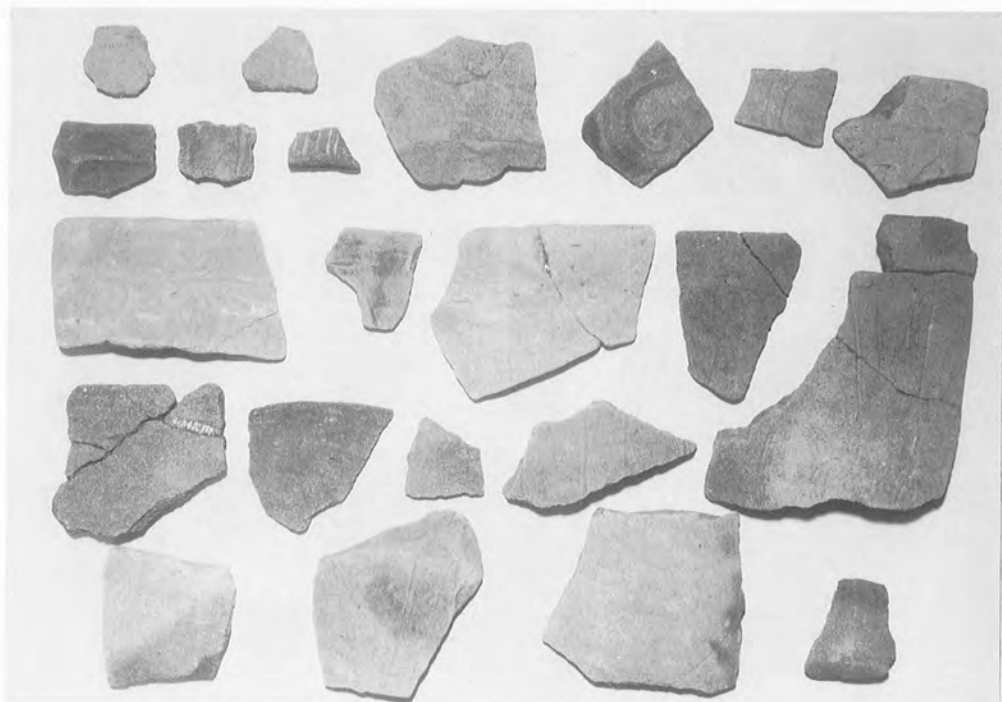
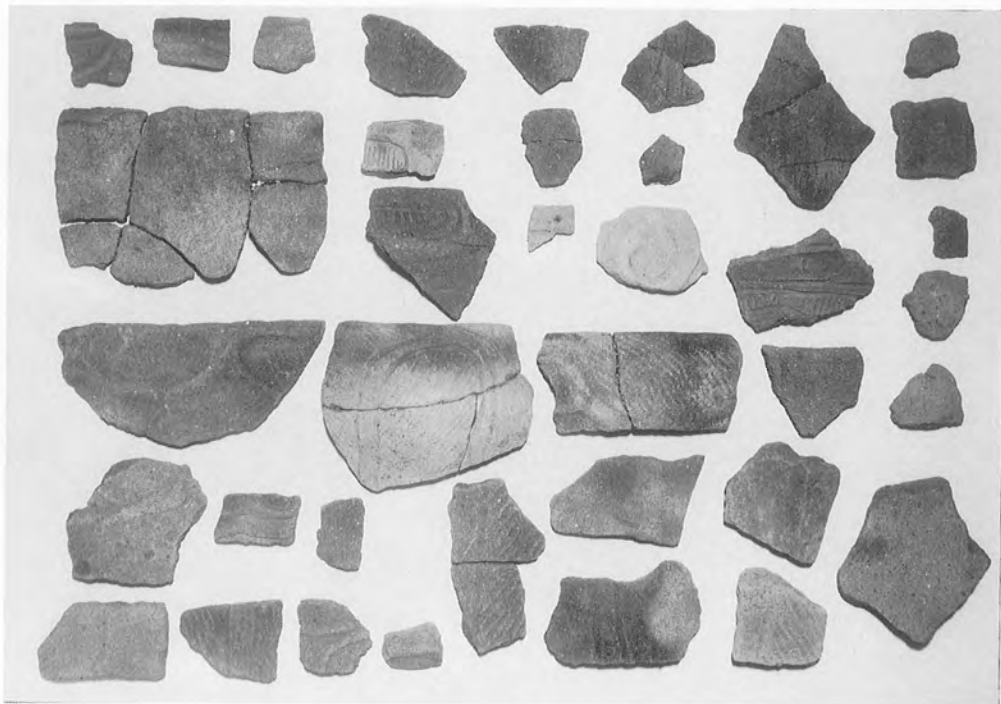


B区出土土器

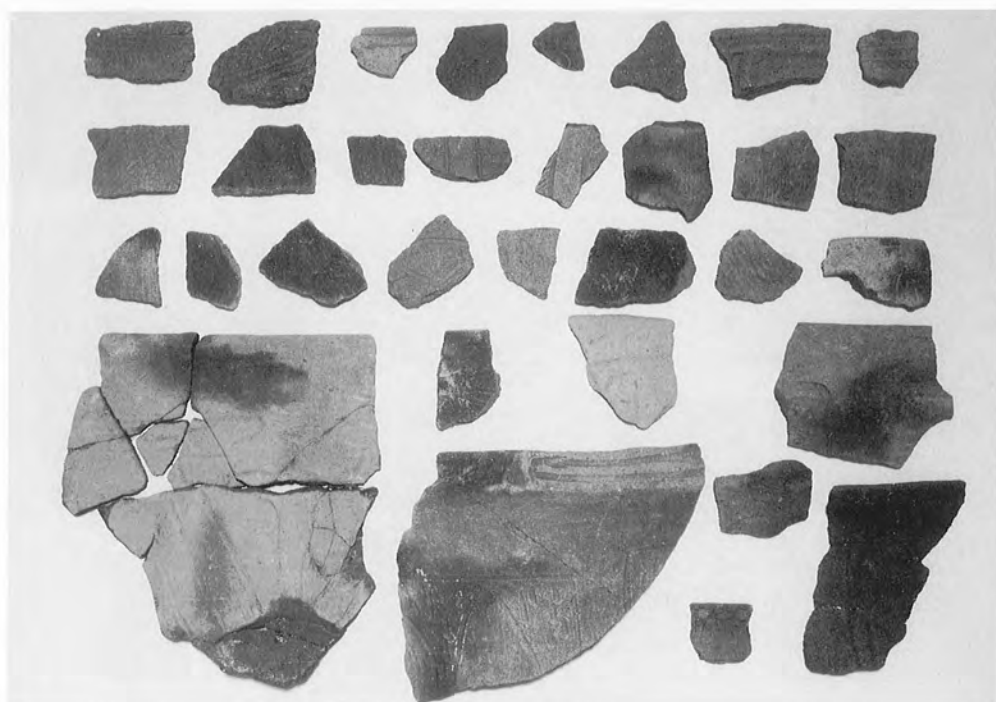
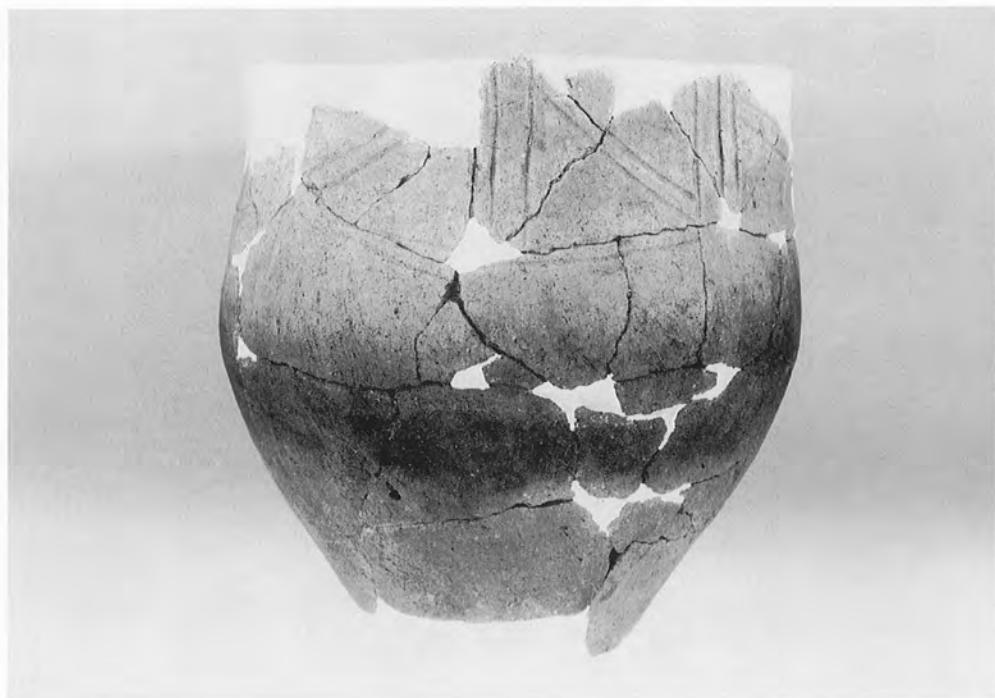


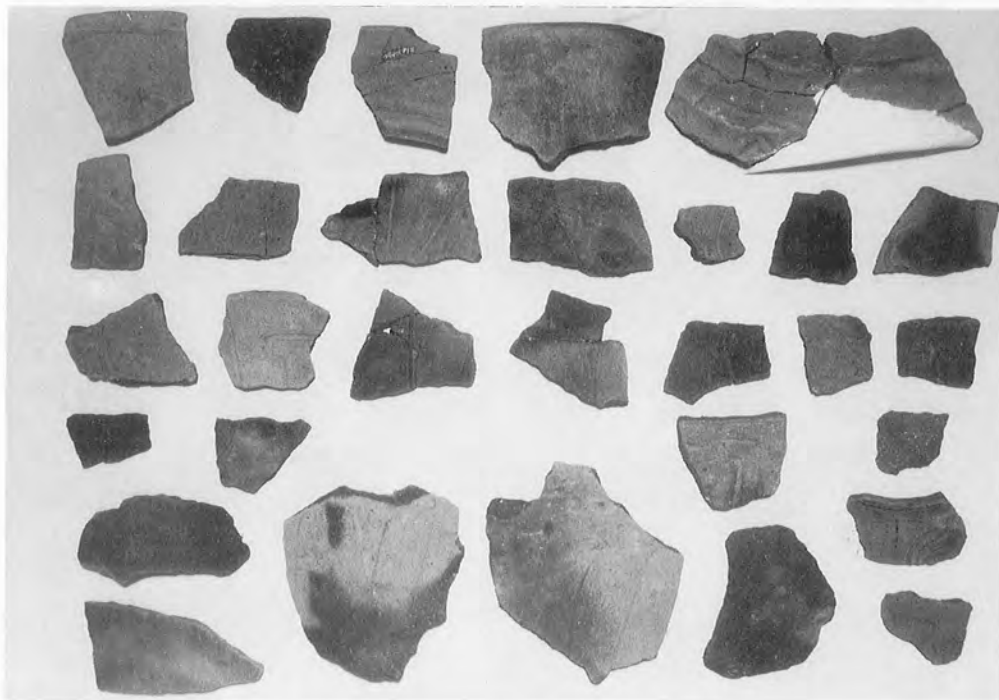
土壙出土土器(1)



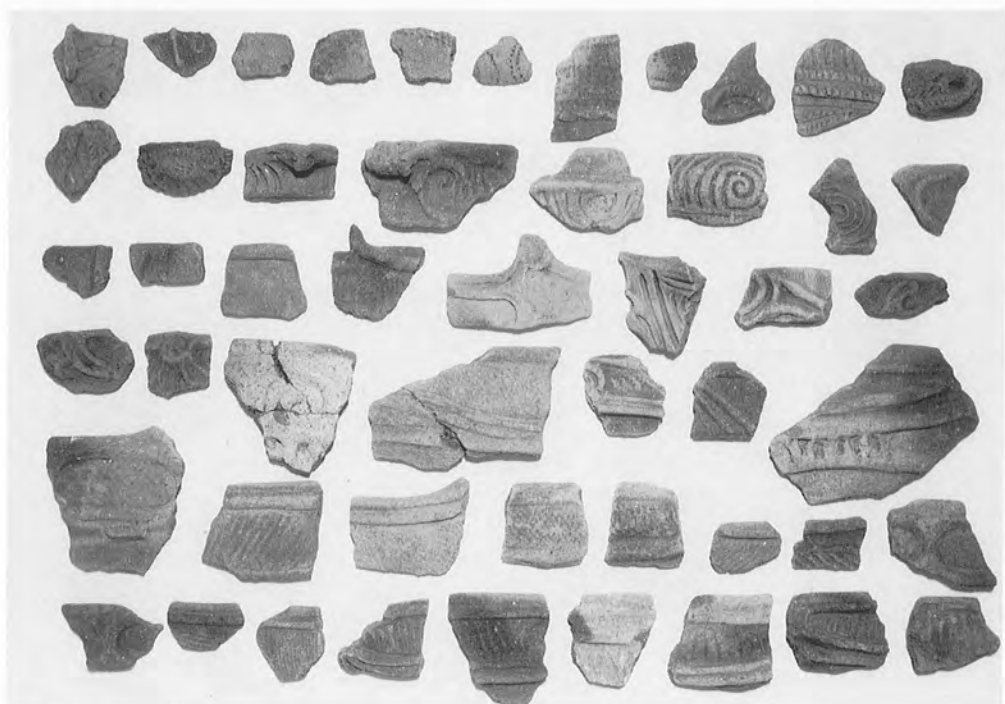


土壇出土土器(3)

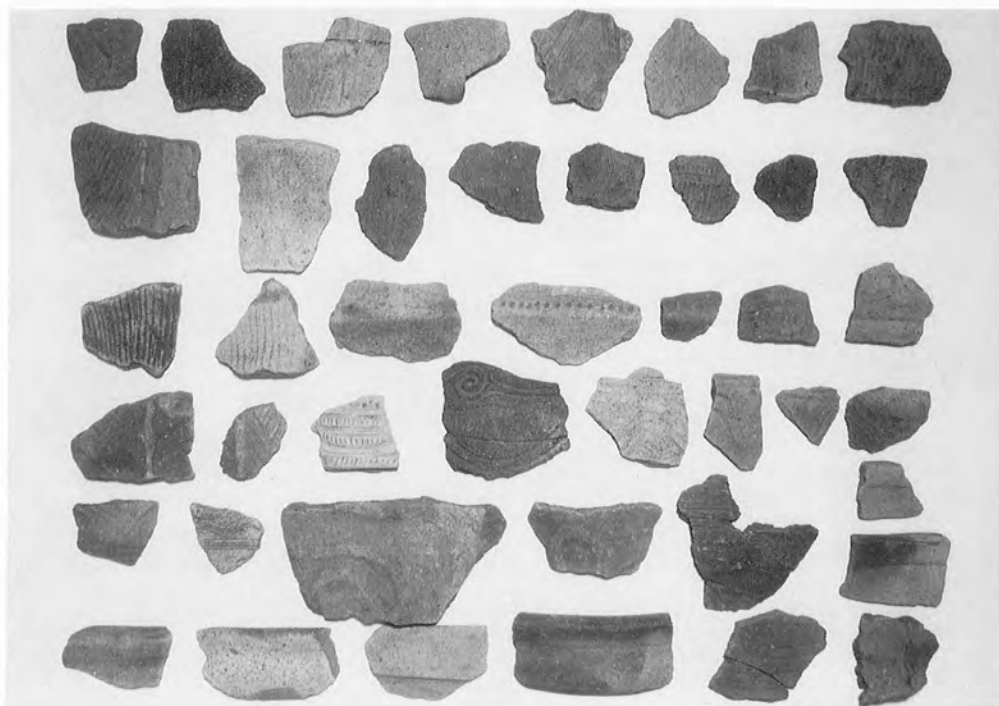
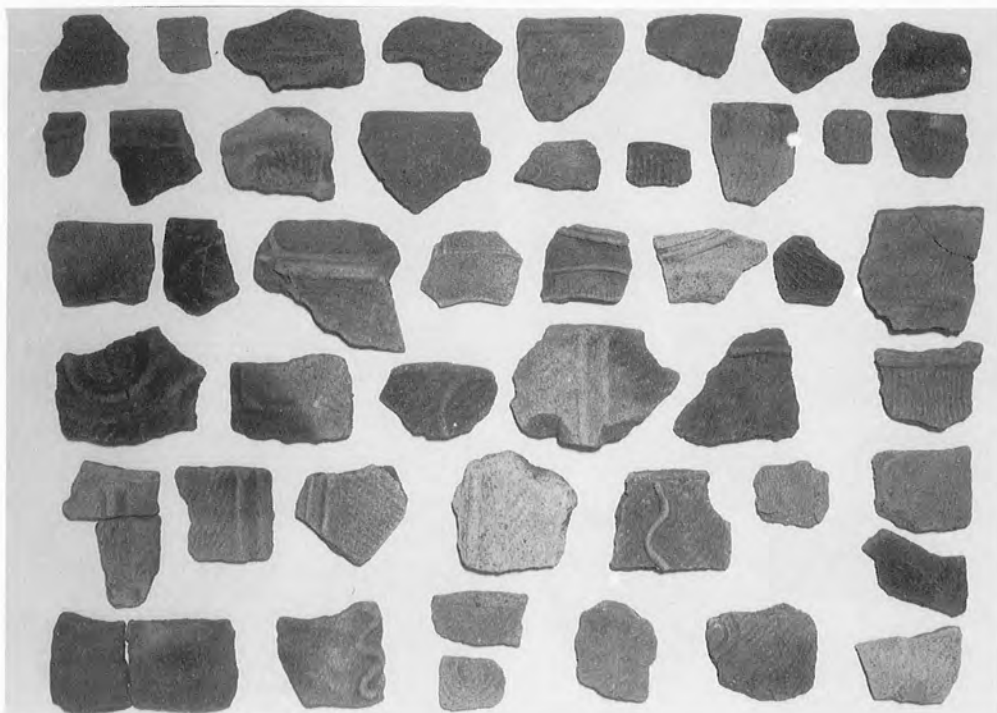


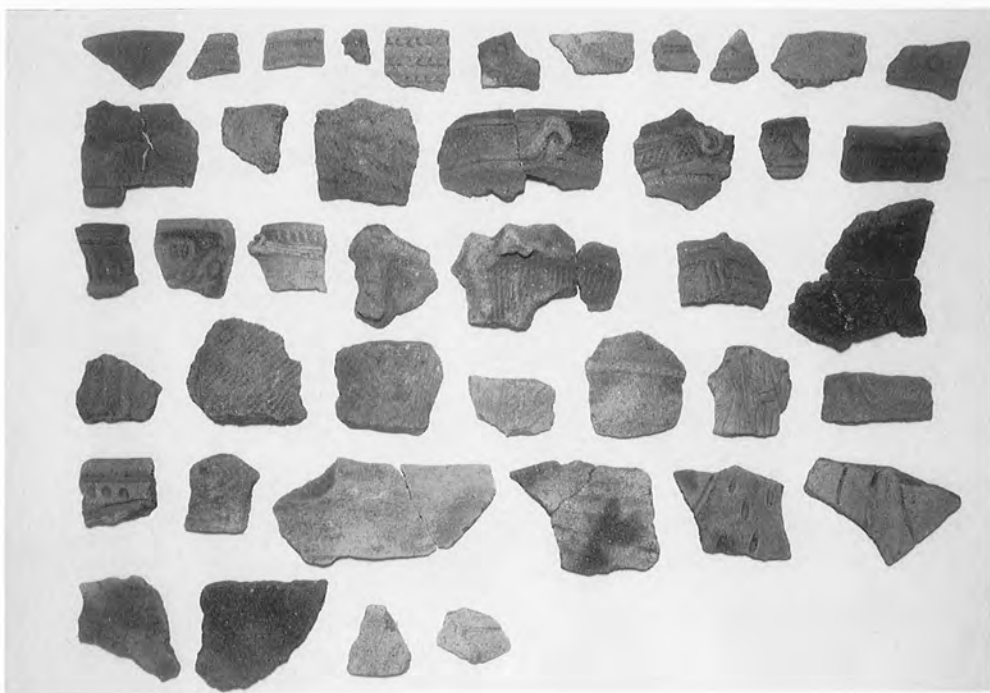
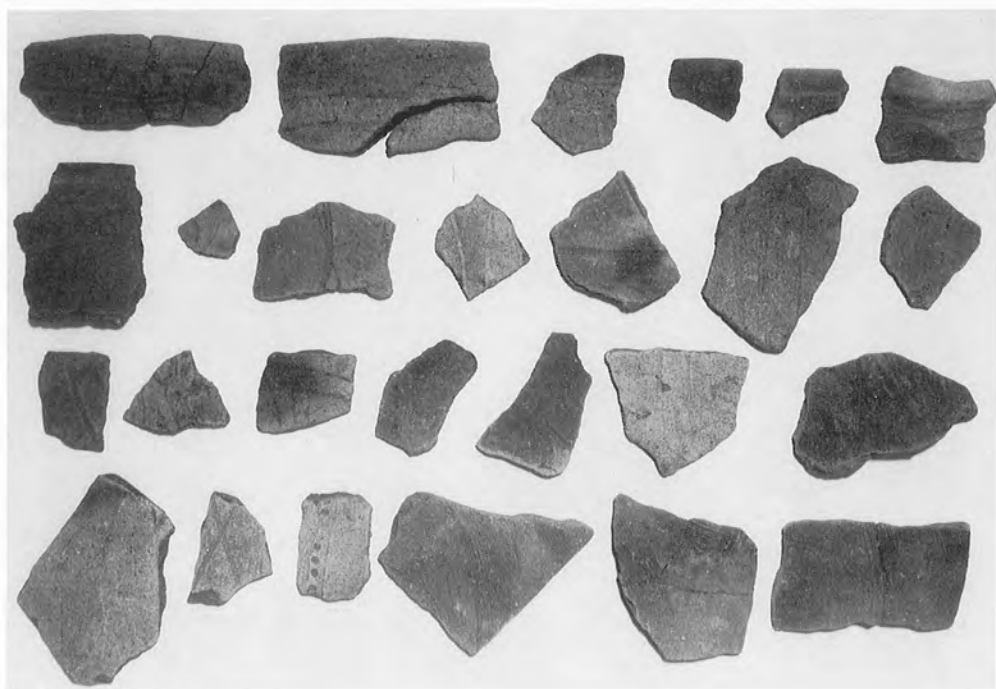


土壌出土土器(5)

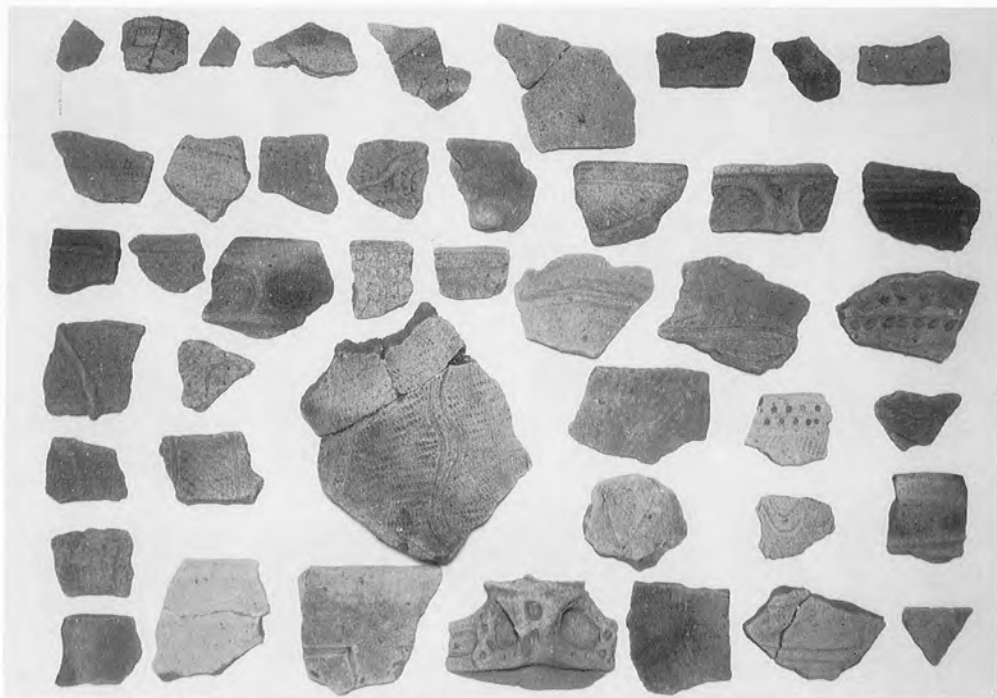


トレンチ出土土器(1)

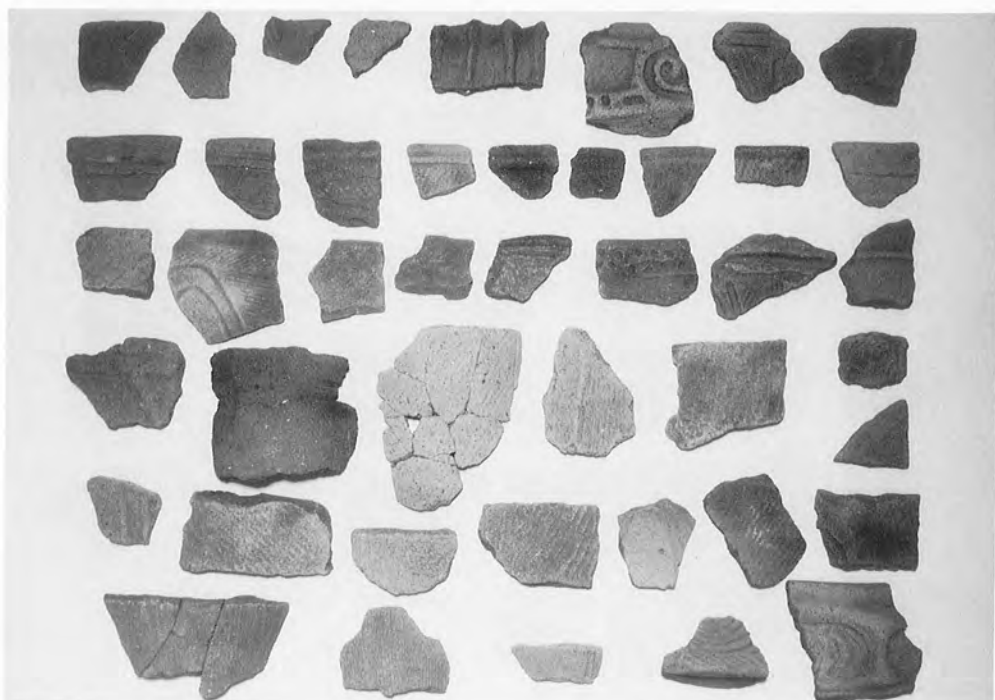




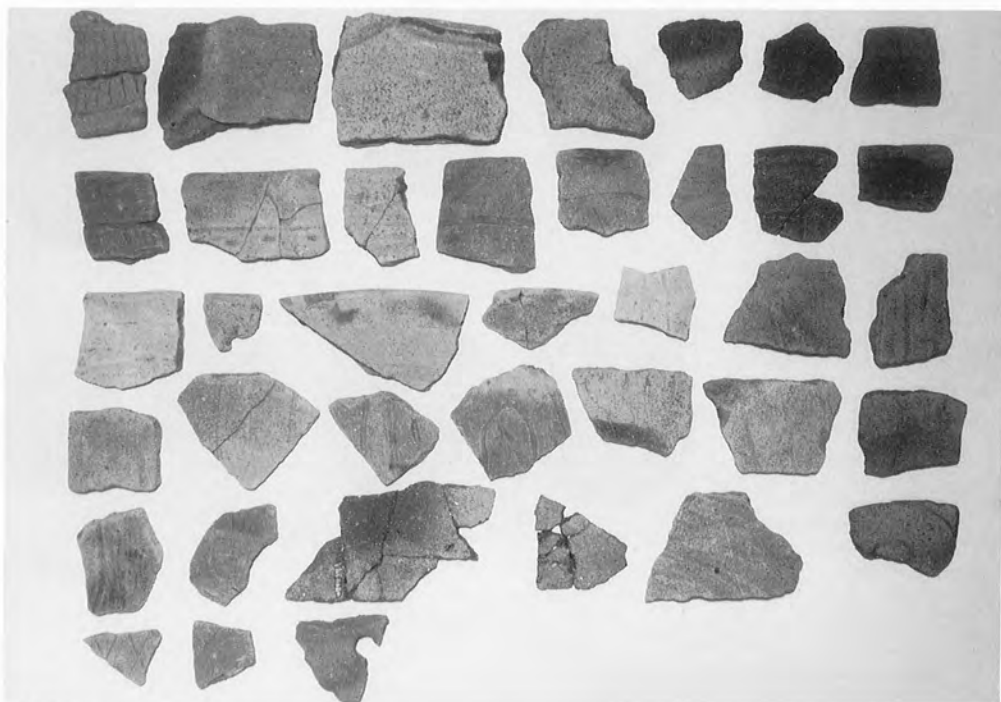
トレンチ出土土器(3)



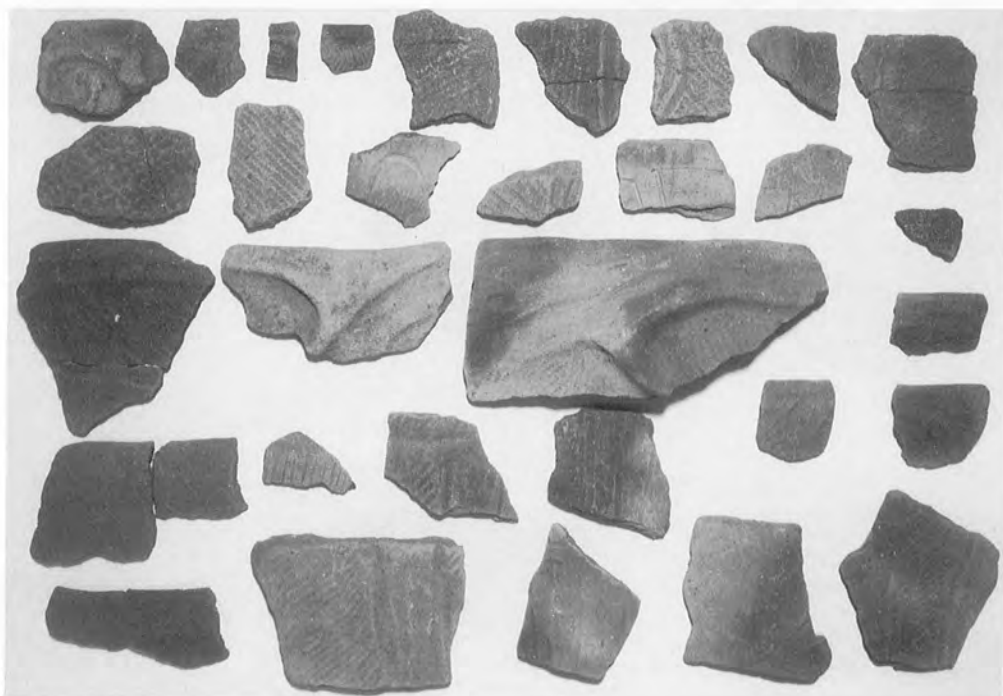
トレンチ出土土器(4)



表採土器(1)



表採土器(2)

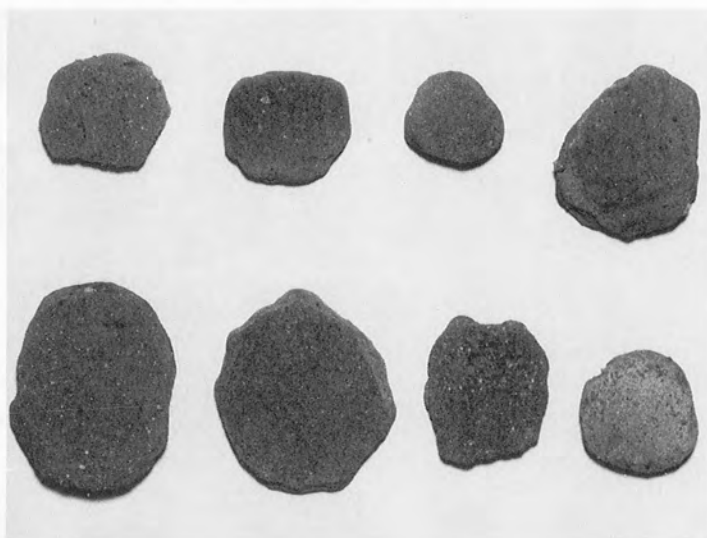


倒木痕出土土器

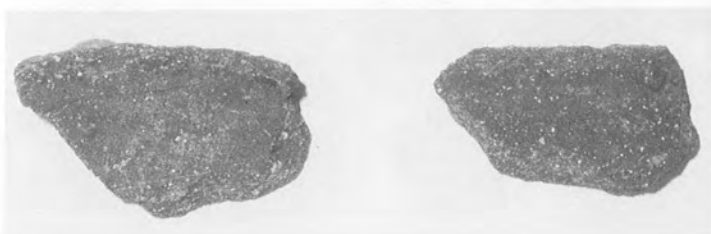
写真図版22



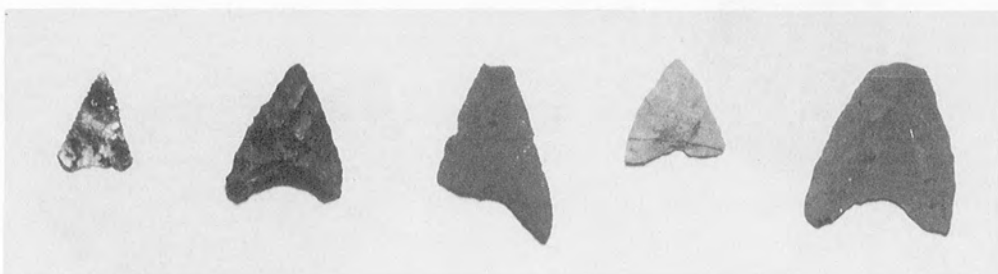
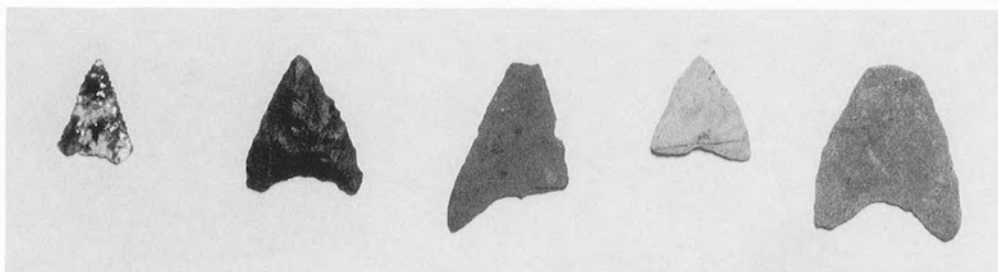
土製耳飾



土製円盤



赤色塗彩土器



遺構出土石器（表・裏）



トレンチ出土石器（表・裏）

写真図版24



トレンチ出土石器



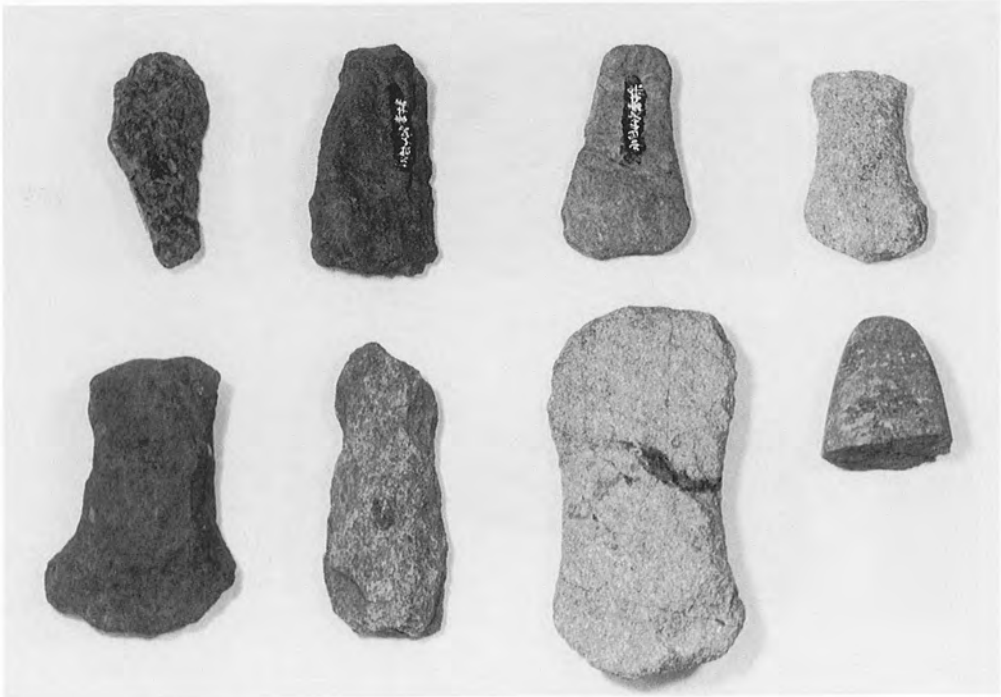
A区出土石器（表・裏）



B区出土石器（表・裏）







トレンチ出土石器



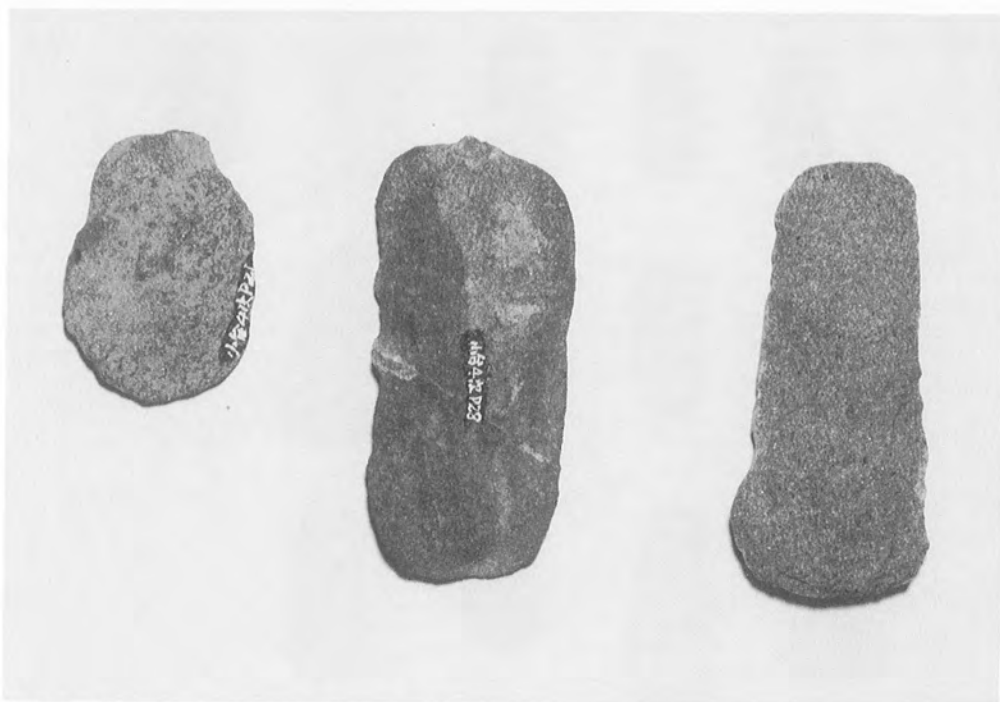
トレンチ出土石器



表採石器



表採石器



倒木痕出土石器

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第24集

小台遺跡(第4次)

印刷 平成2年3月24日

発行 平成2年3月31日

発行 深谷市教育委員会

印刷 大屋印刷株式会社
